
僕は君の事が.....

ネギ抜き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は君の事が……

【Nコード】

N8966T

【作者名】

ネギ抜き

【あらすじ】

彼女とのデート中に異世界に飛ばされてしまった大貴は退化して赤ちゃんになっていた！

その後、孤児院に拾われた大貴はそのまま孤児院のお世話になる。こちらの世界に来ているかもしれない彼女の彩花を探してもう一度会いたいという思いを馳せつつ生活していく大貴。その中で自分たちの他にいる孤児や奴隷という存在とその扱いを知って憤る。

大貴はもう一度彩花に会えるのか？

元の世界に帰れるのか？

この物語は異世界もので主人公成長最強ものです。

今回初めて投稿させて頂きました。初めてのため語彙が足りずに分かりにくい表現や、文章構成がいきなり変わったたり、ご都合主義になっってしまうかもしれません。

更新は2、3日に一回を予定しています。

それでも見てくださる方には楽しんで頂けるよう努力していきたいと考えています。

それではお楽しみください

p v 2 0 0 0 0 ユニーク 3 5 0 0 お気に入り 4 0 件 越え
ました。ありがとうございます。

本小説は、一話5000字前後を予定しています。

プロローグ1 平穏な日常

梅雨が明けて、地球温暖化の影響で例年よりも蒸し暑い日が続いているある日、真新しい一軒家の一室に二人の大学生が倒れている。一人は床に、もう一人はベッドの上に倒れている。

「あ、暑い。暑いよあ〜」

ベッドに大の字で寝転がっている女性は、『阿部彩花』だ。俺の彼女であり、幼なじみでもある。

彼女を一言で表すなら天真爛漫だろう。

身長は150cmを超えた位で、背中まで伸ばした綺麗な黒髪が、整った顔と健康的なボディラインを引き立てていて、今はその髪を後ろで結んでおりポニーテールの状態になっている。ともかく勘が良く、必要に応じて対応できる応用力とそれを決める決断力の高さは正直羨ましいと思う時さえある。

ちなみに、彼女の座右の銘は「進取果敢」である。彩花をそのまま言葉で表してるよ。

まあ、彩花の紹介はこれぐらいにして俺の名前は『浅沼大吾』だ。自己紹介させてもらつと、現在大学3年生（彩花も同い年）で趣味は、スポーツ観戦と読書。読書は主に、漫画（バトル、スポーツ）とライトノベルをよく読む。で、読んだ事を実際にやってみたりするのが特技かな。色々研究 通信教室等 をした結果、身体的に使えないものとはかく基本はできるようになったよ。……

…たぶん。

座右の銘は「七転八起」で、何事もあきらめなければ何とかかなるっしょ？って感じが好きだからだ。

彩花との関係は小学校にまで遡る。入学式に行く途中で阿部家族に逢い、世間話をしているうちに親達が意気投合してその影響でよく遊ぶようになった。

中学校は地区が違うので別々になったが家族ぐるみの付き合いは

続いていて、毎月一回は食事会を開き近況報告的な事をしていた。

付き合い始めたのは高校3年の夏で、もちろん僕が告白した。意識し始めたのは中学の時からだったが、僕が野球、彩花がテニスに力を入れていたためお互いにそんな余裕がなく高3の夏の夏の県大会で優勝した日の夜に勢いで彩花に自分の気持ちを伝えた。

返事は一週間後に返ってきて僕たちは付き合いだしたが、いやあ、あの時は人生で一番長く感じた一週間だったよ………一緒に帰っても会話はほとんどなかったし、廊下とかであってもスルーされたし。告白したの後悔しそうになったよ。

彩花曰わく「だってお兄ちゃんだと思ってた人にいきなり告白されたんだよ？ 頭混乱しちゃうし、顔見ると恥ずかしくて何も考えられなかったの！！」って事らしい。

大学は二人で話し合った結果同じ国立大学に行く事になった。幸い成績はどちらも良かったため受験は大丈夫だったが、受験勉強で2人で遊べなかった分、大学が決まってからはイチヤつきまくったさ。大学では周りの奴らに「卒業したらすぐに結婚だな。」って冷やかされるくらいにイチヤつきまくってます。

まあこんなノロケは置いといて、ともかく今は長い長い夏休み中です。

「もう我慢出来ない！！ 日本はいつから砂漠みたいに暑くなったの！？ ダイ君涼しい北の国に移住しよう！！」

額から汗を流しながら彩花はムチャクチャな事を言い出した。

「それで涼しい国行って寒くなったらあったかい国行こうって言い出すんだろ？」

そうやって、ダメ出ししてやると頬を膨らまして唸りだした。やっぱり彩花のむくれ顔は可愛いなく。そんな事を考えていると、いつの間にか腕を組んで考え始めていた彩花が、「じゃあ水着買っ海

に行こう！」と言い立ち上がった。

膳は急げと僕の手を引つ張って部屋の外に歩きだす。

しかし今はおやつ時間だ。

水着を買いに行つてから海に向かったら、到着する頃には真っ暗で遊んでいる時間はない。もちろん第一目標は涼しい場所に行く事だが、どうせ行くなら2人で海で遊びたいし。でもここで止めようとするときつとゴネるんだろうなあ。

「ストップ、ストップ！！ 今日遅いから水着買いに行くだけにして、海は明日にしよう？」

「ええ〜。やだよだ〜！」

案の定ゴネやがった。精神年齢何歳だよ！？ 甘えてくれるのは嬉しいけどさ。

「じゃあどうすればいいんだ？」

「うーん、ダイ君が水着選んで買ってくれたらきつと機嫌よくなるよ？」

そう言つて潤んだ目でこっちを見てくる。彩花の究極武器上目遣アルティメットウェポンいが炸裂する。クソッ、可愛すぎる！

「分かったよ。今回だけだかな。」

自分の意見が通ると彩花はニヤツと笑っていた。いつも最後は俺が折れるんだよな。まあいいんだけどさ。

その後、俺と彩花は水着を買いに街に出た。色んな水着を試着しては俺に見せてきたが、最終的に俺の反応が一番良かった青のビキニを買っていた。八千円とか水着高すぎだろ…………

買い物が終わると日がほとんど落ちていたため、二人で夕食を食べる。もちろん俺が出した。から明日の時間を決めてから帰宅した。

「うーん、今日はいい天気だ！」

時刻は午前4時半。迎えが来るまでまだ3時間もある。こんなに早く起きるのもいつもの習慣の為だろうか。

「今日は7時半に来るって言ってたけど、きっと今日も走り込みするんだろうな」

昨日はダイ君に水着買ってもらった上に夕ご飯までごちそうになっちゃった。まあ水着は計算通りだったけど、ご飯は割り勘で良かったのに……

「今日はその分サービスしてあげないとね」

ムンと気合いを入れてからまずはとクローゼットを開くのだった。

少し霞がかかった児童公園では、毎朝と同じメニューを消化する大貴の姿があった。海まで往復20キロを走った後に、筋トレ、通信教室で書いてあったものにアレンジを加えた練習メニューを消化する。

「今日もいい汗かいた！さて、家に帰ってシャワー浴びるか。」

プロ格闘選手も真つ青なメニューを軽く消化した大貴はこれから始まるメインイベントに備えるべく家に戻った。

家に着き海に行く準備を終えた大貴は相棒である赤いノートに乗り彩花を迎えに行った。待ち合わせ十分前には到着した大貴だったが家の前には白いワンピースに麦藁帽子をかぶった彩花が荷物を持って待っていた。

「さすが体育会系！十分前行動は基本だよな」

「遅刻しないようにもう少し早く着く予定だったんだけどね。待たせてごめん。」

「別にいいわよ。どうせ、いつもの化け物トレーニングしてたんでしょ？ ダイ君一体何になるの??」

彩花は苦笑しながら荷物を大貴に渡す。

「別にあれは漫画の技を使えるようになるためにやってるだけで、あえて言うなら趣味だから何になりたいとかはないかな。別にプロ選手を目指してる訳じゃないし。やろうと思えばみんな出来る事だよ。」

「あのメニューを趣味でやってるダイ君は十分普通じゃないとおもっよ。はあ……」

彩花が呆れるようにため息をついた。

「まあ、続きは車の中で出来るし行こうか。今日はよろしくね」「こちらこそ、じゃあ行こうか。」

車に乗った二人は数十キロ離れたリアス式海岸目指して出発した。

プロローグ2 渦潮（前書き）

一週間と言っていましたでしたが早め上がったのであげました。

プロローグだけでp v 5 4！ 嬉しいです！ たくさんの方に読んで頂けるようにお気に入りに入れてもらえるようにこれから頑張ります（、、ゞ

また、感想等があったら是非送ってください！

プロローグ2 渦潮

車に乗る事約二時間。俺と彩花を乗せた車は目的地まで後数十分という所まで来ていた。

「たぶんこの山を越えれば海が見えるよ」

運転している俺は、隣で楽しそうに歌っている彩花に声をかける。「二人寄り添ってある〜いて〜 永久の愛を形に〜して…… えっ、もうそんな所までできたの？」

「歌うのに集中しすぎだよ。ここに来るのも6年振りかな？」

「そうだね〜、もう6年もたっちゃったんだね〜」

今日行く海は俺達が中学生の頃まで親に連れてきてもらった海だ。この砂浜は、この付近の穴場になっており運がいいと夜に海ガメが産卵のために浜に上がってくることもある。何を隠そう、小学校六年生の時の自由研究はウミガメ観察日記である。最近の自由研究では珍しいんじゃないかな？

その場所には俺たちが初めて遠出した場所、はじめて二人だけの秘密ができた場所、はじめて泳げるようになった場所、たくさんの初めてが詰まった場所だ。毎年のように来ていたが、俺たちが高校生になって部活動が忙しくなったり、うちの親が仕事で忙しくなったりといった理由で来なくなっていた。

ちなみに、うちの親は父親が消防士でレスキュー隊に所属していて、母親がプログラマーで某オンラインゲームの設計チームに所属していたそうだ。彩花の父親は警察官で機動隊に所属、母親はプロの調理資格を持っており、近所で料理教室を開いている。

「懐かしいな… 彩花が海の中でおもらしして泣いちゃった事とかな」

「ちよっ、それは忘れてって言ったじゃん!？」

「別にいいだろ? 今じゃ懐かしい思い出じゃん」

「それでもダメー!?!」

彩花はあまりの恥ずかしさで顔を赤く染めながら限界まで叫んだ。

それから数分後、海岸近くの駐車場に車を置いた俺たちは、俺が荷物を持って行って砂浜へ向かい、彩花は車で水着に着替え始めた。「さーて、これからなにしようか考えるか……………」

俺はこれからのことについて考えながら誰もいない砂浜にビーチパラソルをさした。

「ダイ君おまたせ」

声が出た方向に振り返ると着替え終わった彩花がいた。昨日買った青いビキニに背中まで伸びた黒髪が引き立てられて絶妙のバランスが成り立っている。そこに、熱く照らす光と蒼い海が背景になっているのだ。まるで、映画のワンシーンのような光景に思わず声が出てしまった。

「……………綺麗だ」

「えっ？ もうっ、お世辞はいいからダイ君も早く着替えなよ」

本当に綺麗だと感じたから出た言葉だったんだが彩花には冗談だと思われたようだ。しょうがない、早く着替えるか。

彩花 side

「……………綺麗だ」

「えっ？ お世辞はいいからダイ君も早く着替えなよ」

（もうっ！ いきなり綺麗だなんて恥ずかしいよ）

私は大貴に悟られないように表情に出さないように気を付けているが、内心はかなり喜んでた。普段はお世辞の一つも言ってくれ

ない唐変木くわんぺんぼくが、いきなり褒めてくれたのだ。完全に油断していた彩花はそれを表に出さなかっただけでも称賛に値する。

（本当に、油断してるといつもこうなんだから……… まあ、すごくうれしいんだけどそれを表情に出すと負けた気がするんだよねー）
大貴は実績や人間性などほとんどの分野で大きく彩花に劣っていると考えているため少しでも釣り合うようにと努力しているようだが、彩花からすれば逆に自分が劣っていると考えており、少しでも大貴に近づこうとしている。そのため、たまに素直になれないときが出てしまうのだ。

（まあその分たくさんサービスしちゃうんだから覚悟してよね！ 私ファイトー！！）

そんな事を思っているうちに大貴が服に手をかけていた。車の中で着てきていると言っていたのでただ服を脱ぐだけですぐに終わるだろう。服を脱ぎ終えた大貴は黒に赤い線の入った競泳水着を着ていた。しかしそれよりも目を奪われたのは大貴の鍛え抜かれた身体である。上半身は余計な脂肪が付いてない見事に六等分された腹筋に分厚い胸板、腕回りも美しい形になっている。下半身は毎日トレーニングしているだけあって某モビルスーツのような足まわりになっている。いずれも長年の成果が出ていると言える。

私はその努力の結晶の美しさに見惚れてジッと大貴を見つめている。

「ん？ そんなにこっちを見て一体どうした??」

「ううん、なんでもないよー ただ、やっぱりダイ君はかっこいいなーって思ってただけ」

「ツツツ!!! いきなりそんなこと言うなよな!!」

私が満面の笑顔で褒めると、恥ずかしさで顔を真っ赤にしながら脱いだ服をたたみだした。

そんな姿を見て、私は自分の気持ちを再確認するのだった。

（本当にかっこいいんだから、大好きだよ、ダイ君）

(くそっ、さっきのお返しなのか？ 彩花があんなこと言うときは必ず裏があるからな)

そそくさと服を片づけた俺は、さっきの彩花の言葉にどういう意味があるのか腕を組んで考察していた。彩花のあの言葉はさっきの大貴の言葉同様裏のない言葉だったのだが本人しか知る由もない。

「ねえ、ダイ君にお願いがあるんだけどいいかな？」

「なっ、内容にもよるかな」

俺は、ほら来た！！ とビクつきながら答えた。その態度に、彩花は少し不機嫌になり唇を尖らす。

「なんでそんなに警戒してるの？ 私なんかしたっけ??」

「いつ、いや何もしてないぞ！ それより願いは何だ？」

彩花は返答に釈然としつつも持ってきた荷物から琥珀色の瓶を取り出して俺に渡してきた。

「??? これをどうするんだ？」

「今から横になるから背中に塗ってほしいな」

そう言っつて彩花はシートを下に敷いてうつぶせに寝そべり、ビキニのひもをほど出した。

(なんでだ？ なんでこんな状況になってんだ?)

俺はこの状況についていけず瓶をもって立ち尽くしてしまう。

「ねっ準備出来るから早く塗ってよ」。遊ぶ時間無くなっちゃうよっ」

「わっ、分かった。これを背中に塗ればいいんだな？」

「そうそう 均等に塗ってね」

俺は、容器のふたを開けると彩花の背中にオイルを満遍なく垂らした。効果音はどばーだ。

「冷たー！！ いったい何してるの!?!」

彩花は、水着を腕で抑えながら起き上った。相当驚いたようで、涙目になりながら俺をにらみつけてくる。

「いや、俺やり方知らないし均等になって言われたからとりあえず背中に垂らしたんだけど……」

「まずは手に垂らして手で温めてからぬらなきゃだめなの！」

「ごっごめん。次は気をつける」

俺は謝ると同時にすぐさま体を90度に曲げた。

「ふー、まあいいや。ちよっとびっくりしただけだったし。それじゃあ続きよろしくね」

そういうと、彩花またうつぶせに横になった。

(しかし、これをどうしろって言うんだ)

俺の目の前には、無防備に背中を出して寝転がっている彩花がいる。いつもの彩花でも緊張するのに今回は肌を出しているうえにオイルが妖しく光っている。もう少しで21歳になる俺だが、年相応の知識と興味は持っている。なので、この状況はタガが外れそうで非常にまずい。まあ、彩花が俺を信用してくれているのは分かっているので我慢するけどな。

「じゃあ、行くぞ」

さっきのことを反省し声を掛けてから彩花の背中に触れる。

「んっ……」

触れた瞬間彩花がビクツと身体を震わせながら声を出す。

「続けて大丈夫か？」

「うん、ちよっとくすぐったかったただだから大丈夫だよ」

了承をもらったのでまた背中を塗りだした。塗りだしたんだが…

「んっ… あっ……」

(そんなこえだすのはやめてくれー)

そんな感じで俺の生殺し時間が過ぎて行った。

最終的に彩花の厭らしい声を我慢したおかげで無事終わった。そ

のあとは、そのまま他愛もない話をしていたがそれだけで時間をつぶせるはずもなく話題がこれから何をするかに変わった。

「ねえダイ君、これから勝負しない？」

「別にこのまま話してもいいだろ？」

「体動かしたくなっちゃったの。どうせやるなら勝負事のほうがいいんじゃない？」

「まあそれはそうだが……せっかく塗ったオイルが落ちちゃうんじゃないのか？」

「それぐらい大丈夫よ。勝負したくないの？」

俺はこのまま話しててよかったんだけどな。と思いつつ彩花の意見にうなずく。

「で、なにするんだ？砂浜ダッシュか？それとも、泳ぎで競争か？」

「うーん、ダッシュだと分が悪すぎるし泳ぎにしようか。ちよつどあそこに小島があるし」

「わかった。小島までの往復勝負でいいか？ハンデはどうする？」

「往復は望むところだけどハンデは無し！昔はどっちが泳ぐの速かったと思ってる？」

「いつも俺が負けてたよ……じゃあハンデは無しだな」

「当たり前よ！それじゃあ勝負はじめるよ」

そういうと、彩花は泳いでる最中につらないように準備運動を始めた。俺も、彩花にならって身体を伸ばし始める。

小島までは約50メートルだから往復100メートルか。長すぎるとどうしても地力で勝っている俺が勝ってしまうからいい勝負ができそうだな。実際、高校までの水泳の勝負は俺が負け越しているし気が抜けないな。

「今から携帯のカウントダウン機能使うから音が鳴ったらスタートね。ゴールはシートの荷物に先にタッチすること。負けたら勝ったほうの言うことをひとつ聞くこと。これでいいよね？」

「いいよ。じゃあスタートの合図よろしく！」

彩花が携帯を置くとカウントダウンの音が始まった。

ピッ 5秒前 彩花がスタートの構えを作る。

ピッ 4秒前 俺も彩花に習い地面に手を置き腰を上げる

ピッ 3秒前 彩花の方をチラッと見ると集中した顔になっていた。どうやら本当に真剣勝負のようだ。

ピッ 2秒前 俺の頭が真っ白になっていく。久々に彩花との勝負が出来るし悔いを残したくない。

ピッ 1秒前 筋肉繊維の1本1本が盛り上がっていく。後はスタートのタイミングだけだ。

ピーー 音と同時に2人同時にスタートを切る。向こうもいいスタートが出来たようだ。

走り出した俺達はすぐに海に入る。俺の方が身体が大きい分どうしても水の抵抗を受けてしまう。そのため、腰まで海に浸かると一度潜りドルフィンキックで再度加速する。彩花は太もも付近まで浸かった所で泳ぎ出していたためすでに先行されている。俺は加速が十分になってから海上に上がり古式泳法通称「伸泳」と呼ばれる泳ぎ方で追撃する。伸泳とはクロールに似た泳ぎだ。クロールに比べて無駄な息継ぎや身体の動きが少ない。身体がデカイ俺には最適な泳ぎ方であった為良く練習していたのである。

彩花は、現在バタフライで俺の3メートル程前を泳いでいる。バタフライは、人の泳ぎ方の中で一番速い泳ぎ方だと言われている。一般人の人は体力が続かずすぐにスピードが落ちてしまうが、彩花は全国区のテニスプレイヤーだったのだ。今は、テニスはしていないがダイエツトだと言って俺と一緒にトレーニングは続けているため体力は落ちるところか昔よりも上がっているように見える。

そんな彩花だがバタフライからクロールにシフトチェンジしたようだ。しかしこれはバテて変えたのではなく体力を調整しているのだ。今泳いでいるのはプールではなく海である。プールと違い波は不規則な上にプールよりも冷たい。しかも戻りの時は波に逆らって泳ぐのだ。ここで体力を温存しないと途中で失速してしまうかもしれないのだ。そういう戦略性はさすが彩花だと思う。 ちょうど小

島にさしかかった時、彩花との差は1メートル程になっていた。小島にタッチした彩花はそのまま前転し小島を蹴る。そこから身体をひねり折り返した。見事なクイツクターンだ。俺も、同じくクイツクターンで折り返し、彩花に追いつこうとする。さすがにこの波に逆らって泳ぐのはキツイだろう。残り25メートルという所でようやく、彩花に追いついた。泳いでいる彩花は息が荒く明らかに体力が減っている。こちらは申し泳法のおかげでまだ体力が残っている。地力のさで俺が勝つだろうと思っていた。だがそれは甘かった。

彩花は俺が追いついたのを確認するとニヤリと笑い海に潜った。ここからバタフライでスパートをかけるのかと思ったが全く浮いて来ない。どうしたのかと思い少し潜ってみると隣にいたはずの彩花が前を泳いでいる。潜水で泳いでいるのだ。すでに15メートルをきつておりこちらでも伸泳からバタフライに変えてスパートをかける。しかし、もう少しで近づくという所で異変が起きた。

いきなり前に進まなくなってしまったのだ。後ろを見ると20メートル程小島から離れた場所に渦潮が出来ていて、それに吸い寄せられている。

(ヤバい！ 早く陸に逃げないと！！)

出来るだけ渦潮から離れようともがくが体力を使い切ったせいか、どんどん渦潮に引き寄せられる。その間に彩花がゴールしようとしていたが俺が来ない事に気付きこっちに振り返った。

「ダイ君ッ！？ ダメ！ 逃げて！！ 私も今助けに行くから諦めないで！！！」

そういうと同時にこちらに向かってきた。

「来るなっ！ ガボツ 彩花まで巻き ゲホツ 巻き込まれる！！」
しかし、静止も聞かずにどんどんこっちに向かってくる。俺も徐々に引き寄せられ、すでにデッドラインを越えてしまっている。

「もういい！ 無理だ！ 戻れ！！ 戻ってくれ……………」

「いや、イヤ、嫌！ ダイ君が死ねなんて絶対に嫌ッ！！ 私か勝つんだからちゃんと言う事聞かないと怒るよ！？」

彩花は海水と涙で顔をクシャクシャにしながらなおも俺を助けようとしている。

（本当に彩花はムチャばかり言うよな）

こんな状況なのに俺は笑っていた。もう動く体力がほとんど残っていないので笑うしかないと言った方が正しいのかもしれない。

（もう渦潮に巻き込まれてるからどんなことがあっても助からないのに……）

俺は体力が完全に切れ渦潮の流れに身を任せるだけになってる。もう渦の中心部も目の前だ。

「彩花っ！！！！………幸せにな」

この一言が言えただけでももう満足だ……

「いやああアアア！！！！」

海中に引き込まれたショックで気を失う直前彩花がこっちに泳いでくるのが見えた気がした。

渦に飲み込まれた大貴と彩花はそのまま海の中に消えた……

第一章 1 発見（前書き）

どうも！

この前2話目を投稿してからPVが170越えました！！1話から3倍近く上がりました。

読んでくださった皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです！

今回は、主人公の大貴はあまり出てきませんがそれでも見ていただければ幸いです。

これからも、できるだけ質を落とさないように早く挙げていきたいと考えています。

皆さんよろしく願います！！

第一章 1 発見

2つの赤い太陽からの日光で生い茂った木の影が辺りが薄暗くなっている獣道を、2人の子供が木製の桶と布の袋を持って歩いている。子供達は、現在水の蓄えが無くなってきたので川に水汲みに向かっている。

1人は茶色の短く切られた髪に薄青の瞳をした小さい男の子。頭には耳がついていてピョコピョコ動いている。

もう1人は、赤い髪を三つ編みに結んで、茶色の瞳をした女の子。耳は人のような丸い形ではなく少し尖っていて身体は褐色だ。

2人とも所々ほつれて汚れている服を着ており、生活の苦しさを物語っている。

「さーて、今日の夕ご飯は何にしようかな？ 昨日はベビーラピッドの丸焼きだったし、今日はリバーをさばいてサラダをつけようかな？」

「ええ〜野菜はいらないよ。お肉だけにしよう？」

女の子のつぶやきに男の子が苦言を示す。

「だーめっ！好き嫌いはダメって言ってるでしょ！！それに、ケインは男の子でしょ？たくさん動くんだからその分食べないと後で食べれなくてお腹空いちゃうよ？」

「む〜、アリス姉のイジワル…」

アリスに言い負かされてしまいケインはむくれてそっぽを向いてしまった。

「この後の夕ご飯作る時も手伝ってくれたらお肉少し多くしてあげるよ」

「本当！？」

ケインはアリスの言葉に目を輝かせ川の方角に走りだす。そのまま数メートル進むとこちらに振り返って私を呼んだ。

「アリスも早く早く〜」

アリスはそんなケインを見ながら早足でついて行った。

川沿いについたアリスとケインは、桶に水を汲んだ後に今日の夕飯の予定であるリバフラの捕獲にかかった。

リバフラは川に生息していて体長20センチから30センチ位のものが多い。たまに50センチメリの大物もいる私たちの主食のひとつだ。特徴は長い後ろ足と舌で捕まえようとすると長い後ろ足を生かしたジャンプで逃げてしまう。反撃してくる事はほとんどなく、1人でも捕まえられるが、知能が低いため、2人で追い込んで捕まえたほうが楽なのである。捕まえた後は紐で足を縛って袋に入れて持って帰るようにしている。

約半刻ほど過ぎた頃、10匹ほど捕まえた私たちは、サラダに使う山菜を採りに少し上流に向かった。川の上流には山菜や薬草が多数繁殖していて私たちだけが知っている秘密の場所だ。今日もいつもと同じように摘んで帰ろうと考えていたが、ケインの声がそんな考えをかき消してしまった。

「アリス姉！こっちに来て!？」

張り切って山菜を探しに森の奥にまで行っていたカリスが大声でアリスを呼んだ。アリスはケインに危険が迫っているのかと思いきいで向かった。しかし、そこにいたのは白い布にくるまれた赤ちゃんだった。

赤ちゃんはすでに頭から黒髪が生えていて、瞳は左目が赤、右目が黒で、腕には金色の腕輪がついていて、「うー」と唸っている。(なんでこんな森の奥に赤ちゃんだけがいるの？誰かが連れてきた?)

周りの気配を探るが人の気配がなく、なんでこんな所に赤ちゃんがいるのか考えに耽っているとケインがこちらの顔色を伺うように上目使いに訪ねてきた。

「ねえアリス姉、この子どうしよう?」

「うーん、このまま置いてはいけないしとりあえず連れて帰ろうか。」

私が赤ちゃんを連れて行くから、ケインはリバフラと水を持って先に帰って。そして、お母さんに赤ちゃんの事伝えておいて」「わかった。じゃあ先に帰ってるね。伝えたらすぐに戻って来るから」

ケインはリバフラの入った袋と山菜を持って走って行った。

アリスはケインを見送った後、赤ちゃんをふらつきながら抱っこして孤児院を目指して歩き出した。

「だー、だー！」

「はいはい、今家まで連れて行くからもう少し我慢しててね」

お腹が空いたのか赤ちゃんが私の裾を引っ張りながら泣いているので歩みを速めた。

大貴 side

一体どうなってるんだ？

息苦しさが無くなったと思ったらいきなり森の中だし、何よりも驚いてるのは俺が赤ん坊になってる事だ。

なんで赤ん坊になってるんだ？？

てゆうか、それよりも彩花だ！！

意識を失う直前、俺に手を伸ばす彩花が見えたような気がした。

もしかしたら彩花も無事なのかもしれない。

ああ、いきなりおかしい事が起こり続けたから頭がパンクしそうです。

なんだ？

考えてる間に男の子が近づいて来てたのか

何か叫んでいるが何言ってるのかさっぱりだ

向こうから女の子が来たな

仲間か？

何か話し合ってるな

ん？

男の子がどっか行っちゃった

女の子が近づいて来た

えっ、何？

抱っこしてくれるって事は連れて行ってくれるのか？

待て！

近くに彩花がいるかもしれないんだ、探してくれ！！

頼む、探してくれ！

くそ！

話したくても赤ん坊だから話し掛けられない。腕とか足を動かそうにも間接が固くては動かない

首も短くて回らないし、赤ん坊ってこんなに不便なんだな。せめて話せれば何とかなるのに……

とりあえず、何でもいいから情報が欲しい

彩花を捜す為にもまずは言葉を覚えるのが第1目標だな

待ってるよ！彩花！！

大貴 side out

周囲が森に囲まれた白くペイントされた建物の庭でこの建物の主が菜園に水をあげている。水をあげると言ってもジョウロやホースを使っている訳ではない。空中には水の玉が浮いていてそこから小雨を降らすように水をあげている。

「だいぶ育ってきたわね。もうちょっとすれば収穫できるし、これで食卓も少し豪華になるかしら」

この建物は、孤児院になっており現在は大きな種族に分けると人と魔人と獣人が2人と竜人が1人の計7人の子供達を養っている。

この子供達はいずれも5年前までその4種族の間で起きていた中央戦争の孤児で、戦争が終わってから各地を旅していた私が見つけた子供達だ。

この孤児院の主、マリア・クラインは人の部類に入り現在は27歳。金色の片口まで伸びた髪と碧いクリっとした目が印象的だ。

マリアは5年前の中央戦争に兵士として参加していたが、戦争に関係のない子供達が親を殺され家を失って途方に暮れる姿を見て疑問に思った為、戦争が終わってから孤児院を作った。

ここでは言葉や文字、自分の身を守る技術の基礎を教えていて、5歳になった時に4カ国の戦争調停の際に作られた都市、ピースフルの学校に進学するかどうか決めさせるようにしている。出来れば孤児院だけじゃなくもっと広い世界を見て多くの人と接して欲しいからだ。もちろん進学するかここに残るか個人の見解を尊重している。そうやって、戦争で心身共に傷ついていた子供達が将来幸せな生活を過ごせるようにと言う思いでこの孤児院が生まれた。

そんな、可愛い子供達に出来るだけ色々な料理を食べさせてあげようと旅先で見つけては食用植物の種を手に入れてこの菜園で育てていた。

「アリスにケインはまだ帰ってこないかしら？別に魔法で水を精製しても疲れないのにわざわざ水汲みに行くんだから。ちゃんと褒めてあげないといけないわね。」

私は、熟れてきたレンの実を手に取りながらそんな事を考えていた。すると、孤児院の門の方から切羽詰まったケインの声が聞こえてきた。

「マリアお母さ〜ん!!!」

いつもはあまり大きな声を出さないケインの必死な声に、魔獣が出たか、王国の兵が向かって来ているのかと思った私は、水やりを

中断してケインの元へ走った。私が駆け寄ると、ケインはリバフラが入った袋と急いでいたせいか半分しか水が入っていない桶を持って息を切らしていた。

「マリアお母さん！あのね、すごく大変なの！ええつとね、スッゴク大変なの！！」

「ケイン落ち着いて。何があつたの？アリスと一緒にだつたはずだけどどうしたの??」

とりあえず、興奮していて上手く話せないケインを宥めなつつ質問していく。

「落ち着いた？私が質問するからそれに答えてね。まずはアリスはどうしたの??」

「ええつと、アリスは今帰つて来てる途中だと思つ」
ひとまず落ち着いたケインは簡潔に答えて行く。

「そう。急いでたのは魔獣に襲われたから?」
ケインは首を横に振る。

「それじゃあ、野盗に襲われた?」
これも、首を横に振る。

(魔獣でも野盗でもないとする後は……)

「どこかの国の兵士を見かけた?」
「ううん。あのね、山菜拾っている時に赤ちゃん見つけたから拾つたの」

「赤ちゃんつて魔獣の赤ちゃん?」
「違うよ。多分人の子供だと思つ。アリス姉がここに置いて行く訳にはいかないからつて連れて来るよ。僕はお母さんに伝えるようにつて言われたから先に帰つてきた」

(アリスとケインが山菜を採りに行く場所つて川の上流にある場所よね?そんな所に赤ちゃんだけがいるのはおかしいわ。なにが起きているの?)

私は少しの間色々な可能性について考えたが、結論がでずまずは動く事にした。

「わかったわ。それじゃあ、私はアリスと赤ちゃんを迎えに行ってくるから、ケインはミルクが残っているか確認、シャロン達には赤ちゃんのベッドを準備しておくように言っておいて」

私が指示を出すとケインは元気に返事をして孤児院の中に入ってしまった。

では、私も迎えに行こうかしらね。

孤児院と森をつないだ一本道を赤ちゃんを抱っこしているアリスが歩いていると、孤児院の方から凄い勢いで走ってくるマリアが見える。

マリアは、アリスを見つけると減速してアリスの前で止まった。

「師匠！」

「師匠じゃなくてお母さんでしょ？」

マリアを昔の癖がでてしまったアリスを苦笑しながら注意した。アリスは、マリアが最初に拾った子供で5歳の時に進学を進めたが、マリアの手伝いをしたいと言う事で孤児院に残っている。

初めて会ったのはアリスが4歳になるかどうかの時だったが「マリアさんに弟子入りしたい」と言って、師匠と呼んでいた。

孤児院を立ち上げた時にお母さんと呼ぶようになっていたが、この不思議な出来事のせいか感覚が昔に戻っているようだ。

「まあ今はいいわ。その子がケインが言っていた赤ちゃんね」

「はい！見たところ人だと思っんですけど、黒髪に赤と黒の瞳は今まで見たことがなくて……そのまま放置できないので連れて来ました」

マリアは、赤ちゃんをまじまじと見る。

「なるほどね。確かにこんな容姿は珍しいわね。まあ、近くに人の気配もないしとりあえず院で預かりましようか」

「わかりました！そしたらみんなでこの子の名前を考えないといけませんね！！」

「そうね。じゃあ院に帰りましょうか。もう師匠って呼んじゃ駄目よ?」

「はい、マリアお母さん!」

「その子持つの私が代ろうか?」

「大丈夫です!私に持たせてください!」

元気に返事をしたアリスは、赤ちゃんに「あなたは今日から私たちの新しい仲間だよ!」やら「あなたの名前は何にしようか?」と嬉しそうにしゃべりかけている。

「ただいまー!」

「ただいま、みんないい子にしてた?」

院に帰ってきた二人は、玄関を開けると6人の子供たちに出迎えられる。

「アリス姉、お母さんおかえりー」

「アリスお姉さま、マリアお母様おかえりなさい」

「アリスお姉ちゃん、お母さんおかえりなさい」

「二人ともおかえりー!」

「「おかえりー!」」

院に入ると最初にあいさつを返してくれたのはケインだった。それにシャロン、エリー、シュレーダー、トビアス、ライオットが続いて迎えてくれた。

「お母様、この子が新しい家族ですか?」

赤ちゃんの頭をなでながらニコニコして聞いてくるシャロン。

「この子が私のいもうとになるんだー」

顔を覗き込みながらはにかむエリー

「ちげーよ、弟に決まってるだろ!」

エリーの後ろから赤ちゃんを見るシュレーダー

「「そーだそーだ」」

その横で背伸びをするトビアスとシュレーダーに肩車されている

ライオット

「みんなどいてよ！」

みんなが邪魔で赤ちゃんを見れないケイン

「ちよっ、みんな近づきすぎー！」

みんなが赤ちゃんに詰め寄ってきて驚くアリス

「みんな落ち着きなさい。赤ちゃんが困るでしょ？」

それをみて一度離れさせようと声をかけるマリア

それに「だー！」と、みんなの声に反応する赤ちゃん（大貴）

みんなが一息ついたところでマリアがシャロンとケインに声をかけた。

「シャロン、赤ちゃんの寝るところの準備できてる？」

「はいお母様。今はみんなの寝室に置いてあります」

「ケイン、ミルクの予備は残ってた？」

「はい10デイ分残っていました」

「そう…じゃあ今日は私がご飯を作るから食事のときにみんなで赤ちゃんの名前を考えましょう」

「……………はい！私たち『俺たち』も手伝いますー！！」「……………」

そう言って全員で調理場へ消えていった。

こうして、クライン孤児院に引き取られた大貴は彩花どころかどんな状況なのかも知らない状況で新しい生活が始まった。

第一章 2 怪奇（前書き）

こんばんは！！

前回投稿してから今日までpv300、ユニーク97に達しました

読んでくださった方には感謝の気持ちでいっぱいです。

今回は、少し説明口調になってしまいました。

これからも今よりもいい作品にしていきたいと考えているので、誤字脱字、感想や意見等がありましたらぜひ送ってくださいるとうれしいです。

まだ小説投稿初心者の作者で至らぬところがあると思いますがよろしく願います！！

第一章 2 怪奇

- - - 大貴 s i d e e r - - -

どうも、大貴改め、ライベルだ。

この世界に来てから約半年が経ち、新しい生活にも慣れてた。

あれから彩花の情報は何一つないまま平凡な生活を送っている。

半年も経つと、いろいろ慣れてくるものだな。人間の順応能力は恐ろしい…

この間はいろいろなことがあった。

俺が拾ってもらった後、俺の名前を決める家族会議があったらしくエリーが考えたライベルになった。

赤ちゃんの姿だから名前があるとは言えないし話せなかったからしょうがないな…

次に、立って歩けるようになった！

こっちにきて半月くらいでははいはいでの移動ができるようになり、2か月くらい経ってからみんなに支えてもらったりしたおかげで今では走ることもできる。

あと、言葉が分かるようになり話せるようになった！

こっちは、1週間くらいで日常会話はわかったんだが、話そうとしても「だー」やら「あー」しか言えなくて大変だった。

赤ちゃんの俺が数ヶ月で話せるようになってみんな驚いていたが、弟の成長は嬉しいようで頭を撫でててもらったりして褒めてもらった。いや、いつも出来てた事が当たり前に出るって嬉しいよな。話せるようになってまずは、俺を見つけたアリスとケインにそれとなく自分の他にあの場所には誰もいなかったのか聞いてみた。

けれどあの時は俺以外に人の気配は無く誰もいなかったみたいだ。こればかりは2人を責めることはできないし、自分で探すしかないな。

腕輪のことについては現在マリアさんが調べてくれているそうだ。

俺が成長するとともに腕輪も大きくなってるみたいだし、何かありそうだ。

次に、ここはどこかって事だったんだが、俺がいた世界ではないみたいだ。まあ、褐色肌に漫画や小説で見たエルフみたいに耳が尖っているアリスとキレると竜化するとシユレーダーとか頭に獣耳がついてるケインとか見たら薄々違う世界かなって感じていたけどな。この世界には、大きく4つの種族で分けられて、人、魔人、竜人、獣人に分けられるらしく、それぞれの種族事に生活しているらしい。各種族には特徴があつて、人族は手先が多種族よりも器用で道具を作るのが得意。

魔人は、マナの内包量が多く魔法が得意。

竜人は、身体能力が高く、竜化する特殊能力があるがマナの内包量が少ない。

獣人は、頭の回転が早く、罠や策を作るのが得意。

もちろん、各種族個人差があり人族にも身体能力が高いものがいれば、マナの内包量が多い竜人もいる。要するに人それぞれって事だな！

約5年前までこの4種族が国土を広げようとする中央戦争があり、その和平調停のシンボルとして4種族の国境を跨がって存在する第5の都市ピースフルが作られたそう。

それで、今俺が住んでいるこの場所はクライン孤児院って言う所でマリアさんが戦争の被害を受けて家族や家を失った子供達を見つけてはここに連れて来て育てている。

ちなみに、この孤児院は院長のマリアさんの他に子供が俺の他に7人いる。

副院長的存在で子供の中で一番年上（9歳）で魔人のアリスアリスの次に年上（5歳）で常に礼儀正しい人族のシャロン。

青い瞳に少しロールのついた髪が印象的で礼儀正しさも相成って良家の令嬢に見える時もあります。シャロンは、すでにピースフルの学校に進学する事が決まっているため、一緒にいられるのも後半

年くらいでちよつと寂しいな。でも休みには帰ってくるらしいし学校の話も聞けるので我慢しよう。

孤児院のムードメーカー的存在で獣人のケイン（4歳）

ケインと同じ年で男子組のガキ大将で炎のように熱い性格の竜人のシュレーダー（4歳）

赤い短髪と身体の所々に見える鱗が竜人の証になっている。シュレーダーは、思いつきり怒ると竜化する。成長すると自分で制御できるようになるらしいが今は竜化すると理性がなくなるため暴だしてしまう。前に、シャロンと口喧嘩をして言い負かされたシュレーダーがキレて竜化していた。あの時はマリアさんが弱点の後頭部を思いつきり叩殴るといってお仕置きをして事なきを得たが凄くビックリした。まあいつもは凄く優しいんだけどな。

いつもシュレーダーにくつついている魔人のトビアス（3歳）

魔人特有の褐色肌が銀色に輝く髪の毛を引き立たせている。基本は、シュレーダーの後を金魚のフンのようにについて行くトビアス。昔、シュレーダーに助けってもらってからなっている。

つい最近誕生日を迎えた甘えん坊の人族ライオット（3歳）

金色の肩まで伸びた髪の毛とろんとした目が特徴だ。勉強や仕事の手伝いで出来ない事があるとすぐにマリアさんや姉兄に甘えて助けてもらう甘え上手だ。

気が利いて世話焼きな獣人のエリー（3歳）

水色の髪と頭でピコピコしたまるい耳がとても愛らしく見える。

新しい弟ができたのがうれしいのか家族の中で一番俺のお世話してくれたのがエリーだった。今でも一緒に外に行ったり遊んだりしている。

俺が歩けない間は全員で世話をしてくれた。女性陣は勉強や新しい服を作る時にも、一緒に連れて面倒見てくれたし、男性陣も、少し乱暴な扱いもあったけど、外に食料を取りに行くときに内緒で連れて行ってくれたりして可愛がつてくれた。この時女性陣に俺を外に連れて行ったのがバレてシャロンとシュレーダーが喧嘩して竜化

しちゃったんだけどな。

そうそう、この世界には魔法つてもものがあるみたいだ。属性は火、水、地、天、闇の5つでこの他にも複数の属性を同時に使う事で色々な魔法を使う事が出来る。一般の人が使える属性は1つか2つでこればかりは相性の問題や得意不得意があるようだ。魔法を使うにはマナの制御が必要不可欠らしい。マナとはこの世に存在するものが常に出しているものでマナを自分の身体に宿す事で魔法を使う事が出来る。一般の魔法使いは魔法を使用するたびマナを宿すか練りす必要があるが、上級者になると普段から宿したままにする事ができるそうです。身体がマナの電池だと考えるところくりくるかもしれないな。

宿せる量には個人差があれが、自分自身が練り出すマナは平等になつており最大まで作り出すほど限界値は上がるらしいみたいです。筋肉みたいだな。

この前、エリーにマリアさんが魔法で野菜に水をあげる所を見せてもらった。空中に水の玉が浮いてたいるのを見てこうふんしてしまつた

魔法が使えるかもわからないが使えるなら絶対に覚えようと考えている！！

それにしても…彩花はこの世界にいるのかな？

いるとしても俺みたいに赤ん坊になつて生まれたのか、それとも元の姿のままなのか？いろいろな可能性が頭に廻つてしまう…

ああ〜！考えてたらどんどん心配になつてきた！！

彩花ああ、どこにいるんだ〜！！

---大貴side out---

外が灰色の雲で少し陰り、あと数ミニ(分)すれば雨粒が落ちてきそうな頃、クライン孤児院の勉強部屋にマリアと子供たちが集まり、マリアが魔法についての講義を始めるところだった。ライベルも自分で勉強部屋に向かい、今はエリーに抱えられながら座っている。

「それじゃあ、今日は魔法の練習するわよ。ライベルは、まだ理解出来ないと思うからお兄ちゃんお姉ちゃんの練習を見ててね」

「わかりました」

マリアの言葉にライベルが返事をする各人精神を集中し始める。「それじゃあ、まずはいつものようにマナを宿すのではなく練習してみて」

そう言われるとみんなの身体がマナに包まれ淡く輝き出した。

シュレーダーは赤、エリーとトビアスは青、アリスが緑、シャロンが白、ケインとライオットは黒に包まれた。

「いいわ。そしたら、シュレーダーは指先に火球、エリーとトビアスは水球、アリスは土球、シャロンは光球、ケインとライオットは闇球を作り出して」

全員が身体から生まれるマナを指先に集めようと集中する。すると、最初に変化が起きたのはアリスだった。アリスの指先に光集まると、光が土に変わっていきが約3センチ(3cm)の土の球が出来上がった。アリス以外はまだ指先にマナを集めている段階ようだ。

「みんなちゃんと出来上がりをイメージするのよ！アリスはそこから4つの土球を作り出して」

「……………はい！！」「……………」

7人がそれぞれ目標を達成しようと自分の指先に全神経を集中する。

それを見ていたライベルは自分ももしかしたら使えるんじゃないかという衝動に駆られ、見よう見まねで魔法の練習を始めた。

(マリアさん曰くイメージが大事ならしいな。身体からマナを練るっ

て感覚は気を練る感覚と同じなのか？ まあとりあえずやってみるか）

ライベルは人差し指を立てて身体に力を入れる。まず、気の中心臍下の一点に力を入れ身体から力みをなくす。そこから、身体から常に発生しているエネルギーをイメージする。すると、ライベルの身体から赤い光が現れ身体を包み始めた。

（おっ？こんな感じでいいみたいだな）

「え？」

ライベルの身体がマナに包まれているのに最初に気がついたのはマリアだった。そのマリアの声にアリス、エリーと次々と気づき練習をやめてライベルに視線を送る。

そのことに気が付いていないライベルは、そのエネルギーを人差し指に集中させるイメージを作る。

（魔法といっても実際にはマリアさんの魔法しか見たことないし、あの水球でいいか）

そこからマリアが野菜に水をあげる時に使っていた拳太の水の玉を想像した。指先にマナが集まりだし、そのマナ空中に浮き上がり少しずつ水球に変質していく。

「う、ウソでしょ……」

マリアは1歳を過ぎたくらいの赤ちゃんが魔法を使っていること、しかも火属性のマナを水属性の魔法に変化させていることに驚愕していた。

普通なら魔法の勉強を始めてからマナを自分で練りだすまで早くても8ウィー（8週間）、そこから魔法に変化させるのに12ウィーがかかると言われている。もし、別の属性のマナから別の属性の魔法を変化させようものなら2イヤ（年）がかかってもおかしくない中級でも上に位置する技術だ。

マリアが魔法を覚えてからそれができるようになるまで3イヤも費やした。もちろん今の子供たちの中ではアリスですらまだ会得していない技術だ。

それを今、ライベルは見よう見まねでやろうとしている。

信じられない光景に呆然とするしかないマリアたち。

その間に、マナを変化させ終わったライベルはただその水球を見つめていた。

（できた…… 生まれて初めて魔法を使えた！）

初めて使ってみた魔法が成功した喜びと達成感がライベルの心を満たした。その瞬間集中が切れ、形を維持していた水球は形を崩しライベルの手足をビショビショに濡らしてしまった。

手足がぬれたライベルを見て我に返ったマリアたちは、練習を一時中断してエリーがライベルの着替えを取りに行き、ほかの子供たちが濡れた床を掃除をし始める。マリアは、その間にライベルとの服を脱がせながらこれからどうするかについて思案にくれたのだった。

第一章 2 怪奇（後書き）

できれば来週の火曜日までには挙げたいと考えています!!

第一章 3 繋がり（前書き）

どうも！

PV530、ユニーク150越えすごくうれしいです！！

感動してます！！

予定では火曜日に上げる予定でしたが考えていたよりも早く仕上がりました。

今回は戦闘シーンはなくカミングアウト回になっています。

毎回、駄文が続いていますがそれでも読んでいただけるとうれしいです。

よろしくおねがいします！

第一章 3 繋がり

クライン孤児院は、統合都市ピースフルから南に20キルメリ程向かった森の奥にある。マリアがこの場所に孤児院を作ったのは約4年前。アリスと様々な国を旅していたマリアはたまたまギルドに薬草採取依頼がありこの森を訪れた。それまでは、院を作ろうとは考えていたが条件を満たす場所が見つからず頭を悩ませていたがこの場所はピースフルからあまり離れず森にも凶暴な魔物もいなく、自給自足ができる場所ということでの場所に院を作ろうと決めた。建物は森の木を切り倒したものを使い、建物の染色はピースフルで買ってきた特別な染料を使った。

孤児院は1階建てで敷地内には、マリアが栽培している菜園のほかに、水と地の混合魔法で作った井戸と魔法や武術を学ぶために作った練習部屋、こどもたちが楽しく遊べるために余った木材で作った遊具がある。部屋は全部で8部屋あり、全員が食事や書き物をするときに使大きな木の机と人数分の椅子がある集会部屋、料理を作るために作られ、ナイフや鍋などの調理器具がおかれた調理場、荷物や道具をしまふ倉庫、客人が来たとき用に作られた客間、男性の寝室、女性の寝室、男性寝室と女性寝室の間にトイレがある。寝室を男性と女性に分けたのは進学した際に男子寮と女子寮に分かれるため、今のうちに慣れさせておくことと、マリアの保護者としての気持ちが表示されたためである。

今回の戦争が終わり、ピースフルが作られたことにより、他種族間の交流が行われる事となった。その結果、未知の技術や知識を学ぶことができるようになり多くの人がピースフルで学ぼうと様々な場所から足を運んでいる。そのため、ピースフルの学校は競争率が高く、それだけ優秀な人材が出てくるだろうといわれている。マリアがこどもたちを入学させたがるのは世の中を知ってもらうにはちよつどいい場所であり、またピースフルの学校につてがあるため知

り合いがいるところに行かせたいという気持ちもある。

ピースフルは他種族が交流するために作られた場所だが、戦争が終わってまだ5年が過ぎたあたりである。まだ、他種族との交流を快く思っていない人が多く、そういった意味でも世の中を知ることができる。

現在、マリアたちは魔法の練習をいったん終え、集会部屋に集まっている。理由は練習中にライベルが見せた魔法についてである。

この世界では、魔法は魔人と獣人が使う魔法と人と竜人が使う魔法と2種類があつた。魔人と獣人は大気にあるマナを身体に宿してそれを制御して行使する魔法であり、人や竜人が使う魔法は身体の中でマナを生成してそれを行使するものだった。前者は、マナを宿す量に個人差があり大気に残るマナを使うため使える量に限りがあるが多くの人が使える術、後者は訓練さえすれば個人差もなく大気にあるマナの量に左右されることなく魔法を使うが、魔法を使えるようになるまでの期間が長く少ない人しか使えない技術。そのため魔人は宿す量も多く使える人数も多いため魔法主体で戦い、獣人は、多人数が魔法を使えるが、強力な魔法が使えなかつたため頭を使うようになり、竜人は魔法が使えない分身体能力の高さで攻撃し、人は魔法も使えず身体能力も他種族よしも低いため道具や武器を作ることで補ってきた。

どちらの方法でも魔法は使えるが、自分で生成する技術さえ取得できればいつでも魔法を使えるようになり便利なるためマリアはこの技術から子どもたちに教えている。

本題に戻るが、子供達は自分たちが練習して出来るようになった事をすぐに出来てしまった事に対して、マリアはそんな技術を初めての魔法で使ってしまった事に対して驚いていた。

(やっぱりこんな小さい子供が魔法を使うのはやっぱりおかしかつたのか？ やってしまつたか？)

ライベルは、一時の感情に流されてしまったことをやや反省していた。

みんなの自分を見る目に不安と恐怖の色が混じっていると感じたからだ。

（俺の黒髪と目はこの世界じゃ珍しいらしいしそれもあって得体が知れないんだろうな… 彩花の情報のためにもこの人たちにはしつかり話したほうがいいかな？）

ライベルは内心でため息をついた。

すると、沈黙を破ってマリアがライベルに声をかけた。

「これから、ライベルにいくつか聞きたいことがあるんだけどいいかしら？」

「だいじょうぶです」

（この返し方、私の知ってる1歳過ぎなら私が言った意味すら分かっていないはずなのに…）

マリアは内心で警戒しつつライベルに質問を始めた。

「最初の質問ね？ライベルは今まで魔法を使ったことがある？」

「いいえ」

ライベルの答えに子どもたちが再度驚く。

「次に、あの魔法をどうやって使ったかわかる？」

「はい。さっきマリアかあさんがイメージがだいじとっていたので、このまえやさいにおみずをあげているのをみて、それをイメージしてみました」

マリアは、予想通りだったものやはりあきれる事しかできなかった。

「これはみんなにも聞いてほしいんだけど、まずライベルがマナを生成した時に赤い光、火のマナを作ったのは覚えてる？ライベルはそこから水球を作ったんだけど、その魔法は別の属性のマナから別の属性の魔法を使うっていう学校では中級の技術なの。それを、初めて魔法で行った人は歴史上で一人もいないと思うわ」

その言葉に今度こそ全員が言葉を失う。その中には、別の意味で

言葉を失っているライベルも含まれる。

（この身体で魔法を使ったのはやっぱり失敗だったな。こつちも知らなかったとはいえないきなり中級魔法使われたらびっくりするよな… やっぱり使うんじゃなかったな…）

「まだ1歳を少し過ぎたくらいにしか見えないライベルにこんなこと言うのはいやなんだけど…、あなたは一体何者なの？ あなたの言動や行動は1歳とは思えないほどに大人びているわ。できれば、本当のことを話してほしいの…」

（やっぱりこうなるよな）常識（この世界の常識は分からないけど）で考えて妖しいって思うよな。 やっぱり話すしかないし、最悪ここから出ていかないとな…）

「マリアお母様何を言っているのですか？確かにライベルが魔法を使ったのには驚きましたが、1歳の赤ちゃんですよ？」

マリアの言葉にシャロンが口を開くと同時に、ライベルがため息をついた。

「わかりました。しかし、先に注意しておきますけどマリアさんが考えていることとは全く違うと思いますよ」

そういうと、ライベルは自分が魔法と言う概念が殆ど存在せず、この世界よりも科学が発達している世界から来たこと、本当の名前は大貴ということ、何故この世界に来たかはわからない事、そして彩花の事について話した。

「余りにも壮大過ぎて信じる事は出来ないと思いますけど、マリアさんが思っていたであろう、他国のスパイって事はありえませんか？でそこは信用してもらえると助かります」

聞いていたマリア達（ライオットとトビアスは途中で寝てしまった）は、話に余りついて来ていないようだったが、とりあえず敵ではないという事はわかってもらえたようだ。

「この話をしたのは皆さんがこの世界で出来た新しい家族だと思っ
てますし、家族に隠し事をしたくないと考えたからです。でも、他の人には異世界から来たって事は内緒でお願いします」

そう言うとライベルは小さな頭を下げ、マリアはその真剣な態度と姿勢に心を打たれた。

「ライベル、いえ、ダイキ。頭を上げてください。私たちはもう家族です。ありのままを話してくれたおかげで私たちもあなたが信頼できる人だと感じました。あなたが異世界人であるという事はまだ理解出来ていませんが、その事は家族の秘密にする事をクライン孤児院の名に誓います。みんなもそれでいいわね？」

マリアが子供達に訪ねると、余り理解していないものの大切な話だと感じているのか一斉に頷いた。

「とりあえず、出ていけと言われるれば出て行きます。今まで通りの方が嬉しいですがこればかりはみんなで話した方がいいでしょうし僕は一旦外にいますね」

そういうと、ライベルは部屋の外に出て行った。

部屋に残されたマリアと子供達は、ライベルの出ていく宣言に黙ってしまっただが、やがてシュレーダーが沈黙を破った。

「母さんとライベルが何を話しているのかイマイチ分からなかったけど、ライベルを迷惑とは思ってないし、これからも一緒にいたい」

「私もシュレーダーと同じでライベルは大切な家族です。一緒に暮らすとしても半年程ですがそれでも一緒にいたいです」

「僕もライベルと一緒にいたいな」 もっと一緒に遊びたいよ」

「私もベル君と一緒にいたいな…」

「僕も！」

「僕も!!!」

シュレーダーに続いてシャロン、ケイン、エリー、トビアス、ライオットと答える。

「アリスはどう？」

「私はお母さんの考えに従います。でも、もし一緒にいられるなら私は凄く嬉しいです」

マリアの問いかけにアリスは満面の笑みで答えた。

みんなが笑っているのを見てマリアも笑顔で返す。

「私もみんなと同じよ。ライベルは私たちの大切な家族だもの。迷う必要なんてないわね。さあ、みんなでライベルを迎えに行きましょう！そしたら夕御飯よ！」

マリアがそう言うのと子供達はライベルを迎えに一斉に外に向かった。

（みんな思いやりのある優しい子に育ってくれてるわね…）

マリアは、子供達がライベルを受け入れてくれた事に喜びを感じながら部屋を出た。

その頃、ライベルは孤児院の外にある遊具に肘をかけながら腰掛けていた。

（これからどうするかな… まずは、寝る場所と水食料の確保か。確か近くに川があったから水はそれでいいとして、食料はどうしよう… 前の世界の知識は使えないだろうし野草はやめておいたほうがいい。残りは、近くの動物を狩るしかないか。この身体じゃあカエル（リバフラ）一匹取るのも大変そうだな）

そんなことを考えていると、孤児院の扉から子供達が出てきてここに気がついて走ってきた。

「ライベル、こんなところで何してるの？早く家に入ろうよ」

最初に走ってきたライオットが俺の手を引く張ってくる。

「早く帰るぞ。お前がいないと夕ご飯が食べられないだろ」

シュレーダーがライベルを立たせる。

「シュレは素直じゃないんだから… ライベルもう夕御飯の時間だから手伝ってくだらない？」

シャロンは立ったライベルのお尻の汚れをはたいて落とす。

「ベル君早く帰ろう？ベル君がいなくなったらさびしいよ…」

エリーは、涙目になりながらこっちを見つめてくる。

「ライベルは今日の夕飯何がいい？リバフロの丸焼き作ってあげようか？」

アリスが笑顔で自分の得意メニューを進めてくる。

「ライベル早く早く！！」

トビアスが呆けているライベルの背中を押しながらせかす。

「こら、みんなライベルが困ってるじゃないか… これからもよろしくね」

ケインがみんなをたしなめながら声をかけてくる。

そしてみんなに連れられて扉まで行くとマリアが待っていた。

「みんなの反応でわかると思うけど、ダイキは私たちにとって大事な家族の1人です。勝手に出ていくことは許しません！」

その言葉で我に返ったライベルは、何を言われたのかに気付いて確認する。

「それじゃあ、ここにいてもいいんですか？ みんなもそれでいいの？」

言いながら皆を見回すと笑顔でうなずいてくれた。

ライベルは不覚にも涙が出そうになった。

「ありがとうございます… 改めてお世話になります。後、今までどおりにライベルって呼んでください。みんなに考えてもらった名前でご気に入ってるので」

「わかったわ。でも、そんな他人行儀な言い方はやめなさい！私たちは家族なんだから普通にはなしてくれていいのよ」

「わかった。みんなこれからよろしくね！！」

この日、クライン孤児院に8人目の家族ができ、その絆が一層深まった…

第一章 3 繋がり（後書き）

今回は、孤児院の日常的なものをかこうと思っています。

できれば、水曜日に次話を投稿したいと思います！

第二章 1 風呂（前書き）

どうも！

本当は明日挙げる予定でしたが、筆の進みが良かったのと時間が出
来たおかげで今日挙げる事が出来ました！

今回は日常生活を書く予定でしたが1つの事しか書けませんでした。
その話とは別でなんとっ！？この小説にお気に入りが2件、総
合評価も4ptになってました（、、ゞ

最初見た時は夢かと思いましたが夢じゃなかった！

p v 8 3 0 ユニーク 2 3 0 越えもありがとうございます（
前書きが長々となってしまうましたがこれを励みにこれからも頑張
っていきます。

これからもよろしく願いします

第二章 1 風呂

ライベルが本当の意味で孤児院の一員になってから約1週間が経った。

あれから、魔法の練習に参加させてもらえるようになったライベルはこの前のような事がないように基礎から徹底的に教えてもらっている。

マリアが言うにはライベルのマナ内包量が常人よりも遙かに多いのと全属性を使えるという希有な存在から、マナの使い方と技術を学べば大陸でも5本指に入る可能性があるそうだ。

個人的には、力があって困る事はないと思っっているのでどんどん頑張っていきたいと思っている。

漫画やアニメ、小説を見ていたおかげか基礎魔法はすぐに出来るようになり、これからどんな魔法を使おうか色々考えている。

今は、みんなが夕御飯の食材を探しに森へ行っている。

俺とライオットはまだ危ないからって事でマリアさんと孤児院で留守番している。

ライオットは現在部屋でマリアさんとお昼寝中の為、俺は魔法の練習をしようと遊具場に向かった。

「どうしようかな？ 昨日は火属性の練習ついでにファルコンパンチの練習したし、今日は氷でも作ってみるかな」

俺は、精神を集中させて目の前に氷の柱をイメージする。そして、イメージが固まると周囲のマナを自分の前に集める。

「出でよ、アイスタワー（勝手に命名）!!!」

集まったマナが瞬時に氷に変化し、遊具場に2メートル超の氷の柱が出来上がった。

「魔法の発動速度はいい感じに早くなってきたな。」

後は、イメージを固めるまでのスピードを上げれば実戦でも使えるかな」

目の前の柱を撫でながら、改善点を挙げていく。

「まあ、魔法は牽制と補助と多対一の時に使いたいただけだし、今はこれでいいか」

目の前の氷柱を手から炎を出して溶かして行く。

溶かし終えた後は夜にしているトレーニングを始める。いつも夜にしているのはただ涼しいからっただけだけど。

トレーニングをしていて気づいたのだが、この小さい身体になっても運動能力は以前と殆ど変わっていないかった。それどころか、前の世界よりも重力が少ないのか軽く動けるようになっていた。

(こんな小さい子供がこんな運動したら軽いホラーだな…)

ライベルはそんな事を考えながら次々にトレーニングを消化していく。

それから、約40ミニが経つ位でメニューを全て終え全身から汗を出しながらストレッチをしていた。

「今日もいい汗かいたな！ 本当ならここでビツクルをクイッと飲むのがいいんだけどこの世界で作れないかな？ ……汗臭いし風呂に入りたいな」

(そういえば、こつちに来てから一回も風呂に入ってないな。外国人は余り風呂に入らないらしいしこの世界も同じなのか？ マリアさんに聞いてみるか)

そんな事を考えていると、いつの間にか外にいたマリアこちらに近づいてきた。

「外から変な音がすると思ったらあなただったのね。いつもあんな事してるの？」

「いつもは身体を軽く動かす程度ですよ。今日は明るいし気分がノっていたのでいつもよりキツくしただけです」

「全く気がつかなかったわ。確か元の世界では学生だったのよね？ そっちの学生はみんなそんな事しているの??」

「いや、流石に学生でこの量をこなせる人は限られますよ。軍人なら別ですが基本的に僕の国は平和だったので。マリアさんもやって

みますか？」

「今日はやめておくわ。外に出てきたのはただの気分転換の為だし、この格好で汗をかきたくないわ」

「それは残念です。ある意味気分転換になると思っていますが……」
マリアの軽口に対してライベルも冗談で返す。

そんな感じで話していたが俺は風呂のことについて聞いてみた。

「そういえばマリアさんにいくつか質問と相談があるんですがいいですか？」

「私が答えられるなら大丈夫よ。どうしたの？」

マリアの返答を聞いたライベルは先程考えていた事を尋ねる。

「マリアさんはお風呂または風呂って知ってますか？」

「お風呂？聞いた事無いわね……」

「そしたら、マリアさんはいつ身体を洗ったりはしますか？」

「近くの川で2〜3日に一回位かしら……」

「そうですね……」

（身体を洗うという文化？はあるけど、今の話を聞くと風呂は無さそうだな）

マリアの返答にライベルが考えてをまとめていると、マリアが逆に聞いてきた。

「なんでそんな事聞いたの？ それにお風呂って何かしら？ 現在は今の質問に関係あるのかしら？」

「そうですね。まずマリアさんの話だと身体を洗いたい時はわざわざ川まで行くみたいですね？」

「騎士団の時は専用の水浴び場があつてそこでしてたわね」

「それって効率悪くないですか？ 騎士団の時はいいかもしれませんけど、今は屋外だから誰がいるか警戒しながらですよ？ それで気持ち良く水浴び出来ますか？」

「それは……」

ライベルの意見は的を射ていたため言い淀んでしまう。

確かに子供達（女の子）達を連れて川に汗を流しに行く。その時は、私は周りに男の子達や危険がないか確認しながら水浴びするため、精神的に疲れてしまう。

「そこで、先程僕が言ったお風呂が出てきます。お風呂とは、水を溜められる場所に40 前後のお湯を入れてそこに浸かる事を指します。確かに冷水も夏場は気持ちいいかもしれませんが、お風呂なら何時でも身体を洗ったり疲れをとったりする事が出来ます。もちろん、お風呂は脱衣場から男と女分けますし、脱衣場にも仕切りなどをつければお互いに見られる心配もありません」

「なるほどね……」

「それで一番大事な事なんですけど、地属性の魔法で地面の形状を変えるようなものってありますか？」

「あるわよ。一応アリスには教えてあるし、私も使えるわよ」

「本当ですか!？」

「ええ。記録上ではその魔法で砦を作ったって記録も残っているわ」
「なるほど。それで、相談なんですけど、孤児院の空いてる所にそのお風呂を作っていいですか？ その魔法がどんなものか教えてもらえれば後は何とかしますので」

「何とかって…… 地形変化の魔法は地属性の上級魔法に設定されるくらい高度な技術と魔法力が必要な魔法よ？ すぐに使えるわけないじゃない!」

上級魔法を説明を聞いただけで使うというと怒りを見せるマリア。
「そうなんですか？ 出来なかったらまた別の方法を考えるのでとりあえず、説明だけでも教えて貰えませんか？」

「はあ、分かったわ。この魔法は少し特別で、普通なら魔法は自分の身体の一部とかに集中させて発動させていたけど、この魔法はマナを地面に同化させて発動させるの。規模にもよるけど、使う時はマナを同化させる時に高い技術ないと、同化しないか、あるいはきちん範囲を設定出来なかったりするわ。また、大量のマナを消

費するからリスクも高いの。説明はこれで終わりだけどそれでもやる？」

「なるほど… 大まかには分かったと思います。すみませんが、狭い範囲でいいんで使う所を見せて貰えませんか？」

そう言っつてライベルは頭を下げた

マリア side

「なるほど… 大まかには分かったと思います。すみませんが、狭い範囲でいいんで使う所を見せて貰えませんか？」

（そんなふうには頭下げられたらたら断れる訳ないじゃないの。まあ狭い範囲だし見せるだけならいいかしら？）

「それじゃあ一回だけよ？」

私は身体からマナを作り出し、それを足から地面に移動させる。移動させたマナを地面に定着させて自分の一部となるように考え、完成形を頭の中に作り出し、現実と一体化させる。すると、地面が緑色に発光しながら盛り上がり、髪の毛を丸めた女性の形になった。「これでいいかしら？」

「ありがとうございます。この方はどなたですか？」

「これは、私の元上官で今はピースフルの学校にいる人よ。まあこの話はオイオイしていくから今は置いておいて。それで出来そうなの？」

（私だつて厳しい練習の末に会得した魔法なんだからそう簡単に来てもらつても困るんだけどね…）

「やってみないと分かりませんがイメージはできました。1回、やってみますね」

そういうと、ライベルは集中し身体が緑色に光りだした。

（うん、ちゃんと、使う魔法ごとにマナの属性を変えてやってるわ

ね。この確認ができただけでも使って見せた意味はあったわね）
ライベルから出たマナは地面の中に融けていき、地面が緑色になった。

（えっ？ マナがすっかり地面と同化している！？）

私が驚いている間にも地面は光り続けながら地面が盛り上がり少し若い髪の長い女性の姿になった。

「本当に1回で出来るなんて…… この前の魔法といい、初めての技術を一回でできる才能 センス といい、あなたには驚かされてばかりね」

私はこの結果に苦笑いするしかなかった。

「こうやって成功できたのもマリアさんがちゃんと基礎を教えてください、一度手本も見せてくれたからですよ。マリアさんの教え方が良かった結果です。ありがとうございます」

ライベルは、謙虚に言つてまた頭を下げた。

本当にこの子にはかなわないわね……

マリア side out

俺が頭を下げるとマリアさんはまた苦笑してしまった。

「それで、その女性は一体誰なのかしら？」

「この女性 ヒト は…… 前にも話したと思いますが、俺が前の世界で付き合っていて、もしかしたらこの世界に来ているかもしれない一番大切な人です。名前は彩花って言います」

「そう…… この人があなたが探している人ね。綺麗で優しそうな顔をしているわね」

「はい。僕の自慢の彼女です！」

「私も出かけた時に知り合いに聞いてみたりするけど早く見つかる

「いいわね」

「ありがとうございます。よろしく願います」

そう言うところらもしゃべらなくなってしまった。

（しみりした空気になっちゃったな… 話題を変えないと……

そうだ！ お風呂作らないと！！」

「それで、魔法も成功したのでお風呂作りに行きたいんですけど、どこなら大丈夫ですか？」

「あっ、そうね…… 孤児院の西側なら何もなし大丈夫よ」

「わかりました！ それでは楽しみにしててください！！」

そう言っただけは孤児院の西側に駆け足で向かった。

目的地に着いた俺はどのような風呂にするか考えていた。

（風呂の形はどうするか… やっぱ露天か。浴槽はひとつで間に壁を作って男湯と女湯を分ければいいか。後は脱衣場も作らないと……）

とりあえず、考えがまとまったで建物と浴槽を作り始める。

いつものように躰下の一転に力を集中させて力を抜く。本来は、自分でマナを作ったほうが地面になじみやすいのだが、今回は使うマナの量が多いため自然のマナを使うことにする。まず、周囲にマナが漂っているとイメージして、それを吸い込み体内に取りこむ。

取りこんだマナは、足を通して地面に流して行ってマナがイメージと重なるまで流しながら調整する。

そして、イメージとマナの流れが重なった瞬間に流すのを止めて魔法名（勝手に自分で命名）を叫んで魔法を発動させる。

「ムーブアース！！」

地面が緑色に強く発光しながら一部屋だけの建物に変化した。その向こうでは、20人が一気に入れるくらいの大きな浴槽が出現し、建物と浴槽の真ん中に大きな壁が出現して二つの部屋と浴槽に分けた。

「形はこれで大丈夫か… 後はお湯を張ったときと雨が降っても部屋が崩れないように浴槽と壁の表面を漆喰 しっくい に変化させるか。本当なら海藻抽出物が必要だけど魔法だしなんとかかなあるだろ」

出来上がった建物と浴槽を緑色の光が包み込む。光がおさまるとさほど変りのない入口が2つの白い建物が残った。

「たぶんこれで大丈夫だろう。それにしても、さすがに上級魔法なだけあるな。身体じゃなくて精神が凄い疲れた… ここからお湯を張ると倒れちゃいそうだし、ちょっと休憩しよう」

多くのマナを使った反動か膝が笑ってしまい、地面に座り込む。

そのまま、休憩していると森に行つてたメンバーが戻ってきた。

いきなり知らない建物が建っているのので驚いてアリスがマリアを呼び行つたのか孤児院に行き、ほかのメンバーは警戒しながら建物に近づいてきた。そこで座り込んでいる俺に気がついたシュレーダーが急いで俺の元に駆け寄ってくる。

「おいベル大丈夫か！？ いったい何があつた？」

ちなみに、ベルは俺の愛称だ。もともとエリーがベル君って呼んだのが始まりで兄弟はみんなベルって呼ぶ。兄弟の愛称は、アリスはアリス、ねえ、シャロンはシャロン姉、シュレーダーはシュレ兄、にい、ケインはケイン兄、エリーはエリ姉、トビアスはトビ兄、ライオットはそんなに年が変わらなそうなのでライって呼んでいる。

説明している間にみんなが俺を取り囲んでいる。とくにエリーが泣きそうになりながら抱きついてきている。

「これを作ったせいで疲れてるだけだから大丈夫だよ。これは、僕が作ったもので安全だから警戒しなくてもいいよ」

「これを作った！？ まさか魔法でか？」

シュレーダーが驚いた顔をしている。この顔を見たのは何度目だったかな…

「そうだよ。魔法はさっきお母さんに教えてもらって、ここに作っていいって言われてるよ」

すると、孤児院からアリスと寝ぼけているライオットを抱っこしたマリアがやってきた。

「まさか、こんなものを作るとは思わなかったわ。魔法力だけならすでに私を越えているわね……」

来て早々マリアはそんなことをつぶやいていた。

「そんなことないですよ。僕も一回作っただけで立ち上がることができないくらい疲弊してしまいました。これからも頑張ります！」

「これを作る時点で私より上なんだけどね……」

そう言っ、ライベルが作ったものを見つめている。

そんなマリアにシャロンが建物について質問した。

「ベルがこの建物をお母様に作っていいと言われたそうですが本当ですか？」

「本当よ。ただしもっと小さいものが出来上がると思っていたのだけれどね」

「これは、何のために作ったのですか？」

「この建物は、身体を洗ったり疲れをとったりする場所みたいよ。そうでしょ？」

マリアはそう言っ俺に話を振ってくる。

「そうです。それでお母さんに頼みたいことがあるんですけど、この建物に水を上から降らせてもらっていいですか？」

「いいけど、そんなことしたらせっかく作った建物が濡れて壊れちゃうわよ？」

「そうならないように造ったつもりなので大丈夫だと思います。もしだめなら今度は木で立てようと思っているので気にせずにお願ひします」

俺の返答にマリアは頷くと建物の上に大きな水玉を作り雨のよう

に降らせた

建物は水にぬれても崩れず、形状を維持していた。

「水にぬれても形を変えないなんて、いったい何をしたの？」

建物の状態が変わらないのに驚き俺に尋ねてくる。

「説明すると長くなるので簡単に言いますが、建物の壁を違う物質に変化させています。その物質は前の世界では一般的に使われていた技術の一つです」

「そうなの… 確かにこれを見るとあなたの世界が発展しているのも頷けるわ」

「ちなみに、これよりもっとすごい技術は数多くあります。それも後日お話しします」

そこまで話すとやっと動けるくらいまで体力が回復したので、建物の中に入っていく。

建物の中は、できたばかりのため物は置いておらず浴槽に続く扉だけがある。

「ここには、今度着替えを置く場所を作っておくのもう少し見栄えが良くなると思います」

そう言うと、扉を抜けて浴室へ向かう。

浴室は、漆喰が塗られているため全体が白出来ている。

初めての浴室にみんなが口をあけながら見まわしている。

「それではこれから、お湯を作るのでちょっと待ってくださいね」

俺は、そういうと大きな水球を作り出し、その水を火球で熱した。さすがにこれくらいは慣れたのか、それとも浴室のインパクトのせいか同時魔法を見せても動じなくなっていた。

ちょうど40 くらいの熱さになったのでその水球を浴槽に落ちて、手を入れてみた。

（うん、ちょうどいい熱さだな。やっぱりお風呂はこの熱さじゃないとな！）

温度を確認した俺はみんなのほうに振り返った。

「これがお風呂です。気持ちよさを言葉で説明しても分かりにくい

と思いますし、身体で体感してください。母さんたち女性とライオはこっちの湯船に入ってください。シュレ兄達は隣にもお湯張るんで僕と一緒にそっちに入ってください。もちろん服を脱いでですよ？ 時間は30ミニ位がいいと思います。では御寛ぎください」

そう言つて俺は隣のお湯を張った後、身体を拭くものを取りに一回孤児院に戻り、シュレーター達はそのまま風呂に入った。

結論から言つとお風呂は大盛況で特に女性組のハマリようは凄かった。もともとは、毎日身体を洗いたかったようだが川まで行つても安心できなかったのが、部屋の中でできるようになったのと、お湯がすごく良かったらしい。これから入る時は俺かマリアさんかアリスがお湯を張ることになった。

余談として、初めてのお風呂に興奮した女性組（マリアさん含む）は話に夢中になって、男子組はシュレーターが我慢大会を開いたせいで完全に湯だつてしまい、身体を拭いたり（女性組の身体を拭くときは湯だつてなかったライオにも手伝ってもらった）、服を着せて看病したりと大変だった。

俺はその騒ぎが収まつてから風呂に入ったが、やっぱりいいなつて思つた今日この頃だった。

第二章 1 風呂（後書き）

次話も日常生活を書いていきたいと考えています。

多分皆さんも一回は確実にしているであろう遊びを書く予定です。

投稿は時間の関係で金曜前後になると思います。

書きためておくタイプじゃないので毎回追い詰められています（笑）

第二章 2 娯楽（前書き）

どうも！

今回予定通りに執筆が進みました。予告の通りに投稿できて良かったです。

今話は、魔法の要素を入れようと考えていましたが、筆者の頭ではまとめられなかったため魔法はでません。
もし期待をしてくれている人がいらっしやったらすみません。

前回投稿してから、お気に入りしてくれた人がまた一人増えました。ありがとうございます！

p v 2 1 5 0、ユニーク580超えました。

読んでくださった皆さん、ありがとうございます！そして、文章力なくてすみません。

これを糧に次話も頑張っていきたいです。
それでは、よろしく願います。

第二章 2 娯楽

お風呂事件から3日後、今日はいにくの雨模様となっている。

孤児院では全くと言って良いほど娯楽がない。娯楽といっても話したり、喧嘩したり、追いかけて遊ぶだけ。前の世界に比べてほぼ皆無と言える。科学や文化が進んでないのならゲームや小説、漫画はないと思うが、ここは遊具場があるだけでトランプやオセロと言った室内で遊ぶものが全くない。ここは孤児院だから、そこまでの物は用意出来ないのかもしれないけれども。

通常ならこの年代の子供は様々な遊びで感受性を育てて行くのだろうが、この子供達は小さい頃に家族と家を失い、生きることだけを考えてきた。その為、娯楽を楽しむ余裕はなく遊び方を知らずに育ってきた。

この院長であるマリアも、小さい頃は貴族の令嬢として過ごし、その後騎士への道を進んだ。そのため堅物として育ち、子供達に遊びを教える事が出来なかった。

「暇だな……」

今は魔法の練習が終わって自由時間。

俺は、今は男子部屋で身体を休めている。

今は魔法の練習が終わって自由時間。

俺は、今は男子部屋で身体を休めている。本当なら、外に行って雨雲を魔法で吹き飛ばせるかどうか試そうかと考えていた。

しかし、今は雨が降って困ることはないし、この前風呂場を作った時に体感したが俺の魔法力でそんな規模の魔法を使えば倒れてしまふ可能性が高いというデメリットがある。今は疲れる事をしたくないという結論に至ったわけだ。

なので、魔法力を上げるトレーニングを積んで上級魔法が普通に使えるようになるまでは必要な時以外は極力使わないようにしている。こう考えた。

本題に戻るが、みんなは汗を流しに風呂に入っている。この前風呂を作ったが、よほどカルチャーショックだったらしく女性組は毎日朝、昼、晩と3回、男子組も2回は入っている。俺なら「デカルチャー……」って呟いてるな。

この前のお風呂事件以降、風呂に入る時は湯だらないように気をつけているようだ。まあ、あの時は風呂から出た後ずっと苦しうに唸ってたし、俺も注意してなかったから正直悪いと思っっている。

あれから、マリアとシャロンは俺を見るたびに裸を見られたことが恥ずかしかったのか今でも視線が合うと顔を赤くして逸らすときがある。確かに、マリアさんの豊満なバスト&ヒップとくびれたウエストは魅力的で1歳児なのにアソコが反応してしまった。てか反応するんだな、初めて知った。シャロンも、なんて言うか…女の子だった。あの時は不可抗力でことで許してはもらっているが、ずっと続けられるとこちらも気にしてしまう。お詫びに、シャンプーとリンスと石鹸でもプレゼントしようかな？

ちなみに、アリスとエリーは全く気にしていないらしく、さつきもアリスに「ベルっ！一緒に風呂に行こう！！」と声をかけられ、エリーにも「ベル君と一緒に風呂入りたいな…」と手をひかれて連れて行かれそうになった。そこはマリアさんの一言で流れたが、今後は覚悟？しておいたほうがよさそうだ。

全員が風呂から出てくると、俺は集会広場に集めた。まだ風呂からあがってあまり時間が経ってないため身体から湯気が出ている。

「みんなを集めていったい何をするのかしら？」

全員の代表として顔を桜色に染めたマリアさんが聞いてくる。

「これから、みんな遊びましょう！」

「遊ぶって何するんだよ？ 俺たちの遊びなんて追いかけてくからいだろ？ もうあきたよ」

シユレーダーがライベルの意見に文句をつけてきた。

しかし、その文句は予想の範囲内だったので本題に入る。

「なので、今日は僕の世界の遊びをしましょう。名前はかくれんぼです！！」

「くくくくくくかくれんぼ？」

「そうです。ルールは、まずは探す側（鬼）を一人決めて、それ以外の人はその人に見つからないように隠れます。鬼は全員が『もういいよ』っていうまで目をつぶってなければいけません。鬼は隠れた人の『もういいよ』の声が聞こえてから探し始めます。隠れている人を見つけるには『もういいよ』の声と隠れている人の物音をたよりに隠れている人を探します。もし見つけた場合はその人に触るか、指をさして『くくみつけた』と大きな声で言うてください。最初に、見つかった人が次の鬼になります。以上で大まかな説明は終わりますが、わかりましたか？」 聞くともみんなが首をひねった。説明が下手だったか？

「わかりやすく言うとなんか一番うまく隠られるかを競う遊びです。そこまで、碎いて説明するとやっとわかってもらえたようだ。

「この遊びは応用性が高いわね。閻魔の魔法の練習になるし、隠密の仕事の訓練にも使えそうだわ……」

マリアさんが独り言を言いながら自分の世界に入ってしまった。

「確かにそういう考え方もありますが、今回は全員で楽しむための遊びとしてなのでそれはなしでお願いします」

「そつ、それはわかってるわよ……」

俺が注意すると、マリアさんは口をとがらせて拗ねてしまった。

お風呂事件があったから、こういう子供っぽい一面も見せてくれるようになった。こっちが本当のマリアさんなのかな？

なんか信頼されてるみたいでうれしいけど、赤ちゃんに甘える大

人って結構シニールだよな。

「今回は初めてやるので僕が鬼になります。隠れる場所は、建物の中だけにしましょう。場所が場所なので今回は魔法で姿を消したりするのもありにしますか。何か質問はありますか？」

シャロンがスツと手を挙げる

「魔法ですが、姿を消したりすることができない闇属性の魔法を使えるのはケインとライオットだけですし、その段階はもう少し慣れてからでいいんじゃないやしません？」

その意見に、俺はフム…と考えを巡らす。

「そうですね… 確かに平等ではないですね。では魔法は無しで行きましょう！ 他にはありますか？」

すると、今度はアリスが手を挙げた。

「ただやるだけじゃやる気でないし、最初に見つかった人は最後に見つかった人の命令を1つ聞く事にしない？」

「おおっ！ それいいな、俺も賛成！！」

アリスの意見にシュレーターが真っ先に乗った。他の人も全員の色が変わってやる気になったようだ。異論はないらしい。

「では罰ゲームはするの方向で行きます。あと言い忘れてましたが母さんもちゃんと参加してくださいね？」

「えっ!？」

「全員で遊ぶんですから母さんにも楽しんでもらわないと… みんなもそう思いますよね？」

「……」「賛成!……!……!」「……」「……」

マリアさんが何か言う前に、6人の返事が返ってきた。

「わっ、私もお母さんと一緒に遊びたいな……」

それに遅れてエリーもはにかみながら思いを口にする。

俺もやられたけど、あれされると何にも言い返せないんだよな…それはマリアさんも同じだったらしく、諦めて参加を表明した。

「これから60まで数えますので好きなところに隠れてください。隠れ終わってないときはちゃんと『まーただよ』って返してください」

いね。それでは始めます。1、2、3、4、5……………」
俺が、手で目を覆って数を数え始めるとみんなが部屋を出て行った。

さあ、かくれんぼin異世界の始まりだ!!!

ケインside

「それでは始めます。1、2、3、4、5……………」
ベルが数え始めた!

僕は、集会広場を出て目の前の客間に入る。

とりあえず、見つからないように隠れればいいんだよね?

魔法は使っちゃだめだし、考えて隠れないと最初に見つかったらう。

探すのはベルだし、少し気合い入れてやらないとすぐに見つかったらうな。

僕以外の人はそんな風に隠れるのか考えながら、客間を見渡す。

兄さん達は倉庫に、姉さん達は調理場と女部屋に別れたみたいだな。

僕は様子を見てベルが、僕以外の人を探しに行ったら集会広場に戻って隠れよう!

「もーっういーかーい?」

もう6セカ(秒)たったようだ。

「もーっういーよーっ!!!」

罰ゲームだけは絶対にやらないぞ!!!

ケインsideout

「なんでもついいいよって言っちゃったんだよ！」
「言ったのシユレにいじゃない…」

そうやって、言い合っているうちに誰かの足音が倉庫に近づいてきた。足音がとまるとギィッと扉が開いた。ベルが来たようだ。

「さて、ここには誰がいますかね？」

ベルは倉庫の中を探し始めた。入口から、道具、食料品、日用品と積まれているので、ベルは道具の場所から探している。

(やべえ、隠れてたらトイレに行きたくなってきた…)

(シユレにい僕おしっこしたいかも…)

(我慢しろ！最初に見つかったら罰ゲームだぞ？)

(うん、わかった…)

話しているうちにベルは、ライオが隠れている食料品の場所を探していた。

「隠れてたら出てきてくださいーい」

(ライオの場所まで来ちゃった。ここでライオが見つからなかったら次は俺たちか…)

そう考えていると、トビアスがいきなりビクツと動いて服が少し動いてしまった。

その動きに気付いたライベルは食料品の場所を移動してこっちに近づいてきた。

「トービーアースー？」

「ごめんなさい…… 緊張しておしっこが出そうになっちゃって…」

トビアスがすまなそうな顔で謝ってきた。

「なるほど、そこですか。今行きますんで待っててください」
ベルの足音がどんどん近付いてくる。

そして…

「シユレにいとトビにい、みーつけた！」

目の前に来たベルが笑顔で大きな声を出した。

(これで、罰ゲームは決定か…　せめて、ケインとアリスだけは早く見つかってくれ……)

そう思いながら、俺はトビアスとトイレに向かった…

――シューレーターsideout――

――シャロンside――

私は、女部屋の中からベルが倉庫の方向に歩いて行く足音に耳を澄ませていた。

「……………ベルは倉庫に行ったようすわね」

「そのようですね。そう言えばエリーがいないようだけど、どこに行ったのかしら?」

「エリーならさつき、調理場に入って行くのをみたよ」

私の呟きに、お母様とアリスが入ってくる。

私たちは、お母様の案で女部屋に来ており、布団の中に隠れている。

「これってすぐに見つかりませんか?」

私は、どうしても気になって聞いてしまう。

「そうね、一目で隠れているのがバレちゃうわね」

「ならどうしてここなんですか？」

「今回の遊びで重要なのは、一番最初に見つからない事でしょ？」

鬼はベルだし、女部屋むすこなら入りにくいしすぐには来ないと思ったのよ」

「なるほど…… ベルの考えを先読みして動いたわけですね？ 流

石お母様です！」

そうしていると、シュレとトビアス、続いてライオがベルに見つかったようだ。

「ほらね？ これで第一目標達成よ」

「本当ですね！ 私もこれからは相手の思考についても考えてみますわ！！」

私は、お母様の考え方を見習って行こうと心に決めた。

「でも、今回は完全な遊びだし、そこまでしなくてもいいんじゃない？」

隣で、アリスお姉様が何か言っていますが、何も聞こえなかった事にしますわ！

シャロンsideout

倉庫でシュレーダーとトビアスの他に壺の後ろに隠れていたライ

オットを見つけた後、男部屋と女部屋に行き、マリアさんとアリスとシャロンを見つけた。

後は、ケインとエリーを見つければ終わりだ。

それにしても、母さん達はちゃんと隠れる気があったのだろうか

……

目の前の布団の中に隠れるなんて、見つけてくださいって言っているようなものなのに。

とりあえず、集会広場に戻って見るか。

集会広場に戻ると、見つけた5人が椅子に座って会話をしていた。ライオットはどうやら用を足しにいつているようだ。

みんなの様子を見てみると、シュレーダーが足の下に視線をやりながらニヤニヤしているのに気がついた。

どうしたのかと思い視線の先に目を向けるとケインが机の下に座っていた。

俺がいなくなってからここに隠れにきたのか。裏をかくとはやるじゃないか！

とりあえず、見つけちゃったし……

「ケインにいまいつけた！」

そう言うと、ケインは机から出てきて未だにニヤニヤしてるシュレーダーを見た。

「兄さんが僕を見てるから気づかれたじゃないか！」

「何言ってるんだよ。俺達は何もしてないぜ？」

ケインは不機嫌にシュレーダーを睨んでいたが、あきらめてため息をついた。

「……………はあ。まあいいけどさ、後はエリーだけかな？」

「そうだね。じゃあ、僕はエリーを探してくるよ」

俺はエリーを見つけに部屋を出ようとするとアリスが声を掛けてきた。

「エリーなら多分調理場にいると思うよ」
「分かった。行ってみるよ」
そう言って部屋を出た。

調理場に行くときに見つけた。調理場の調理具入れの中に入っていたが入り口が開いていたのだ。丸まって隠れていたエリーにもう終わった事を伝え、みんなの所に戻った。

「じゃあ、エリーに罰ゲームを決めて貰おうか？」

集会広場に戻り、最初に見つかったシュレーダーとトビアスに命令を決めてもらう。

「私が決めてあげようか？ シュレーダーとトビアスは私に今日の夕ご飯を渡す事っ！」

「アリスねえは余計な事言うな！！」

ビシツとシュレーダー達を差しながら言うアリスにシュレーダーが抗議する。

「エリーの好きなように決めていいんだからね？ ゆっくり考えなさい」

マリアさんがエリーに声をかける。

エリーは、優しい性格だし、人が嫌がるような事は決められないのだろう。今も、だんだん追い込まれてきているのか耳をシュンと垂れて目に涙が溜まり始めている。

しょうがないので助け舟を出すか。

「とりあえず、今回は保留にしますか…… エリーねえも決めかねているようですし、無理に決める必要もないでしょう」

「そうですね！ とりあえずこの話は終わりましょう！ 夕御飯の準備をしますわ」

俺の起点にシャロンが乗ってくれたようだ。
みんなも今の流れでうやむやになった。

(今度はもう少し考えて罰ゲーム決めないとな…)
俺は、そんな事を考えながらシャロンの手伝いをしに調理場へ向
かった。

第二章 2 娯楽（後書き）

週末は立て込んでいるため、次の投稿は28日前後になると思います。

前話でも書きましたが、筆者は書きためることをしていません

（汗）

読んでくださってありがとうございます。

第二章 3 教授（前書き）

どうも！！

お待たせして申し訳ありません。週末は忙しかったので今日の投稿になりました。

今話は、説明文が多くなってしまいました（ ; ）

説明文が苦手な方はスミマセン。

前回投稿してからお気に入りが入りが6になりました

登録してくださった皆さんありがとうございます（ ; ; ）

p v 3 3 6 5 ユニーク 8 0 0 行きました！

読んでくださった方ありがとうございます（ ; ）

文が安定していなく、見苦しいものもあるかもしれませんが、これを糧に今後も努力していく所存です！

それでは、よろしく願います。

第二章 3 教授

次の日、夜遅くまで降った雨も今は止んでおり、昇りはじめた太陽の光が濡れた地面で反射している。

俺は、朝早く起きて昨日できなかったトレーニングメニューを消化していた。

と言っても、幼児の段階で筋肉をつけすぎると成長に影響（主に身長）が出る可能性があるため程々のメニューにしてある。

今日は、朝食の準備のために早起きしていたエリーとシャロンが練習を見学している。

二人とも、技の確認の為に رفتっていた武術（我流）の形の動きに目を奪われていた。

「その動きはなにをしているんです？」

ちょうど、打撃の形の練習をやっていると、ずっと見ていたシャロンが意味を尋ねてきた。

「これは『形』って呼ばれる練習方法で、基本的な動きを覚えたり、実践ですぐにできるように身体に覚えさせることができます。この練習を繰り返すことで、動作の無駄をなくしていくことで相手に悟られないうちに攻撃することができるようになります。僕の世界では、奥義に分類されていて『無拍子』と呼ばれていますね」

「ベル君はそのムビョウシっていうのできる？」

エリーが期待に目を輝かせながら聞いてきた。

「出来ているかは実際に見たことないのでわかりませんが、そう簡単にできたら奥義とは呼ばれませんよ。僕のはただ早いただけだと思います」

「そうなんだ… ベル君でもできないことはあるんだね……」

「当たり前です。僕は神様でもなければ達人でもありません。ただの人ですよ」

「ただの人は、そんな小さい時にそんな動きはできないし、あんな

魔法も使えませんか！」

シャロンは、ただの人と言う答えに納得がいかないようだ。

「ねえ、私にもその戦い方教えてくれませんか？」

「それはいいですけど、確かシャロンは魔法使いを目指すんじゃないかったですか？それに母さんに剣術も教わっていますけど？」

「確かに剣術は教わっていますが、いつも手元に剣があるとは限りません。その時の為に覚えておきたいのです」

「私も教えてほしいな……」

エリーもちよこんと手を挙げながら参加したいと言ってきた。

「教えるのはいいですが、剣術の練習中にはそんなに教えられませんか？　しっかり覚えたいなら早朝や昼の空いている時間に教えます。それでもいいですか？」

「剣術も練習したいですし、私は問題ないですわ」

「私も大丈夫だよ。朝起きるのは得意だから」

そう言って二人とも頷いた。

「わかりました。それなら僕の国に女性でも簡単に相手を無力化できるものがありますから、それを教えましょう。名前は『合気道』っていう武術です。僕のは身体能力が大きく影響しますし、女性では厳しいと思うのでやめておきましょう」

「わかったわ。でも、そんな戦い方があるなんて、ベルの世界は戦いがなかったはずじゃないの？」「僕が生きていたときになかっただけで昔は大きな戦いがたくさんありましたよ。この世界と違ってたくさんの方がありましたし歴史も長いと思います。歴史が長ければそれだけいろいろな知識や戦術も出てくるものです」

「そんなものかしら？」

「そんなものです。そろそろ朝食を作り始めないとみんなが起きてきちゃいますね。今日は午後に剣術練習をやるので母さんが言っていたのでそのときにまた話しましょう」

「そうですね、じゃあまた後ほどお願いするわ」

「私、先に調理場に行ってるね」

エリーが一足先に調理場に行こうとする。

「私も野菜を持ったらすぐに行きますわ」

「僕も手伝います」

シャロンは菜園のほうに歩いていき、俺もその後を追った。

朝の献立は、リバフロの肉団子と菜園サラダだ。食卓に料理を並べだすと匂いにつられて続々とみんなが起きて来る。

全員が席に座り終わる頃には、食事の準備も完了していた。

「それじゃあ、みんな目をつぶって自然の恵みに感謝しながら、お祈りすること！」

マリアさんが目をつぶると、みんなも一斉に目をつぶって自然に祈りをささげる。孤児院の食事前と後に必ず行うしきたりのようなものだ。3秒ほどすると各自目をあけて食事に入る。

それが終われば、騒がしい食卓になる。

「こらトビアス！ サラダもちゃんと食べなさい！ ライオのお皿に移しちゃだめでしょ！」

ライオットに自分のサラダをあげようとしたトビアスを叱る。

「今日の肉団子おいしいねー」

「今日のはエリーが味付けしたのですから当たり前です」

「そんなことないよう…今日はベルとシャロン姉さんが味見してくれたからだよ」

その横では肉団子を何個も頬張るアリスと行儀よくサラダを口に運ぶシャロンが、顔を赤く染めたエリーを褒めている。

シュレーダーとライオットは一心不乱に食べ物食べている。

俺は肉団子を食べながらそんな風景を見て和んでいた。

前の世界では、俺は一人っ子だったし父さんもレスキューチームにいたので、こういう騒がしい食卓にはあこがれていた。ワンピースの食事時とか楽しそう一度でいいから体験してみたかったん

だよな。彩花の家との食事会も父さんたちが酒を飲んだおかげで騒がしかったけどなんか違ったんだけど、異世界で夢が1つ叶っちゃったな。

そうそう、今日の肉団子はほとんど俺が味付けをしたんだ。かくれんぼの時にスパイスあるのを知って使ってみたら胡椒みたいなのやつがあったんだよ。でも、そうになると炭水化物取りたいな……

こっちの世界に来てから、お米食いたい症候群が発症しそうになるくらいご飯を食べていない気がする。今度魔法で作ってみよう！

食事を片付けた後は、自由時間だったのでシャロンとエリーを呼んで合気道を教えようと考えていたが、なぜかマリアさんとアリスとケインが様子を見に来た。シュレーダー達は孤児院の中で遊んでいるようだ。

「ええっと、母さんたちはどうしたんですか？」

「私はベルが今度は何するのか興味があっただけよ」

「私はシャロン達が楽しそうにしてたから仲間はずれはやだなーって思っただけだよ！」

「僕は、お母さんと同じかな」

3人が、期待してるぞって顔をしながら答えてくる。はあ、そうやってハードル上げるのはやめてほしいよ……

「まあいいですけど。それでは合気道について教えていきます。」

合気道は、僕の世界では約60年前に生まれました。生まれたといつても、元の武術から分かれただけで本当は約300年位前からある伝統的な武道です。合気道の特徴は、「小よく大を制する」で、自分の体を合理的に使うことで体格体力に関係なく相手を投げ技や固め技で傷つけずに無力化することができます。ここまでで何か質問はありますか？」

「はい！」

「はい、シャロンねえ」

元気良く手を挙げたシャロンをあてる。

「投げ技や固め技とはなんですか？」

「そうですね…、母さんは分かりますか？」

「いいえ、よくわからないわ」

「そこからですか… 投げ技というのは効率よく相手を地面に倒す
が出来る技、固め技は、効率よく相手の動きを封じる事が出来る技
をさします」

「……？」

みんな首を傾げてハテナマークを出している。見せた方が早いかな。

「実際にやったほうがわかりやすいと思います。アリスねえ、僕に
殴りかかって来てください」

「えっ？ 殴りかかればいいの？」

「はい。とりあえず、蹴りはやめて本気で僕の顔を殴って来て下さ
い」

「わかった。じゃあ行くよっ！」

アリスは俺に言われた通りに顔面めがけて右ストレートを放って
きた。本気でと言っただけあってスピードは結構早い。

俺は、素早く避け、目標を失って身体が前方に流れているアリス
の右上腕部をつかむと同時に懐に入る。重心が崩れた足元を右足
で蹴りあげ、腰を支点にしてアリスの身体は宙を舞った。殴りかか
ったはずのアリスは一瞬で地面に寝転がってしまっている。

アリスの反応をみると自分が何をされたのか分かっていないみた
いだ。

「大丈夫ですか？」

「えっ？」

一応アリスは受け身を覚えていないと思い、衝撃が来ないように
優しく投げたつもりなのだが、ピクリとも動かないとどこか怪我を
させたのではないかと不安になってしまう。

「あつ、うん大丈夫だよ……」

とりあえず立ち上がって返事をしてきたがまだ放心状態だ。まあ、大丈夫みただし先に進めるか。

「今のが投げ技のひとつで『一本背負い』と呼ばれるものです。合気道の技ではありませんが同じようなモノですし、大体の感じは掴めましたか？」

俺はみんなに確認するが、みんなも今の動きに呆気にとられているようだ。

一番最初に我に返ったケインが頷いてくれる。

「今のは、怪我をしないように動きを押えましたが、本来なら地面に投げられた瞬間に大きな衝撃が身体を襲い動けなくなります。投げられても、地面に当たる直前に『受け身』と呼ばれる技法を使えば衝撃を和らげることができまし、投げられている間にも相手の投げを崩すことでいくらかダメージは抑えられます。が、地面に投げられた瞬間に不利な状況になったと考えていいです。投げた方は相手が寝ている間主導権を握ることができるので、逃げるもよし、捕縛するもよし、首を踏んで殺すもよしと、いろいろなことができます。固め技は、捕縛中心の技法だと考えてもらえれば結構です。分かってももらえましたか？」

「とりあえず…… この世界にはない高い技術だつて言うのは分かったわ。それにしても、人つてあんなに早く動けるのね……」

「実際には、早く動いているように見えているだけです。これは、剣術にも通じる事だと思えますが、生き物は動くときに必ず予備動作をとります。人なら、殴る時に一度手をひいたり、歩くときに手を振ろうとしたりと様々です。それを、なくしていくことで相手に行動の起こりを悟られにくくなり、気づかれないうちに相手に行動を起こしたり攻撃できたりします。これは朝にシャロンねえとエリ―ねえには話しましたが、これを突き詰めていくと『無拍子』という奥義に達します」

今話を聞いてエリ―以外の4人がゴクつと唾をのんだ。

「それじゃあ、ベル君の今のムビョウシじゃないの？」

それに1人氣が付いてないエリーが俺に聞いてくる。

「いえ、先ほどの動きでもまだ至っていないと思います。これから、剣を振ったりするときも予備動作について考えながら練習してみるといいかもしれませんね。日々精進ですよ」「そうね……ベルの動きを見ていると自分のレベルがどれだけ低いのかよくわかったわ」
マリアさんが、俺と自分を比べたのか自嘲気味につぶやく。

「そんなに卑下に考えないでください。剣術の技術や戦いの経験は母さんのほうが全然上です。僕には前の世界の知識もありましたし反則をしてるだけです」

「そう言ってくれると楽になるわ。ありがとう」

ヤバい… 場の空気が沈んでしまった。確かに俺が逆の立場で自分より年下が圧倒的に上の實力を持って慰められたらショック受けるな… でも、俺の言ったことも本当のことで真剣勝負ならマリアさんの方が何枚も上手なだけだな。

「それじゃあ本題に戻りますが、細かいことは置いておいてとりあえず稽古を始めましょう。シャロンとエリーに説明しながら技をかけるので感じを身体で覚えてください」

そう言っただけで、シャロンとエリーは身体をビクッと震わせた。

自分がさっきのアリスみたいになるのが怖いのかな？

「……今日はやめておきますか？ちなみに、技をかけるといつても僕がするのは二人に感覚を知ってもらうことなのでさっきみたいに早い技はかけませんよ？」

無理するといけないと思いをかけたがそれは杞憂だったようだ。

「私はやりますわ！」

「私もやるっ！自分で覚えたくて言い出したことだし、ベル君を信じてるから大丈夫！」

怯えもすぐに収まったようで、二人とも顔にやる気が満ち溢れて

いた。空元気ではないようなので本当に良かった。そんな事を思っている。アリスとケインが近づいてきて俺に頭を下げってきた。

「私にも教えてください！早くお母さんを助けられるように強くなりたいのっ！！」

「僕にも教えてほしい！僕も早く強くなって大切な人を守れるようになりたいんだっ！！」

真剣な態度で頼まれたので俺はうるたえてしまう。

「そっ、そんなに畏まらないでください。教えるに決まってるじゃないですか。頭を上げてください！」

すると、マリアまで頭を下げてきてしまった。

「ベル、もし良かったら私にも教えて欲しいわ！」「母さんまで！？」

なんでこんな状況になったんだよ…誰か助けてくれっ

すると、ちょうど外に出てきたシュレーダー達と目があつた。そして、こっちに走ってきた。

助かった……これできつと流れが変わる。

と、気を抜いたのがいけなかった。

シュレーダーは、その勢いを緩める事なくこちらに突撃してきた。

「みんなにいつたい何したんだ！？」

ああ、完全に勘違いして居やがる…俺がみんなを虐めているようにでも見えたのかな？

「とりあえず落ち着いてください。シュレにいが考えているようなことはしていません」「シュレーダー落ち着いて。ベルは何も悪いことはしていないわ」

マリアもシュレーダーのほうを向いて宥めてくれる。

「母さんは黙ってて！何をしたかは分からないが関係ない！ベルっ！！俺と勝負しろ！！」

「そっだ、勝負しろ！！」

「勝負勝負！」

頭に血が上ったシュレーダーはマリアさんの声が聞こえておらず、

一緒にいるトビアスとライオットも意味を分かって言っているのか
シュレーダーに続いている。

うーん、このまま話術で丸めこむこともできるけどシュレーダー
はきつと納得しないだろうし今まで正面からぶつかったことなかっ
たし、なんの勝負をするかは分からないけどとりあえず受けるか。
「分かりました。その勝負受けます！」

こうして、合気道を教えていただけだったのに、いつのまにかシ
ュレーダーと勝負することになってしまった。

第二章 3 教授（後書き）

今回は、次の話に引っ張ってみる事を試してみました。

展開が見苦しいと思います。スミマセン。慣れてないんです……

次話は1日前後に挙げられたらと思っっています！

これからもよろしくお願いします。

第二章 4 狩猟（前書き）

どうも！！

今話は喧嘩の前編的な感じになりました。

筆者の語彙が少なくアクションシーンは納得いかない感じになった気がして悔しいです。

読者の方々に納得してもらえるかどうかは分かりませんが、これからがんばっていきたいと思いますんでよろしくお願いします。

前話を投稿してからお気に入りがまた増えました。登録してくださった方ありがとうございます。恥ずかしい文を作らないように励みにさせていただきます。

第二章 4 狩獵

孤兒院を囲んでいるラージの森は比較的魔物が少なく、野生の動物が多く生息している比較的危険度の低い場所である。

危険な動物といつても2メートルを超える体格と赤い毛皮が特徴の大型肉食動物のレッドベアや基本的に3、4匹で行動する中型のブルウォルフ位だろう。孤兒院には、マリアが作った動物除けの結界が張っており、狩りをする際には少し遠出をしなければならぬという不便さはあるものの、子供たちが安全に生活できる要因の一つでもある。あとは、毒草と稀に他の地域からやってきた魔物に気をつければ十分に暮らしていける場所である。

現在、俺とアリスはシュレーダーとの勝負のため、ラージの森に入って狩りをしている。

事は、約一時間前に遡る。

「ベルっ！！俺と勝負しろ！！」

「分かりました。その勝負受けます！」

いつもの遊具場は、俺と俺を睨みつけてくるシュレーダーで殺伐とした空気になっている。

発端は、俺がシャロンとエリーに合気道を教えていて、それを周りで見ていたアリスとケインとマリアさんが自分たちにも教えてほしいと頭を下げてきた所に、何も知らないシュレーダーたちが現れ、俺に頭を下げているマリアさん達を見て何か勘違いをしたらしく勝負を挑んできた。

別に話術で回避しても良かったがシュレーダーの性格上それでは納得しないと考えた俺がその勝負を受けた結果こんな状況になった。時には、対話よりもやり合った方が早い事もあるって事だな！

「シュレーダーは、一度落ち着いて話を聞きなさい！ベルも話が

ややこしくなるから受けないで」

すかさずマリアさんが仲裁に入ってきた。

「そうだよ、ベルは悪いことはしてないんだから受ける必要ないよ！」

「シュレ兄さんも、僕たちの話を聞いてください！」

この状況を何とか収めるべくアリスとケインもマリアさんに続く。しかしおれたちは聞く耳を持たなずに挑発しあう。

「勝負つて言っても何をしますか？ 殴り合いですか？ そしたら僕の勝ちが決まっていますね」

鼻で笑いながらバカにする言う俺。

「誰が竜人の俺に勝つて？ そんな小さい体で俺に届くのか？」
シュレーダーも挑発を挑発で返す。

20過ぎが4歳児と口喧嘩なんて恥ずかしいな… 彩花にこんなところ見せたら何言われるか……

マリアさんはお互いに火花を散らしている姿を見て諦めたく提案をしてきた。

「勝負するにしても、納得行く手段でやらないとダメよ！ 殴り合いは絶対にダメ！ その他の場合でも、家族みんなが納得出来る方法にしなさい！」

殴り合いはダメで家族が納得するやり方が……
要するに怪我をしないやり方にしろと？

いい案がないか考えていると、反対側にいたシュレーダーがこれしかないだろと言わんばかりのドヤ顔でお題を出した。

「やるのは狩り勝負だ！」

(ふむ…… 狩りか。俺一回も狩りした事ないんだけど、能力差を考えるとそれで五分五分かな?)

確かにいいかもなんて考えていると、アリスが猛反対でした。

「そんなのダメに決まってるでしょ!! ベルはまだ一回も狩りに行ったことないんだよ!? シュレーダーが有利すぎるよ!!」

アリスに続きマリアさんも苦言を示す。

「確かにそれは平等じゃないわね… やるなら一回で納得できるよ
うにしないと…」

「狩りは初めてですけど、どんなものかは分かっているので僕はいいですよ？」

「でもねえ……………」

マリアさんは納得できないようだ。本人たちが納得してれば大丈夫だと思っし、負ける気もさらさらないんだけど…

「そしたら、各自相方を1人付けるのはどうですか？経験の差も相方がいれば教えてもらえますし大丈夫だと思うんですけど？」

「俺はそれでもいいぜ！俺の相方にはトビアスを連れていく！！
トビアスもそれでいいな？」

「大丈夫！！！」

マリアさんたちが返事する前にシュレーダーが相方を決めてしま
う。

当事者たちがいいと言っているので何も言えなくなったようで反
論はないようだ。

そしたら、相方を決めないとな。

まずは、マリアさんは審判になるだろうし相方にしても逆にこっ
ちが有利になっちゃうから却下。

エリーは、狩りのような肉体労働は苦手だし、荒事にも慣れてな
いから同じく却下。

ライオットは、相方にしてもいいけど不測の事態が起こったとき
に危険だから却下。

となると、残りはアリスかケインかシャロンの3人か。うーん…
…誰でもいいかな。

誰にするか悩んでいるとアリスが自分が相方をすると立候補した。
「私ならシュレーダーと同じかそれ以上の経験があるし、何かあっ
たときでもベルを守るから私がやるわ！」

なんか知らないけどやる気満々だ。実はこういう勝負みたいなの
好きなのかな？

他の二人もそれでいいようだ。

マリアさんもそれで同意したので相手はアリスに決定した。

「勝負のルールだけど、大きさじゃなく数と種類で判定しましょう。そのほうが、夕食も豪華になるだろうしね。時間は私が魔法で合図するまでよ」

そう言つてマリアさんがルールを決めた。

「僕はそれでいいです」

「俺もそれでいいぜ」

「後は、注意事項ね。」

狩りはあまり孤児院から離れすぎないこと。

めつたにないけど、レッドベアやブルウォルフや魔物を見かけたらずくに逃げる事！

それ以外でも、命の危険を感じた瞬間に助けを呼ぶこと！

後は、アリスにだけど、ベルは初めての狩りだから基本から教えてあげる事！

私が教えてもいいんだけどアリスもお姉さんなんだからしっかりした所も見せないかね。

万が一に備えて私は空から4人を監視しているからずるをしちゃダメよ。

シャロン達ライオの面倒を見てあげてね」

マリアさんの言葉に全員が了承の返事をした。

「じゃあ、4人は準備してらっしゃい。準備ができたら始めるわよ」
マリアさんがさういうと俺たちは狩りの準備のために孤児院に向かった。

シュレーダーったら大人げなさすぎよ！

確かにあの場面は。だけど、理由も話してくれて仲直りしたって
いうのに、話も聞かないで喧嘩ふっかけるなんて……

しかも狩り勝負ってなによ！？

自分の得意な事で勝負しようなんて！

……いや、ただ単に思いつかなかっただけかもすれないかな
とまあ、ベルはシュレーダーなんかには負けさせないんだから！

アリス side out

アリスがシュレーダーを目の敵にしながら、狩りで使う弓を準備
している。

アリスの弓は、自分で作っただけで、成長途中の身体に合わせた
小さな物だ。弓本体と矢は森の木を加工して作り、弦は村で買っ
た伸縮性のある糸を束ねているようだ。

シュレーダーのも弓矢も同じ物らしく今は矢筒にいれて肩にかけ
ている。

相方のトビアスは、補助に徹するようで、狩った動物を持ち運ぶ
布の袋の準備をしている。

今回は、警戒が強い動物を目標にするため遠距離から仕留める弓
を主流で使うようだ。

俺は弓を扱えないため、魔法と投擲で狩りをする事になった。

アリスの話だと、野生の動物はマナの動きに敏感らしく魔法を使
おうとするとすぐに逃げてしまうらしい。 やってみないと分から
ないが、色々工夫する必要があるようだ。

俺はトビアスと同じ袋と腰に刃渡り10cm位のナイフを持って

いる。アリスが基本弓で攻撃するため両手を使わなくてもいい俺が狩った動物を持つ事になった。

やる気といい、装備といいこれじゃあどっちが相方なのか分からないな……

相変わらず、シユレーダーに鋭い視線を送りながら張り切って準備してるアリスをみて苦笑してしまった。

そして、話頭に戻る。

森に入ってから約20分が経過している

最初は森に入っすぐの場所を探していたが、1匹も見つからなかったため今はポイントを変えている所だ。俺が前衛、アリスが後衛のポジションで、俺が、獲物を探し、アリスが狙うという役割になっている。

俺は、その獲物を探すために索敵魔法を展開している。

この魔法は自分の半径500mの生物が解るものでレーダーをイメージして作った。

野生動物はマナの動きに敏感らしいのでマナを出来るだけ身体の中に抑えて使っているため、多分気づかれないはずだ。その分範囲もせまいんだけどな。

そのまま歩いていると、3時の方向に小動物の反応が出た。周りの木がブラインドになっているためまだ目視では確認出来ないが間違いない。

「アリスねえ、あっちに動物の反応があります。多分ヘビラピだと思われます。距離は約500mです」

アリスに反応の方向に指を指しながら報告する。

「あっちにいるのね？ ベルの索敵魔法は凄いな。方向じゃなくて距離まで分かるんだ？」

極力音を出さないようにしながら反応した方向に向かいながらア

リスが小声で話し掛けてきた。

「偶々イメージし易いものが前の世界にあっただけですよ。後300です。移動はしていないみたいですね」

「分かったよ。それでも、使えるんだからベルは凄いよ。私は200mが限界だもん……」

「後で、見てみますか？」

「いいの？ 創るのって疲れるんでしょ？」

「創れるかは分かりませんが、もし出来たらどんなものかも教えてくださいよ。後200です」

「私にも反応あったよ。それじゃあお願いしようかな？ ……ベルは優しいね」

アリスは、小声で何か呟くと担いでいた弓矢を手を取った。

声が小さくて最後何言ったのか聞こえなかったけど、お礼を言われたみたいだな。この勝負が終わったら試してみよう。

そのまま近づいていくと、残り170mの所で草を食べている約30cmのヘビラピが見えた。

向こうはまだこちらに気づいていないようでムシャムシャと食べ続けている。

アリスは獲物が動かないことを確認すると矢をつがえて弦を引き狙いを定める。

その状態で止まること約3秒。

打ち気を抑えて自然体になっているアリスの指が矢を離した。限界まで引かれた弦から射出された矢は獲物まで真っ直ぐに飛んでいき右後ろ足に刺さった。

キーと甲高い鳴き声が聞こえると同時に俺は急いで獲物に向かう。足に矢が刺さって動けなくなったヘビラピはその場で鳴くだけになっっていた。

俺はこれから命を奪う事を心の中で謝りながら腰に差したナイフを抜きヘビラピの首にストンと落とす。首を切られたヘビラピは少しの間痙攣していたがすぐに動かなくなった。

俺は再びナイフを腰に差すと、自分が奪った命に目を瞑って手を合わせた。

すると、追いついたアリスが声をかけてくる。

「それが、ベルの世界での狩りの作法？」

「作法って訳じゃないですけど……手を合わせたい気分だっただけですよ」

目を開けると、腐らないように魔法で死体の周りを氷で覆って袋に入れる。

「何で死体を凍らすの？」

アリスが立ち上がった俺に質問してきた。

「死体が腐るのを遅くする為ですよ。奪った命を無駄にはいけませんから」

「へえ」

アリスはなる程と首を縦に振る。

そのまま次の獲物を探して歩いていくと次の獲物を発見した。2時の方向にヘビラピ、10時の方向にヘビラピよりも少し大きい反応があった。

「ちよつと気になる反応があるんで様子を見てきます。斜め右50

0m位にヘビラピが1匹いるようですのでそちらをお願いします」

「それなら私が見てくるよ」

「中型の反応ですし、気になっただけですから大丈夫です」

「分かった。気をつけてね」

ちよつと納得がいかないようだがアリスの了承を得ると小走りで反応の方向へ向かう。

残り250mというところで鹿みたいな動物を見つけた。みたいなというのは毛並みは黄色で、角が3本生えていて、尻尾が2本になっていたので。はぐれブルウォルフかと思って警戒していたがこれなら大丈夫そうだ。

俺は、射線が開いた場所に体育座りをすると、身体の中からマナを作り身体強化魔法の応用、視力強化を使って右手をピストルの形

にしてイエローディーアー（仮）に向ける。

（イメージは蒼い弾丸、着弾と同時に氷が展開して身体を氷で固める）

指先に水球とは違う直径2cm程の蒼い玉が生まれる。相手はこちらに気付いていないようでゆっくりと歩いている。

相手が動く先を読んでイメージする。手が動かないように膝で固定しいつでも打てるようにする。そしてイメージと獲物の動きが重なった瞬間に玉を発射した。

無音で発射された蒼玉は一瞬でイエローディーアーの左腹部に着弾し、次の瞬間氷の塊に包まれた。

俺は今できた氷の塊に近づき、成功しているかどうか確認する。

（上手くいったみたいだな。玉のスピードは思ったより速かったけど狙った所に当たったしまずはおツケーか。後は、電気の玉でも使ってみるか）

次は何を試そうか考えながら自分より大きいイエローディーアーを風の魔法で浮かせて、ヘビラピを獲ったであろうアリスの元へ小走りで行った。

第二章 4 狩猟（後書き）

次話は土曜日に投稿できたらと考えています。

第二章 5 自惚れ（前書き）

どうも！

今回で投稿して10話目になりました！

これも読んでくださった方のおかげです。ありがとうございます

！！

正直言って毎日更新してる人凄く尊敬してます！

いや、毎日投稿とかどう頑張っても時間足りないです……

ということだから2、3日での投稿を目安にしていきます！

今話は後編的な感じになっています。

少し分が長くなってしまいましたが、時間がある時に読んでもらえるとうれしいです。

余談ですが、前話を投稿してからお気に入り登録がまた増えていました。ありがとうございます！！

いつの間にか、文章とストーリーの評価がされてました。ありがとうございます！！

こんな文に3ptももらえるとは思わなかったので正直テンション上がりまくりました！！

これからも、これを励みに頑張っていきます。

それではよろしく願います。

第二章 5 自惚れ

難なくヘビラピを獲ったアリスと合流した俺は、一度狩猟した食料をマリアさんの所に持っていくことにした。

氷漬けの鹿を魔法で持つてくる幼児というのがよほどシユールだったのか、合流した時はアリスに、孤児院に戻るとみんなに驚かれた。

シャロンたちは、俺が教えた組手形式の練習をして暇つぶしをしていたようだ。

シユレーダーたちの様子を聞くと、ヘビラピが3匹獲ったそうだし子供2人で狩りをしているんだから相当すごいと思う。話を聞くとシユレーダーは魔法使わずに物音で獲物を探して狩りをしているらしい。シユレーダーみたいにも狩りに行っているからできる芸当だとアリスはあきれていたが、今度おれも挑戦してみようかな？ 獲ったモノを渡すとまた森に戻る俺とアリス。試したいことがあるし楽しみだな。

トビアス side

おう！俺はシユレ兄貴の弟のトビアスだ。

一度獲ったヘビラピを置きに行った後にさっきよりも森の奥に来ている所だ。

ベル達はまだ戻って来てなかったけど兄貴はヘビラピを3匹も獲ったんだぜ！

凄かったんだぜ？

俺にはよくわかんないんだけど、兄貴には獲物がどこら辺にいる

かわかるみたいでいきなり弓を構えて撃つたと思つたら獲物を仕留めてるんだよ！！

ベルのことをアリス姉が助けてるみたいだけどこんな事が兄貴が負けるはずがない！！

それよりも、狩り勝負を始めた位から気になつてたんだけど、兄貴はベルに対してそんなに怒つてないみたいなんだ。

逆に、勝負してるのが嬉しいみたいにな上機嫌なんだよ。

今も、ベルが口ずさんでた音楽を鼻歌で歌いながら獲物探してるし、今は大丈夫そうだし、聞いてみようかな？

「兄貴、聞きたいことあるんだけどいい？」

兄貴は鼻歌を止めてこっちに向き直つて言つてみる俺を促す。

「兄貴はベルが母さん達に悪い事してないの分かつて喧嘩売つた？」 兄貴はニヤつと口元を上げた。

「当たり前だろ？ あの家族大好きなベルがみんなが嫌がるような事するはずないじゃんか」

「じゃあ、なんで変な挑発までして勝負してるの？ こんな事しなくても良かったんじゃない？」

「逆に聞くけど、トビアスはベルの俺達に対する態度どう思う？」 兄貴に聞かれて考えてみる。

俺の知っているベルは、何かと気が利いて、大人っぽい雰囲気が出ている。家族みんなの事を第一に考えていて、この前も俺が魔法の練習で分からない所があると教えてくれた。どっちが年上か分からないような奴だ。

それを兄貴に言つと、ちよつと怒つた顔になった。

「お前はそう考えてるのか。俺はハッキリ言つてベルは俺達にまだ距離を置いている気がするんだ。あの他人行儀な話し方がその証拠だ。ベルが自分の事を話してくれた時だけ砕けた話し方をしていたけど、今はまた戻つちまつた。俺はもつと家族として普通に接して欲しいんだよ。他人行儀な話し方なんて認められない。だから一度正面からぶつかり合う必要があると思つたんだ。俺は母さんやシャ

ロン姉みたいに賢くないからこれしか浮かばなかったんだよ」

兄貴の話聞いて俺はジーンと心に来てしまった。

どれくらい来たかと言うと流石兄貴だ！これからも付いて行きま
すと思う位にジーンと来た！

兄貴がここまで考えて動いてるんだ。俺ももつと頑張らないと！！

「兄貴！ 絶対に勝ちましようね！！」

「当たり前だろ？ 俺を誰だと思ってるんだ？ やるからには絶対に
勝つ！」

兄貴の考えを達成するためにももつと大きな獲物を捕まえないと

！！

俺はさっきよりも張りきって兄貴の後を追った。

.....トビアス side out

.....マリア side

ちょっとシュレーター達が奥に入り過ぎかしら？ 奥に行かれる

と木が邪魔で良く見えないから監視しにくいのだけど.....

私は、勝負の審判兼監視役のため天属性中級魔法『飛行』を使っ
て、森の上空からシュレーター達を見守っているわ。

今のところ、シュレーターがヘビラピ3匹、ベルがホーンディア
ー頭とヘビラピ2匹か。

ベルのほうが先行してるわね。

シュレーダーを見てると、あの子もいろいろ考えてるみたいね。トビアスとの話を盗み聞きさせてもらったけど、あそこまで考えているとは思っていなかったわ。

子供の成長は親が考えている以上に早いと聞くけど実感させられ
たわ。

この問題は、シュレーダーに任せましょう。

それにしても、ベルがホーンディアを仕留めた魔法。あれは、今までに見たことがない種類の魔法だったわね……

身体が氷に包まれていたから水属性の魔法だと思っけど空間干渉型ではなかった。もし、空間干渉型なら外部のManaを使うから動きが活発になるし、そしたらホーンディアが気付かないはずはないもの。だとすると、体内で生成したManaを使った魔法しか考えられないけど方法が浮かばないわ。

ああーモヤモヤする！！

一魔法使いとして方法が知りたいけど、今聞きに行くわけにはいかないし……

自分で言うのも変だけど、これでも国で上位の魔法使いだったのよ。たくさん書物を読んで、多くの実践をこなして師匠 せんせいにも勝てるくらいになったのに、まだ子供なのに私より魔法の扱いが上手いベルを見ると、妬みの気持ちがでないで、精進しなきゃと素直に認められるのだから不思議よね。とりあえずこの勝負が終わったらベルに聞いてみましょう。

あら？

考え込んでいたらシュレーダー達が見えなくなっちゃったわ。

さっきの方向だと奥には進んだはずだから探して連れ戻さないと
いけないわね。

まだそんなに進んでないと思うし、ここら辺は結界の対象外だから危険な動物と遭遇しちゃうかもしれないし早く見つけないと。

私は、シュレーダー達が進んだであろう方向に向かって降下して
いった。

次の獲物を探して森の中を歩き回る俺とアリス。最初のように簡単に獲物が見つからなくなり少し奥のほうまで来ている。深部に近づくとつれて木々の間隔が狭まって行動が制限され、自分の身長を簡単に超える木々から生えた葉が日光を遮り視界を悪くしている。(前にテレビで見た富士の樹海にそっくりだな。そこらへんに骨でも落ちてるんじゃないのか?)

流石に、今まで味わったことのない気味悪さに若干ビビりながら索敵魔法を展開している俺。

後ろでは、物音に過敏に反応するアリスがいる。

「アリスねえは狩りをする時にここまで来ないんですか?」

少し気分を変えるために俺はアリスに話題を振ってみた。

「私は、お母さんに言われて境界の効果範囲の近くでしかしてなかったからここまで来るのは始めてよ」

そうか…… だいぶ奥まで来たとは思ってたけどここは完全に境界の外なのか。それなら、アリスの警戒が異常に高いのもわかるな。「でも、アリスねえってお母さんと旅してましたよね? こんな所よりも危険な場所はたくさんありそうですし、修羅場にも慣れてそうですね?」

「お母さんはギルドの依頼とか危険なことは1人でやってたから、私は基本留守番だったよ。野宿とかもしてたけどお母さんが周りに簡易結界を張ってたから危なくなかったし、私も全然弱かったから

……」

「そうなんですか。だったら僕がアリスねえを守りますよ」

「ありがとね。でも、守るのは私だよ。私はベルのお姉ちゃんなんだから!!」

アリスは、周りの雰囲気には怯えながらも自分に活を入れて奮い立たせる。

そんなアリスが健気過ぎてヤバい!! 妹がいたらこんなに可愛いのかな? 彩花はどっちかって言うとアリスやエリーみたいな夕イブじゃなかったから凄く新鮮だ。

「分かりました。お願いしますねアリスお姉ちゃん!!」

そう言うとアリスは嬉しそうな表情を見せた。

やっぱり…、いいなあ。

はっ、これがいわゆる萌えなのか!?

アリスから久しぶりの萌え分を回復させる俺であった。

別にロリコンではないからな?

小さい子を愛でただけだからな?

勘違いするなよ?

俺が一番好きなのは彩花だから浮気じゃないからな!

そんな調子で20分ほど歩いていた。

さっきまで元気だったアリスも偶に聞こえる鳥の鳴き声や足元に落ちてくる動物の食い荒らされた死がいを見てシユンと身体を縮めている。

あまりにも視界が悪いので魔法で木を吹き飛ばそうかとも考えたけど、レッドベアーやブルウォルフに気付かれると大変なので我慢している。

もちろん、索敵魔法もマナがあふれないように注意して使っている。今は抑える事に慣れてきたので範囲をさっきの倍にしている。

先ほどまでと違いシューレーダー達とマリアさんの反応があったのでおちらに進路を変えて森の中を進んでいる。反応の動きをみると

シュレーダー達が俺達よりも奥に進んでいて、マリアさんがそれを追っているようで、俺達はマリアさんに一度合流しようと移動している最中である。

すると、マリアさんの移動速度がいきなり早くなった。それと同時に、シュレーダー達がいる場所のほうから獣の遠吠えが聞こえた。何かあったと考え急ぐ俺とアリス。

少し近づくと今までと違う反応が8つシュレーダー達の近くにいろのが分かった。さっきの遠吠えを考えると十中八九ブルウォルフだろう。

多分、シュレーダー達がブルウォルフ達の領域に入ってしまったのだ。索敵魔法を使っていればそれを避けられただろうが、シュレーダーは気配や音で獲物を見つけて言うてたから仕方がないんだろうな。マリアさんはブルウォルフの反応にいち早く気がついたから速度を上げたようだ。俺達が行っても邪魔になるかもしれないが、シュレーダー達を守りながら8頭の相手は厳しいだろう。

マリアさん達に近づくとつれて次第に戦闘音が聞こえてきた。反応を見ていると、マリアさんが合流して2人でトビアスをかばいながら戦っている。敵の数はまだ減っていないところを見ると苦戦しているようだ。

「母さん!!! シュレーダー!!! トビアス!!! ツツツ、『炎弾』!!!」

3人の名前を呼びながら囲んでいるうちの1頭に、移動中に作っていた指先大の青い弾を撃つ。銃で打ち出したのと同じスピードで飛んでくる弾に、不意打ちで後ろからの攻撃に反応出来る訳もなくそいつの背中に着弾。青い炎がソイツの内外を燃やし尽くし、仲間はそのを見ていいる事しか出来ない。

炎が燃え尽きると炭になった死体と肉が焦げた匂いが辺りに広がっている。

俺はそのままマリアさん達に合流し数秒遅れてアリスも到着。

ブルウォルフ達は、仲間がやられた事で警戒しながら距離を置い

た。

ブルウォルフ達を牽制しながら3人を確認する。

マリアさんとシュレーダーは少し息を切らしている程度だったが、トビアスは2人の間で左脇腹から血を流して呻きながら横になっている。

見た所ブルウォルフの一頭に噛まれたようで深い傷のようだ。アリスが急いで治癒魔法をかけ始める。

俺は急いで2人にトビアスの容態を確認した

「トビアスは大丈夫なんですか?!」

「私が見た限りじゃ内臓にまで達しているわ。すぐにでも直してあげたいんだけど私たちの治癒魔法じゃ止血まではできても傷を治す事が出来ないの」

「すまねえ。木の影に隠れていて対応出来なかった…… 兄貴失格だ」

2人は、いつもよりトーンを落として答えた。

俺は、その態度に苛立ち素の口調で怒鳴ってしまう。

「シュレーダーはそういうの後で言え!! トビアスは後どれくらい持ちますか?!」

「私見だけど、このままだと長くて十分が限界だと思っわ。私も隙を見て治癒魔法をかけてみたけど私の腕では表面は直せても内部の傷までは治せないわ」

マリアさんは自分の不甲斐なさに顔をしかませながら言う。

「どうしよう…… 血が全然止まらないよう……」

アリスが目から涙を流しながら治癒魔法を続ける。

この傷では、治癒が得意なエリーにも治せないだろう。

どうする!?

どうすればトビアスは助かる!?

マリアさんは治癒魔法が得意ではないと言っていたし、残り十数分でブルウォルフ達を倒して、傷を治すにはどうすればいい?

こんな時に彩花がいれば……

いや、ないもの強請りしても仕方ないな。　　と言つか考えなくて
もいいじゃないか！

俺が、速攻でコイツらを始末して、トビアスに治癒魔法をかければ
いいだけだ！！

俺の身体マナで真っ赤に輝きだす。マリアさん達はあまりの眩し
さに目を瞑る。ブルウォルフ達も規格外のマナの多さにジリジリと
後ずさりをしてしまう。

「マリアさん達は一步も動かないでくださいね！」

(イメージは炎の槍。それを俺達を中心に全方位展開。動きを封じ
るために鎖を巻き付ける。時間がない……　この一撃で終わらせる
！！)

俺から放たれた光が21本の槍になりブルウォルフ達に槍先を向
ける。同時にブルウォルフ達の脚や身体に赤い鎖がキツく絡みつい
て動きを封じる。

「悪いがさつさと終わらせる！！」

「『炎宙刺突』」

宙に浮かんだ赤い槍がブルウォルフ達の頭部、喉元、胸に吸い込
まれる。重要器官の3箇所に刺さった槍がブルウォルフ達の命の源
を燃やし尽くす。残ったのは狼だったタンパク質の塊だけ。

辺りを見回し、脅威が無くなった事を確認すると最大の問題に意
識を切り替える。

トビアスはアリスが変わらず止血を試みているが未だに止まってい
ない。顔が紫色に近い状態で息も弱くなってきた。残りは
数分という所だろう。

俺は、アリスをどかしてトビアスの傷口に手を置き治癒魔法をかけ
る。

水属性の魔法は何故か相性が悪く、あまり効果が出ないが有りつ
丈のマナを治癒魔法に使えばきつと完治すると考えてた。

しかし、現実はそんなに甘くないようだ……

マナを注ぎ込んでも魔法に変換出来ておらず効果が出ない。俺の横ではマリアさんとアリスが目には涙を浮かべながら治癒魔法をかけ続けている。シュレーダーは、手をトビアスの傷口に当てて必死に止血しようとしている。

そっだよな……

そう上手くいくはずないんだよな……

こっちに来てから普通じゃできないことができていたから知らないうちに何でもできるって調子に乗ってたんだろっな。

でも、今はダメだ！

絶対に成功させないと俺の家族が死んでしまう！

まだだ！

まだ何か方法があるはずなんだ！！

マナがただ漏れの治癒魔法をしながら方法はないかと思考を巡らせる。

しかし、どんなに考えてもいい方法が見つからない。

トビアスの血が止まることなく地面を赤く染め上げていてもう失血によるショック症状が出てもおかしくない……

目を瞑って、いるかも分からない神様に祈る……

どうかトビアスを助けてください、と……

すると、突然俺の右手の腕輪が光り出し、俺達の前に紅翼の鳥が姿を現れた。

その紅鳥は成人男性より少し高い位の体長から生えた大きい翼をためかせてその願い叶えようと言っているかのように「ケー」っ

と鳴いた。

紅鳥は黄色い嘴を開けて炎を俺達に向かって炎を出した。

俺達はまるで金縛りにあったかのように身動きがとれず視界を炎に覆われ何をされているのか分からなくなった。

数秒後、炎が消えると全ての傷が癒えた俺達と紅鳥が存在していた。

正気に戻った俺は急いでトビアスを見る。

トビアスの顔色は赤みが戻っており、俺達が治癒魔法をかけても治らなかつた傷が消えている。今は、眠っているようで静かに寝息を立てている。

とりあえず、この紅鳥がトビアスを救ってくれたと考える事にした俺は感謝の意味を込めて90°に腰を曲げる。

他の人も、正気に戻り俺に習って頭を下げる。

紅鳥はまた「ケー」と一鳴きすると身体が光に変わって、姿を消した。

それを確認すると、まだ何が起こったか分からない顔をしているマリアさんにこれからの事を尋ねる。

「今はトビアスも大丈夫みたいだし荷物をまとめて孤児院に帰りましょう」

俺とアリスで持ってきた装備を持ち、シユレーダーがトビアスをおんぶすると、マリアさんが『飛行』を発動し孤児院に帰った。

トビアスが助かって良かったけど、あの紅い鳥は何なんだろう？あの鳥が出現した時に腕輪が反応していたし、一息ついたら考えてみよう。

とりあえず、今回のことで自分の思い上がりに気付けたし、終わりよければすべて良しかな？

第二章 5 自惚れ(後書き)

アクションは今回でいったん区切る予定です。
次の投稿は日曜前後に投稿したいと考えています。

第二章 6 異世界の誓い（前書き）

どうも！

ギリギリでしたが公言通りに二日で投稿できることができました。

今話は前話に続き長くなってしまいました。

誤字脱字、または文法でおかしなところがあつたら指摘してもらえると助かります。

筆者は結構混乱していてもしかしたら矛盾している点があるかもしれません。一応、後のほうで分かるようにする書き方を意識しているのでそこはスルーでお願いします。

前話からまた評価してくれた人がいました。厳しい評価ありがとうございます！
ございます！評価してもらえるとどこが悪いとかわかるので凄く助かっています！

お気に入り登録してくれた方ありがとうございます！また3件増えてびっくりしています。

みなさんの評価や登録を励みに頑張ります！
それではよろしくお願いします。

「はい！（うん！）」

俺とトビアスがマリアさんと話していると、なぜかニヤニヤして
るシュレーダーが気になった。

「シュレは何で笑ってるんだ？」

周りも理由が分からず気になっていたようで視線がシュレーダー
に集まる。

「喋ってて気づかねえか？ ベルの話し方が他人行儀じゃなくなっ
てるぜ？ 俺のこともシュレにいじゃなくてシュレって呼んでるし」
「……………あつ！？」

言われて気がついた…… いつの間にか敬語使うの忘れてた。あ
の時は余裕がなくて素の口調になってそのまま意識しなくなっ
たのか。

「呼び捨てにしてごめんシュレにい……………」

「ああー……！ そんな他人行儀な言い方はむず痒くなるから
やめろよ。さっきのままでもいいんだよ！ これからはそういうの禁
止な……！」

口調を戻すと、猛烈な嫌悪感を見せるシュレーダー。

「でもみんな年上だし……………」

「それじゃあベルは前の世界の家族にも敬語で話してたの？ そん
なことないでしょ？」

「………」

それを言われるとどうしようもないんだよな。

「みんなは昨日までのベルとさっきまでのベル、どっちのベルがい
い？」

「……………さっきまでのベルがいい……！！」「……………」
全員の返事に思わず苦笑してしまう。そもそも、何でこんな口調
になったんだっけ？ 確か前に一度この口調をマリアさんに注意さ
れてタメ口にしたんだけど魔法とか教わっているうちにまた戻った
んだっただか？

「分かった？ 先に言うておくけど3度目はないわよ？」

しかも、釘を刺されてしまった。俺って体育会系だし精神年齢でも年上のマリアさんにはちゃんと敬語を使ったけどしょうがないな。

「分かった。俺も気をつけるけど戻ってたら注意してくれよ？」
みんなが笑顔で肯定する。これからはまた戻らないように気をつけよう。

「じゃあこの問題は終わりね。トビアスとベルの身体のことも言いたし、後はトビアスを治してくれた紅鳥とベルが武術を教えてくださいませんか……」

「紅鳥は現れるときに俺の腕輪が反応していたから何か関係があるのかもしれない。でも、危険はなさそうだからとりあえず保留でいいと思う。武術のほうは、シユレ達にも説明しないと」

俺は大雑把に俺の世界の武術のことを説明する。

シユレ達も興味を持ったらしく教えてほしいと言っている。

「シユレ達以外は知ってるけど、俺の使っている武術はほとんど我流なんだ。だから、しっかりと教えられるかどうか分からない。それだけは覚えていてほしい」

俺は先生に教えてもらったわけではなく、本に書いてある事を自分なりに思考錯誤して今の形になった。もちろん授業で習える基本的なことはしっかり覚えたとし、友達に経験者がいれば聞いてみたりしてたけど、だから教えられるかってなると自信がない。出来る限り分かりやすく教えるけどね。

俺が教えたとてことを伏せてもらおうかと思っただけど、自分がオリジナルだしすぐにはれるだろうと考えそれは言わないでおく。

「そのことなら心配は無いんじゃないかしら。さっきのアイキドウ？っていうのだけど意味は少し分かったし、もし分からなくてもベルに聞けば大丈夫でしょ？」

マリアさんが明るい声でフォローしてくる。

「分かる範囲でなら。教える武術も、個人に合ったものを教えるつもりだから。そこは俺のほうでも考えておくよ」

「そしたら、武術の時間も新しく作ろうかしら……」

「出来ればそのほうが時間も取れるしいいと思う。もうそろそろ寝る時間だし明日また考えよう」

話をしている間に眠気が来て、ライオとエリーが舟を漕いでいる。その他も欠伸をしたり背中を伸ばしたりし始めていた。今日は話を終えたほうがいいようだ。

マリアさんもそれに気づいて笑いながら話題を終わらせた。

「それじゃあ今日はもう寝ましようか。いろいろあったし私も疲れちゃったわ」

そのまま全員で寝室に向かい眠ることになった。

深夜、小さいほうをしたくなった俺は開き切らない目を擦りながら静かに部屋を出た。

このトイレは和式でいわゆるポットン便所というやつだ。前の世界と違うのはポットンの中にしたものは魔石によって分解されてしまうということだ。少し匂いは残ってしまうがそこは換気するしかない。女性陣は用を足すとマナで風を操って匂いを残さないようにしてる（アリス談）らしい。

前の世界と違うといえばこの世界では1秒を『セコ』、1分を『リミ』、1時間を『ハウ』、1日を『ダイ』、1週間を『ウエイ』、1年を『ヤー』って呼ぶそうだ。1日は26時間、1週間は6日、1月は5週、1年は300日でちょうど10月になる。

今まで24時間の365日で生活してきたので慣れるまでに時間がかかると思ったらこっちに来て5日目で慣れてしまった。幼児の適応力が高いのか、人間の適応力が高いのか分からないがすぐに慣れたのは良かったと思っている。

トイレを終えた俺はズボンを上げながら部屋に戻ってまた寝ようとした。

「ふあ〜」

(お……………ろ、…し…ん……………いお…ろよ…)
ん？ なんか聞こえる？

……………気のせいか。

(…い……………づけ…。ね…な、お…)

やっぱり何か聞こえるな……………

でも、みんな寝てるしな。

(いい加減気づけよ、バカ野郎！！)

「うおおおお！！」

どっかからハスキーな声が聞こえてくるぞ。どこだ、どこからだ
！？

(お前の中からだよ！バカ野郎！)

しかも、心を読まれているような返答まで聞こえてくる！？ シ

ユレ達は眠ったままだし幻聴か？

(それも含めて話したい事があるから院の外に移動してくれ！ こ
こじゃあチビたちを起こしちまう)

ん？ 腕輪の宝石が点滅してる。

(そうだよ！ 早く外に出てくれ。じゃないとずっと叫び続けて眠
れなくするぞ？)

分かった分かった。

どこの誰だかわからないが、それは困るので仕方なく外に出る事
にする。

静かに外に出て誰もいないことを確認した俺はさっきの声に呼び
かける。

すると、腕輪の中心にある赤い宝石が淡く光り、俺の目の前に妖
精みたいなのが現れた。

身長は20〜30cmで赤い頭髪、なぜか知らないが赤文字で前
に大きく「絶対マケナ〜イ」と書かれている黒地のTシャツに紺色
のジーンズをはいて背中からは4対の羽が生えている。

その異質な存在に少しの間頭が真っ白になった。

だって、そのTシャツに書かれてるのって、某サッカー番組で活躍してるクモ男さんの名ゼリフじゃないですか……

なんで異世界の妖精が俺の世界の服着て、そんなコアな服来てるんですか？

俺その番組大好きなんでその服ほしいんだけど……

「そんなのmanaを集めて作ればいいじゃねーか」

妖精がさっきまで聞こえていたしわがれた声で話す。しかし、冷静さが欠けている俺は違うことに反応してしまった。

「えっ？ 作れんの？」

「作れるんじゃない？」

お前が作れるって言ったのに何で疑問形なんだよ！

「だって、やったことないからわかんないじゃん？」

俺の心の声と会話する妖精。突っ込んだら少し落ち着いてきた。

とりあえず質問するとしたらこれしかないな。

「お前は誰だ？」

妖精は「やっと本題に入れるぜ……」とつぶやいた後、俺の質問に日本語で答えた。

「俺はフェイトって名前だ。ちなみに名前は自分で勝手に考えた。異世界では命を司る者として世界をコントロールしていた。お前の世界では、不死鳥 フェニックス、鳳凰 ガルーダ、朱雀 すぎくって色々な呼び方があったな。性別は無い。俺くらいの存在まで来ると不死だから、生殖行為がひつようにならないからそういう概念がない。今は男の状態だが女にだってなれるし別の姿になることもできる。年は不明。死なないからそんなの考えたこともないぜ。この世界では火、天、闇の属性を司ってるみたいだ。たしか、俺を悪魔的な呼び方でフェネクスっていうのもあったし闇もありか。とまあ俺の自己紹介はこんくらいか？」

俺は完っ全にフリーズしてしまった。あなたは俺の世界で神話や小説とかに出てくるような伝説的存在でいらっしやいますか？ 俺

今までずっと不死鳥と鳳凰と朱雀は別の存在だと考えてました。そうですね、おんなじ存在ですか。神獣クラスなら日本語喋れても普通デスヨネ。

「お前の事はもう知ってるから自己紹介はいいぞ。お前と俺は一心同体だからな」

一心同体って何ですか？ 俺何も知りませんよ？

「だからそれを説明するから早く外に行行って言ったんだよ。それじゃあ、俺が分かっていること説明するぞ。まず、俺とお前が一心同体な理由は……」

「ゴクツ！」

フェイは、続きを言いかけて、某クイズ番組の真黒司会者みたいに時間をとる。

「お前のせいだよ、バカ野郎！！」

「ええー！ー！ー！？」

まさかの俺が原因ですか！？

「お前がこっちの世界に来るときに、お前の存在に俺が巻き込まれたんだよ！ そのままお前の存在と融合しちまった。お前の片目が赤いのと右手の腕輪は俺と融合した証みたいなもんだ。お前の身体能力が上がってるのとマナを多く扱えるのも俺の力が反映されてるからだ。後、この服装や姿はお前の記憶の中にあつたものから作っている。情報の共用だな。いつもは、お前の中で演算装置的な役割をして、魔法を使うときのマナの操作を手伝って発動速度や威力を高めたり細かい作業こなしたり、思考速度を速めたりしてる。今は俺がマナで具現化してるからいつもと同じ速さでしか考えられないけどな。今の俺はあくまで分身であって本体はお前と同化してる。だから、分身の行動範囲はこの大きさだと本体を中心に半径10kmくらいしかない。人間サイズになると5km位かな。この世界にはマナキャンセルつつう能力もあるみたいだけど俺には効かないからそんな奴とやりあつた時も気にするなよ。俺が分かっているのは今の所これくらいだ。一気に言ってみたがすぐに分かるとは思って

ないし、後は時間をかけて理解してくれ」

言い終わると俺の肩に座って休み始めた。

要約すると、俺の能力が高いのはフェイのおかげで腕輪と赤い瞳はフェイと一緒にいる証明。俺の肩にいるフェイは分身であり本体は俺と融合してるためそんなに離れて行動できないということかな？

「そうそう。思ってたよりも全然頭の回転速いじゃないか。褒美としてお前の事はちゃんとダイゴと呼ぼう。後は、その腕輪はお前の意思に合わせて武器や盾にすることができから今度使ってみな。

もともとマナを物質化させた物だから飛び道具として使っても元に戻るし複数の装備も作れるから心配ないぞ。そのかわり俺と同じで範囲が限られてるから人の装備を作る時は注意しろよ。離れて戦ってたらいきなり相装備が消えたなんてことがないようにな」

「分かった。とりあえず、今やってみてもいいですか？」

「おう。お前の国の言葉だと『百聞は一見に如かず』だな！俺もサポートしてやるから思い切ってやってみな！！」

肩にいたフェイの身体が消えると、俺は立ち上がって棍棒をイメージする。俺がイメージしている棍棒は警棒のような片手で持てる短さではなく、棒に近いものである。重さはどれくらい動けるか分からないから2kg位、俺の3分の2位の長さで行くか。

身体の中からフェイに「お願いします」と念じると腕輪が金色に輝く。腕輪から発せられた光が俺の手に集まり、約50cmの金棒に変わった。

俺は、それを持って斜めに振ってみる。今の身体では力が足りず振りまわされるかと思っただが、木の棒を無造作に扱うように軽く使えた。そこから、回転運動や両手で回したり、片手で突いたりしてみたが、2kg程度では苦にならないようだ。

やっぱりフェイの力は偉大だな。これに驕らないで練習しないと！フェイにありがとうございますと念じると棍棒は消えて再びフェイが姿を見せた。

「とりあえず、腕輪についてはこんな感じだな。何かあるか？」

「いくつかあるんですけど、まずは、トビアスを治してくれたのはフェイですか？」

「そうだ。お前がそう願ったからな。これから治癒魔法を使う時は火属性の魔法にしてくれ。今回は俺が具現化して使ったからいいが、いつもおれがいるとは限らないしな。水属性は相性が悪いからそんなに強力なのは使えないぞ。後は地属性もな。一般人よりは強いだろうけど他の属性程じゃないと思っててくれ」

「そうですか。トビアスを助けてくれてありがとうございます」
俺は肩に座っているフェイに感謝の気持ちを伝える。

「気にするな。後、俺とおまえは一つなんだからそんなに畏まらなくていい。普段通りにしてくれ。じゃないとこっちも肩がこっちまう」

「わかり……わかった。次の質問だけど、俺達が元の世界に戻れる方法はある？」

「いや、これは分からない。そもそも、ダイキがなんでこの世界に来たのかが分からないからな」

「そうか。最後の質問だけど、彩花はこの世界に来ているか分かる？」

「来てるだろうな。俺の世界に麒麟っていう俺と同じ位の力を持つやつがいるんだがそいつの力を感じる。麒麟が来ているということ
は彩花も一緒にいる可能性が高い」

俺は、彩花がいることがこんなに早く分かるとは分かっているなかつたので興奮してしまいフェイを掴んで顔に近づける。

「彩花は無事なのか!? 今はどこにいるか分かるか?!」

「おい、落ち着け! 麒麟と一緒にいるんだ無事に決まってる。場所はいまいだが分かる」

「そうか! ならすぐに彩花を迎えに行かないと!!」

善は急げと立ち上がった俺にフェイの巨大化した拳骨が俺の頭に落ちる。

「……………つつつつつ!!」

「だから落ち着けて!! 今行ったところでどうなるんだ? その容姿じゃ何もできないだろ!? 心配する気持ちは1つになって俺が痛いほど分かってる! でも、新しくできた家族達を放って行くのか? どうせ時期が来れば勝手に会える! それにお前は彩花を信用してないのか!? してるだろう? なら落ち着いて冷静に考える!!」

フェイの言葉で冷静さが戻る。確かに彩花は俺よりしっかりしてるし、今の俺では彩花の所に行こうとしても何もできない可能性が高い。フェイと同じくらいの力を持った存在が彩花を守っているなら大丈夫か?

「今はどんな事態にも対応できるように力をつける。その時が来たときに何もできませんでしたじゃ話にならねえ。今日のトビアスの一件でそれが痛いほど分かっただろ?」

そうだ。もしフェイがいなかったらトビアスは助からなかった。それどころか生活出来ていたかも分からない。

「そう気を落とすな。幸い、まだ時間はあるしやることも分かっている。今回はいい結果だったんだし、やれることをやっていけばいい。とりあえず学校を卒業するまでは力をつけようぜ? それにピースフルの学校に行けばきっと情報もたくさんあるだろうし、帰る方法が見つかるかもしれないだろ?」

「まったくフェイの言うとおりだな。俺もフェイの意見に賛成だ。ただしやるからにはトップを目指す! そうすればおのずと力が付いてくるだろう。フェイ、こんな俺だが力を貸してくれるか?」

そう言っただけ俺は目の前にいるフェイに右手を出して握手を求めると、フェイの身体がまた光りだし、俺と瓜二つになった。

「当たり前だろ? 俺とダイゴは1つだ。助けないわけがない。お前が迷ったら相談に乗ってやる。幸い俺は人生経験豊富だからな」
フェイは、フツと笑いながら握手に応じてくれる。

「これから長い付き合いになると思うけどよろしくな、フェイ!」

「ああ、こちらこそよろしく、ダイキ!」

俺達は桃園の誓い宜しく異世界に誓いを結んだ。

余談

「ちなみにみんなの前ではちゃんとベルって呼んでくれよ？ 俺結構この名前も気に行ってるんだよ」

「分かった。気をつけるぜ」

「後、フェイも新しい家族になるんだからみんなに名前考えてもらおうぜ？」

「俺が考えたんだからフェイでいいだろ！？ ダイキの中で暇を持って余してる間ずっと考えて決めた名前なんだぞ！？」

「はいはい。まずは明日フェイをみんなに紹介しないとな」

「クククツ、全員ビツクリするだろうな。この世界じゃ俺は神に等しい存在だからな」

「そうか、じゃあ明日に備えて部屋に戻って寝るか。お休み、相棒」

「ああ、楽しみだぜ！ お休み、相棒」

二人は心の底から笑いあいながら孤児院の中に消えていった。

第二章 6 異世界の誓い（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

質問ですけど、4対って8枚ってことですよ？

次話は水曜前後の投稿になると思います。

第三章 1 旅立ち（前書き）

どうも！

毎回捻りのないタイトルですみません。

今話は戦闘シーンがなく、文章も少しおかしくなってしまった気がします。

お気に入り登録ありがとうございます！当初の目標だった登録20件と総合評価50が越えられてうれしいです！

それではよろしく願います。

第三章 1 旅立ち

フェイと出会ってから4ヶ月が過ぎた。

フェイと色々話した日の翌日にみんなにフェイを紹介した時はマリアさんがビックリし過ぎて気絶しそうになったのはいい思い出になっている。

フェイの性格もありすぐに仲良くなり、今ではシユレに続く兄貴分的な存在になっている。

孤児院の中で変わった事と言えば、まず魔法の時間の他に武道の時間が加わった事だ。

俺と情報を共有しているフェイが先生となり効率良く教えるようにしている。今は基礎を教えるため、マリアさん、シャロン、エリー、ケインには投げ技や関節技重視の柔術系を、アリス、シユレ、トビアス、ライオには打撃技重視に空手やムエタイを中心に教えている。誰に何を教えるかは、フェイと綿密に話し合っただけで決めている。

4カ月も教えていると動きが様になってきたので練習に本格的な組み手を導入した。

組み手をすると怪我人が必ず出るのでエリー達の治癒魔法の練習にもなっている。マリアさん以外が使える治癒魔法は擦り傷や軽い打撲や捻挫を治せる初級魔法『ヒール』だけ(マリアさんは中級で状態異常を治す『リカバー』や複数の人を同時に治す『使える』だが、今では骨のヒビや骨折と言った重傷レベルも治癒出来るようになった)。

俺は治癒魔法と相性が悪く、軽い『ヒール』しか使えないが、それとは別にフェイの炎を操って完全治癒が出来るようになっていたので余り困っていない。

俺の組み手相手はいつもフェイにしてもらっている。フェイは俺と同じかそれ以上の実力を持っていて、俺の知識から自己流の技を

使ってくる。たまに、身長を変えてもらったりして色々な状況を試せるのでとても助かっている。

魔法練習では、いつも俺の魔法補助をしてくれているフェイがマリアさんと一緒に教えるようになった。フェイの説明はマリアさんの説明よりも細かくて分かりやすく、たまにマリアさんが知らない技術や知識を言う事もあり、マリアさんがフェイに教えを乞う事もある。まさにフェイ様々って感じた。

授業面はこんな感じかな？

生活面では、フェイが俺の世界の服を着ていた時にマナで作ったって言ってたのでやってみたら、出来ちゃいました！

と言うことで、今の孤児院には俺の世界の物で溢れています。

例えば、衣服類。

今までは、マリアさんが町に行った時に、ギルドの報酬や菜園の野菜を売って出来たお金で買ってきた手触りの悪い安物の服を買って着まわしていた。

そこで、元の世界の服や下着を作って渡したらそれはもう喜ばれた。手触りが良く、色も複数あり、機能性が高かった為だ。これくらい品になるとどの国の上流階級でも持っていないんじゃないかって言われた位だ。

もし孤児院の財政が悪くなったらこれを作って売れば恩返しになるな！

てゆうか、この世界にブラジャーがなかったよって聞いてみたら服を着ていただけだったらしい。いわゆるノーブラだな。パンツも男物と女物の違いがあるのは貴族や王族だけで、特注品になるからとても高いそうだ。一般人は、別に穿かなくても気にならない程度の物だったそうだ。

まさか、漫画やアニメのパンチラや露出シーンがこんな所で役立つとは思わなかったな……

布団や毛布といった寝具も創った。

孤児院の布団は薄い布を3枚敷いての雑魚寝でちゃんとした布団で寝たかったからだ。

その寝心地の良さにみんな満足したらしく、最近はライオがその布団で昼寝する事が日課になってきているようだった。

寝る子は育つって言うし、ライオはきっと大きくなるんだろう。

食事面では、俺が食事当番のときに彩花のお母さんに教えてもらった料理を作るようになった。もちろん、ここは異世界。どうしても材料が足りないものが出てきてしまいが、そこはフェイと一緒に考えて頑張って作りましたよ！！ といっても、野菜や香辛料だけだけどね。お肉はどうしても作れなかったから近くで獲った肉で補った。別の肉でも十分喜んでくれたけど、牛肉が食べたいな……

余った野菜等は近くの村で売りに出して孤児院の資金にしてもらっている。珍しい形で美味しい野菜と甘い果物、どの料理にも合う香辛料は村でも人気が高いらしく、商人から売らせてほしいと交渉に来るくらいになっている。そこはマリアさんに任せているがそこまでお金に困っていないらしいし当分はそう言うことはないだろうな。

と、こんな感じの4か月だった。他にも色々あったんだけど、それは別の機会に話そうと思う。この4か月で分かったことは基本マナさえあれば何でも出来るってこと。こんな力を家族の前以外、特に権力者の前で使うとどうなるか分からないし人前では控えよう！

シャロンがピースフルの学校に出発する前日、俺はフェイとシャロンとラージの森でキノコ狩りをしている。マリアさんに、送別会の準備をするからシャロンが気づかないようにしてと頼まれたので

キノコの種類を見分けられない事を理由にシャロンを連れ出した。すでに数時間が経過し、十分な量が採れたので俺の袋はパンパンに膨らんでいる。

「もうそろそろ戻っていいかな？」

俺は戻っていいかの確認をフェイにする。

「うーん、もういいんじゃないか？ 採れるだけ採ったしこれ以上は無理だろ」

「そうだな。シャロンに訝しまれてもダメだし戻ろうか。シャロン、もうそろそろ戻ろうよ！」

話がまとまったので、少し離れてキノコを採っているシャロンに声をかける。

「分かりましたわ〜！」

声を聞いたシャロンはいつも通りの育ちのいい？口調で返事を返すと、置いていた袋を持ってこちらに歩いて来た。

「ベルもたくさ見つけたみたいですね」

「これもシャロンが丁寧に教えてくれたおかげだよ。ありがとう」

「そんなことないですわ。それに、ベルには日頃お世話になってますもの。逆にこっちがお礼を言いたいくらいですわ」

「そういう事しておくよ。それじゃあ戻ろうか」

そう言っただけで孤児院の方向に向かって歩き出した。

「そう言えば、シャロンって普段はそういう話し方だけ何でなの？」

「俺もそれは気になってたんだよ。シャロンって怒るとみんなと同じ感じになるのになんでなんだ？」

俺とフェイが聞くとシャロンは苦笑いを浮かべながら答えてくれた。

「これは、ピースフルに言った時の為ですわ」

俺とフェイは理解できなくて互いを見て首を傾げる。

シャロンはそれを気にせず続ける。

「ベルは私たちが何でピースフルの学校に入れるかは知ってますよ」

ね？」

「確か母さんの知り合いがピースフルの先生をやってるからじゃなかったっけ。でも入れるって言うっても入学試験を受けられるだけでしょ？」

「それでも何か悪い事をしなければ合格が決まっている状態です。そして、その知り合いはお母様の師匠に当たる方です。これがどういう事か分かりますかね？」

「なるほどな。マリアの師匠がマリアを信頼して内定をあげてるのに、もし落ちたりしたらマリアの評価が一気に下がる可能性が高いな。それだけじゃない。マリア孤児院の名前も傷ついちゃうな」

「その通りです。そして、それは学校に入ってから生活でも続きます。その為の言葉使いですわ」

「凄いな……俺が5才の時にそんな事考えていなかったよ。テレビでヒーロータイム見て「変身！」とか言っただけでたもんなんだ。それに比べ、シャロンは考え方が大人だな。それだけ苦労してるってことなんだろうけどさ……」

「俺、シャロンが姉さんで良かったよ。そこまで考えられるシャロンを心の底から尊敬する」

「俺もだ。シャロンは自分のことをもって誇っていいぜ！ それだけのことをしてるんだからな！」

「ありがとう。でも、フェイはともかくベルは1歳なんですから私より凄いなと思いますよ？」

「本当はシャロンよりずっと年上なんだから自慢にならないって」
俺達は、その後他愛もない話をしながら草と木に囲まれた道を歩いて行った。

孤児院に戻った俺達を待っていたのは豪華な食事とみんなの騒がしい歓迎の声だった。

集会広場に連れていかれた俺達が見たのは、「シャロン頑張ってきてね会」と氷で書かれているオブジェクトだった。その隣には、「フェイの家族になったお祝いの会」と「ベルが家族になって半年になったお祝いの会」と書かれたものが置いてある。

シャロンの送別会をすると聞いていた俺とフェイは自分たちのものがあるのに驚愕して固まってしまった。

その反応にみんなは満足だったらしく軽い足取りで自分の席に座って行く。テーブルには俺が教えた豪華な料理が乗っている。

俺達も、マリアさんに誘導されて配置されたシャロンの隣の席に座る。

「それじゃあ、これからシャロンの送別会とベルの孤児院に来て半年記念とフェイの歓迎会を始めるわよ」

マリアさんが開会のあいさつをしながら木製のコップを持ち、みんなもそれに続く。

「ベルとフェイに出会わせてくれた神と精霊に感謝を、シャロンのこれからに神と精霊の祝福があらん事を祈って……」

全員が右手を胸に当てて目を瞑る。

「……………それじゃあ準備は出来てる？ 行くわよ、がんばーい！」

「……………カンパーイー！！……………」
元気良く叫びながら持っているコップをぶつけて勢いよく飲み物を飲む。

そこからは、雑談や食事といつもと変わらない雰囲気になった。

お腹が膨れたころ、みんなが雑談している隙に俺はフェイに声をかけて部屋の外にでた。

「こんなところに連れ出してどうした？」

まだ手に料理をもっているフェイが訪ねてくる。

「気づいてるか？ 俺達だけシャロンに何もしてあげてないぞ！」

「ハッ！ そうだ、なにもしてやってねえ！ どうする！？ 何かいい案はあるのか？！」

「落ち着け。確認だけど、フェイは俺の記憶を共有してるよな？」

「ああ。ダイキも俺の記憶を共有してるけど情報量が多すぎて意図的に止めてるけどな」

「ならこんなことしようと思ってるんだけど。ゴニョゴニョ……」

「ああ、大丈夫だ！ でも、アレが足りないんじゃないか？」

「それは、マナで作って俺がやるからまかせておけ！」

「よし、じゃあ早速やるか！」
バンツ

俺達が勢いよくドアを開けるとみんなの視線が集まる。

「これから、俺たちがシャロンに歌を送ります！」

俺はマナを集めて邪魔にならないところに白い鍵盤と四角い赤紫色のアップライト・ピアノと椅子を創りだした。

「ポーン、ポーン」

椅子に座って鍵盤を押して音がずれてないことを確認し、フェイにアイコンタクトをする。

みんなが、好奇の目でそれを見守る。

「それでは、俺の世界の曲を歌わせてもらいます！ 曲名は『旅立ちの日』」

ピアノから泣かせにかかる伴奏が流れて俺がテノール、バスを、フェイにソプラノのパートを歌ってもらった。あまり上手いとは言えなかったが、シャロンが涙を流しながら聞いてくれたのでそれに気づいたフェイと一緒に喜んだ。

俺達の歌で場が少ししんみりしてしまっただが、すぐに騒がしくなり、残っていた料理を腹に入れていった。食べ終わった食器を片付けて一息するとシャロンの決意表明になった。

「私は明日ピースフルに出発します。といっても半年したら中間休みで帰ってくるつもりですけどね。まだ合格が決まったわけではあ

りませんが、向こうに行ってもクラインの名に恥じない生活を送ることを誓います。わたしがいなくなってもアリスお姉さまがいるから大丈夫だと思う。「まかせて!」けど、シュレとケインもみんなをしつかりまとめるのよ。「おう!」「はい!」トビアスとライオもみんなの言う事をちゃんと聞くこと。「まかせて!」「わかった!」エリーは、アリスお姉さま達を助けてあげて。エリーは優しいからきつとできるはずよ。頑張つて。「うん……グスっ、分かった」ベルとフェイは、何も言わなくてもいいわね。お母様達をよろしくね。「わかった」「まかせときな!」最後にお母様、私を捨ててくれてありがとうございました。お母様のおかげで大切な新しい家族が出来ましたし、こうやって学校に行くチャンスができました。私はこの感謝の気持ちを一生涯忘れません…… 本当にありがとうございました」

言い終わると、目から涙を流しながらマリアさんに抱きつくシャロン。マリアさんもシャロンの言葉に感激したらしく話の途中ですでに泣いていた。そこに、エリーやライオが抱きつき遅れてトビアスとケイン、シュレ、アリスが加わる。みんなももらい泣きしたみたいだ。

すると、隣にいたフェイが目赤くしながら小さくつぶやいた。「こういうのも悪くないな……」

フェイも今までは神獣として生きてきたためこういった経験がない。初めて家族と初めての気持ちに身をゆだねているみたいだ。

俺もその光景に前の世界の家族達の事を思い出して涙ぐんでしまったが、それを隠すようにフェイに声をかけた。

「ほら、こんなところにいないで一緒に行くこうぜ!」

「おう! そうだな!!」

俺達は、マリアとシャロンを中心に出来た泣き笑いした輪の中に入って行った。

第三章 1 旅立ち（後書き）

読者の方は卒業式に何を歌いましたか？

筆者は旅立ちの日にと大地讃頌を歌いました！

次話は土曜前後を考えています

第三章 2 暗躍（前書き）

どうも！

ちよっと土曜日が忙しくなりそうになったため今日投稿させてもらいました。

今話はちよっと短めになってます。

7月8日に前話のサブタイトルを変更しました。内容はかわっていません。

もしかしたら、時間がある時に前の話をいじるかもしれませんが。その際には前書きか小説情報で報告させていただきます。

お気に入り登録ありがとうございます！

文章評価、ストーリー評価ありがとうございます！

これからも頑張っていこうと思いますんでよろしくおねがいします

第三章 2 暗躍

次の日の早朝、俺を含む子どもたちはシャロンとマリアさんを見送る為に孤児院の前に集まっていた。

ピースフルまではマリアさんの『飛行』で行くそうだ。理由は、孤児院がラージの森の奥にあり、森を出るにも10km近く離れているため徒歩だと森を抜けるまでに2日はかかってしまうからだ。

そのシャロンは、俺が記憶から創ったフリフリのついた白いワンピースを着て、赤いバレーシューズのような形をした靴を履いている。右手の薬指には入学祝（まだ合格したわけじゃないが）としてエメラルドグリーンの宝石のついた指輪をしている。指輪は、ピースフルに行っても危なくないように集中力上昇、思考速度上昇といった補助効果がついている。シャロンに上げると子供達（特にアリスとトビアス）がほしがったが、みんなにはまだ創っていない。補助装備に頼るともし相日がない時に対応が遅くなってしまいうし能力の底上げの伸びが悪くなるからな。まだ、小さいんだしアイテムに頼らずに実力をつけてほしいという俺とフェイの考えだ。シャロンは当分会えなくなるから特例って事だな。ちゃんと、ピースフルに行つてからのトレーニング方法を書いたプリントを渡してあるけど、どんな場所かは分からないし用心の意味も込めてつてところだ。

今は、俺とフェイが遠出に便利だからと言って創った大型のバックを開けて出発前最後の確認をしている。中には、着替えなどの生活用品や紙を紐で束ねたノートと筆記用具といった勉強道具が入っている。着替えは、下着も含め俺達で片っぱしから創った洋服から選んだ数着と運動の際に動きやすいようにジャージやショートパンツと言ったものを持っていくようだ。洋服は、向こうに制服もあるみたいだし量は必要ないし、運動着も洗濯すれば何回も着れるから少ししか準備していない。ちなみに、試作で作った中にブルマとスパッツもあつただけ、動きやすいと女性陣に評判で武道の練

習の際にはいつも身につけている。

いや、ストフリですか？

この世界では下着をあまり気にしないみたいだし本人達が喜んで
いるからいいけど、マリアさん（26歳の顔が綺麗なボン！ キュ
！ ボン！）がブルマってどういう状況 シチュエーション です
か？

これが彩花にばれたらいったいどうなるんだろうか……

「普通は、振られるんじゃない？」

フェイはちよつと黙ってようかつ！

話が戻るが、勉強道具はさつき俺達が渡した物だ。この世界で、
紙と鉛筆は高級品で、貴族などの上流階級や学校など教科書や書籍
にしか使っていないらしい。一般の人も買えるが、紙やペンを買う
くらいなら生活用品を買うといった感じらしい。俺とフェイは、昨
日の夜にその事を聞き、森の木を使って半年分の紙と鉛筆、鉛筆削
り、消しゴムを準備した。消しゴムはこの世界にはまだ無いらしい
が、あったほうが楽なので使い方を説明してそのまま持たせてある。
もしかしたら盗もうとする人がいるかもしれないが、学校で派手な
荒事は出来ないはずだしシャロンの実力もだいぶ上がっているので
大丈夫だろう。一応予備の物も用意して渡してある。その事をシャ
ロンに伝えると俺と妖精型になっていたフェイは優しく抱き締めら
れた。

ただ渡すだけだと、シャロンがいろいろ気にしてしまうので帰っ
て来るときに書いたノートともしあれば参考書を持って帰って来て
欲しいと伝えると、「絶対に持って帰ってきますわ！」と言われた。
無理しなくていいんだからな？

出来ればいいんだからな？

シャロンのことだし言っても無駄だとわかってるから言わなかつ
たけど……

抱擁から解放されると激励の言葉を伝えてシャロンから離れた。

俺達の後ろにはシャロンと話をしたくてウズウズしていたみんなが

いたからな。俺とフェイは、出発するまでの残りの時間を他の人たちに譲り、その光景を遠目から眺めることにした。

少しすると、2人共準備が出来たようで、荷物を持って俺達から少し離れた。

「それじゃあ行って来るわね。向こうで手続きや挨拶があるから、2週間はかかると思うわ。アリスを中心に危険な事はしないようにね？みんないい子にしてるのよ？」

「……………はい！！」「……………」

マリアさんの言葉に全員で返事をする。マリアさんに続いてシャロンも出発のあいさつをした。

「みんな元気でね！ 行ってきますー！」

「それじゃあ行ってくるわね」

「……………行ってらっしゃい」「……………」

見送りの挨拶をするとマリアさんとシャロンは風を纏って宙に浮かびだし、一定の高さに到達すると、一度こっちに手を振って飛んで行ってしまった。

俺達は、2人の姿が見えなくなるまでずっと手を降り続けた。

見送りが終わった後、アリスの指示で孤児院に入り、これからの事についての話し合いが始まった。

「まず、まとめ役を決めようと思うんだけどいい？」

アリスが最初の議題を出した。

「それはアリスでいいんじゃないの？ 母さんもアリスを中心にして言っただしこの中で一番年上はアリスだよ？」

俺は、今更何言ってるんだと思いつつ意見した。

「アリスじゃないとして誰がまとめるんだ？」

シュレが、俺の意見を無視してアリスに尋ねる。

「それは、ベルとフェイにやってもらおうと思ってるよ。それならみんなも文句ないでしょ？」

アリスがドヤ顔で俺達の名前を出してみんなに問いかける。

「いやいやちよつと待て！ そんなでみんなが納得するわけないだろ！？ エリーとかライオとかケインならともかく、シュレとトビアスは反対するんじゃないか？」

しかし、シュレはアリスの言葉を予想していたのかやっぱりなと
いった顔で頷いた。

「だろうな。俺はいいぜ」

「俺も兄貴がいいならそれでいい」

トビアスも普通に肯定する。

普通にオツケーしちゃったよ！ 何でだよ。俺年齢的にはこの中で一番年下だぞ？ こんな幼児にまとめられたくないだろ？

俺はみんなに何で俺なのか聞き返すと、「この中で一番しつかりしてるし」やら、「頼りになるし」と言った意見が出た。

「この中で一番魔法が上手いし、武術も教えてくれてるし頭もいいし反対する人なんていないよ。それに、今まで色々教えてくれてるのにいまさらじゃん？」

アリスが理由を述べるとみんなが一斉にうなづく。

「まあ、いいじゃねえか。精神の年齢は俺達のほうが全然年上だしみんなが納得してるんだからよ」

フェイまでそんなことを言う。みんながいいならいいだけださ。

「はあ、分かったよ。それじゃあ母さんが戻ってくるまでは俺とフェイがまとめ役をやるよ？ みんなそれでいい？」

「………いいよ」

「まかされたぜ！ みんなマリアが帰ってくるまでよろしくな！」

フェイは、自分が責任者になって気合が入ったようだ。俺も何事も無いようにしつかりしないとな。

「よし！ まずは係分担から決めようか」

俺は気を引き締めるとこれからの生活に関するルールを決めに入

った。

- - フロン村 side 1 - -

ラージの森を抜けて半日ほど歩いたところにクライン孤児院がお世話になっているヒト族が暮らす村がある。人口は600人を超え村と呼ぶには人が多い気もするが、村の周りは村民が開拓した畑で囲まれており、畑から収穫されたもので生計を立てているためあえて村と呼ぶことにする。村は活気にあふれていて、王都や戦争が終わったから姿を現し始めた他種族の商人、特に獣人族の商人が他人数で訪れるため、商業が非常に盛んなのがこのフロン村の特徴である。また、フロン村は他種族に対しても気兼ねなく過ごせる珍しい村であるという特徴もある。戦争が終わって数年がたったが戦争の遺恨が残っており、多くの村や街では他種族に対して軋轢がある。そのため、他種族の地域に進んでいこうとする者が少なく交流があまり進んでいない。

そんな中フロン村がこんなに外向的なのには理由がある。フロン村は獣人国との国境が近く、戦争の際には兵士が駐留して様々な問題が上がっていた。そんなときに獣人が襲撃してきて兵士を倒され村民は死を覚悟したが、獣人の兵は物を奪わず、村民も一人も殺さずに家屋などの壊れた場所を修復していった。最後に獣人の代表者らしきうら若い女性が「我々はあくまで平和を望んでいる。今は戦時中で難しいかもしれないが、将来戦争が終わったら我々と交流してほしい」と言って獣人は村を去って行った。その代表者は獣人の国の第2王女であり、停戦協定の際の獣人代表を務めたであったエンジニア・ハルトであったと知るのには戦争が終わって半年経った後

だった。その後も、偶にお忍びで村に訪問に来ていたエンジェと触れ合った事と、戦時中の事もあり他種族に対してあまり悪い印象をもっていないことが理由であった。

商人が多く訪れるのには別の理由もあり、この村では非常に美味で珍しい食材が回っているという噂を聞きつけて、それを一目見ようと、あわよくば商品として扱おうとする人がいるからである。

その噂を聞きつけてガラの悪い20人前後の集団がフロン村に来ていた。集団は全員ヒト族の男性で30代から40代の集まりだ。着古して様々な箇所穴があいた茶色い服を着ていて顔には無精ひげが生えている。その中でも、一回り大きい体格の大きい首領らしき男性が他の部下らしき人にその珍しい商品に関しての情報を集めるように指示を出していた。彼らは、近隣を拠点にしている有名な山賊であり、商品の出所をつかみ独占しようと考えていた。

「おい！ 情報はまだ手に入れられねえのか！？」

村に入って3日が過ぎており、いまだに詳しい情報が手に入られていないことに苛立ちを覚えていた。

「すいやせん！ 商品売っている奴までは分ったんですが、どこから来ているか知っているにがいなくて……」

部下の1人がすまなそうにしながら現状報告をする。

「能書きはいい！ その売っている奴は誰だ！？」

「へえ、マリア・クラインって女らしいです」

「何！？ マリア・クラインってあのマリア・クラインか！？」

「どのマリア・クラインかは分かりやせんが、20代前後のヒト族の女らしいです」

「そうか…… 分かった。そのまま他の情報を探ってくれ」

「了解しやした！」

部下Aは返事をする、人混みの中に消えて行った。

（まさか、魔法剣士のマリアがこんな所にいるとは…… どうするか、ここは止めておいた方がいいか？）

首領は、商品の出所が自分の知っているマリアだと確信すると、

これからどうするか思案に入った。

マリアはヒト族では稀な魔人と同等の魔法を扱える使い手だった。その魔法を状況に合わせて使いこなし、戦時中は国に貢献し、終戦後は、冒険者としてギルドに所属し活躍した。しかし、数年前に突然姿を消し、それ以降はたまに見たと言う噂を聞く位だった。

今の部下は、一般人に毛が生えたような実力で返り討ちに合うのは必至。仮に商品がマリアと関係なかった場合はやられ損。はっきり言って全く割りが合わないのだ。

(この件から手を引く事も考えておかないとな)

首領は、新しい情報が入ってくるまで頭を悩ませるのだった。

その数日後、マリアが孤児院を開いていて近くの森の深部に存在すること、現在マリアは所用のため孤児院を離れており1週間は帰ってこないこと、その孤児院で商品を栽培しているという情報を部下が手に入れてきた。首領は、情報を聞いて孤児院に向かう事を決めすぐに装備を整えさせるとラージの森へと向かった。

村を出発した日は、マリアがシャロンとピースフルに向かって2日を経過した頃だった。

第三章 2 暗躍（後書き）

次の投稿は月曜前後を予定しています。
読んでいただきありがとうございます！

第三章 3 遭遇（前書き）

どうも！

投稿が遅れると思ったらず早く書きあがったので投稿しました。

お気に入り登録ありがとうございます！

評価してくださった方ありがとうございます！

これかも当分続きますができるだけペースを維持して頑張りますのでこれからも宜しくお願いします！

第三章 3 遭遇

子供だけの生活になって早7日、俺はフェイとまとめ役に就任してみんなと平凡な過ごしていた。まとめ役と言ってもやる事は今までとさほど変化はなく、変わったことと言っても、食事の挨拶や戸締まり確認といったマリアさんがやっていた細かい確認を俺達が行うことになっただけだった。

この生活が始まって最初に各自の担当を決めたが、特に気をつけていたのは俺とフェイのが一緒の班にならないようにすることだった。大まかに家事班と調達班に分けることになったが、最初に決めたのは俺達が各班に分かれて行動を共にする事だった。これは、危険な事態 アクシデント が起こった際に対応出来るように考えた事で、マリアさんの留守中にケガをさせる訳にはいかなかったからだ。

食事班は、エリーとライオ。

狩猟A班は、シュレとトビアス、狩猟B班は、アリスとケイン。

家事班は、料理の他に洗濯や掃除といった家事を担当してもらって、狩猟班は片方が狩りや採取に行っている間は孤児院に残り、エリー達が忙しければ手伝い、その他の場合は武術の練習にあてる事にした。

留守番中の孤児院の1日は晴れの日が午前が全員で魔法の練習、午後は各班に分かれて作業を行い俺がフェイの残ったほうが約束の時間になると出て行ったほうに念話で連絡してどんな収穫であろうと戻ることになっていた。

雨の日は、武術の練習と俺の世界の座学をこの世界に通用しそうな範囲で教えることにしていた。

とまあ、そんな生活を送っていたんだが、今はシュレとトビアス

と一緒に狩りをしにラージの森に来ている。と言ってもブルウォルフの時の教訓があるから結界の外には出ない範囲にとどまるようにしてるけど。いつかの勝負でシュレが使っていたらしい魔法を使わない探知術を教えると頼んだら一緒に行くことになった。本当はフエイが担当の日だったんだが話をすると笑顔で交換してくれた。これは、お礼に相棒の好きな食べ物を買ってあげないとな。

話がそれってしまったが、今はシュレがその技術を実演してくれているが、ぶっちゃけ言って全く分からない。さっきも300m離れた木にいるフォンレイというリスのような生き物を見つけていた。いるかいないかならともかく、シュレはどんな種類かも当てるんだよ。俺も魔法を使えばすぐに分かるが、どうしてもマナの気配でこちらの居場所がばれてしまう可能性がある以上この技術は覚えておきたかったんだが……

「なあ、コツとかないのか？」

あまりにも分からないので、前を歩いて集中しているシュレに話しかける。

「そう簡単に出来てもらっちゃ困るぜ。物音というか、気配というか。ともかく、数をこなせばベルでも分かると思うぜ」

「やっぱり経験か」

確かにシュレは俺が来るずっと前から狩りをしてるんだし、最低でも1年以上の経験差があるもんな。これからも、狩りの時は参加するようにしようかな？

「さすが兄貴です！ ベルも出来ないことができるなんて！」

トビアスは何を言ってるんだか…… お前たちより精神が大人な

だけで、俺の能力が高いのもフエイのおかげなだけなのに。

「俺にだって出来ないこと具合あるさ。それにトビアスができて俺ができないことだってあるんじゃないか？」

「そうだが、俺に出来ないことをお前ができることもある」

「そんな、兄貴の出来ないことが俺に出来るはずがないです！」

トビアスは俺達の言う事を信じず聞く耳を持たない。自信がない

のか？

「とりあえずゆっくり考えてみるよ。まだトビアスには難しいだろうがな」

シユレが声をかけるとトビアスは考え込んでしまった。シユレを慕うのはいいんだけど、それで自分の可能性を決めつけちゃな。まだ、トビアスには分からないだろうけど、出来るだけ早く気がついてほしいな。

そのまま、気配探知のレクチャーを受けているとシユレが急に歩みを止めた。どうしたのかと尋ねると、動物とは違う気配がするという。俺はオリジナル魔法『探知』を発動し周囲を探ってみると、たしかに動物とは違う中型の生物の反応があった。

その反応に近づいてみると、見るからに怪しい雰囲気を出している人族の男が5人いる。なんか、漫画とかに出てくる盗賊みたいな格好してるな…… 嫌な予感しかないんだけど。

「なんでこんな森の奥に人がいるんだ？」

シユレが、男たち（変な格好をしているので、これから変態A～Eと呼ぶ）を見ながら疑問を投げかけてくる。

「分からない。すぐに接触するのも危険だしこの場所で様子を見ようか」

俺は念の為2人に身体強化をするように指示をだして、自身にも身体強化と聴力強化を使い彼らの会話を盗聴することにした。

「本当にこんな森の奥にあるのか？ もう3日は探索してるぜ？」

「そうボヤくな…… しょうがないだろ。今までと同じさ。ブツを見つければ当分楽になる。なんたって、今回は上手くいけば新しい拠点が食料付きで手に入るんだからな」

「そうそう。珍しい物らしいし売れば金になるって話しだぜ。食ってよし、売ってよしなら言うことないじゃねえか」

「頭達は別の場所を探してるし、俺達は任された仕事をこなせばい

「いだけさ」

「さつさと見つけちまおうぜ」 怪しい人達（変人A〜E）が俺に聞かれていたとも知らないで色々な情報を話している。

話をまとめると、やつらは森にあるっていう珍しい食べ物を探しに来たって事か。やつらは下っ端で、他に本隊がいると。それにしても、この森って何日も探す価値のあるような珍しい食べ物なんかあるのか？

「なあ、この森って他の場所で高く売れるような珍しい食べ物なんかあるか？」

シュレとトビアスは首を横に振って否定する。

「いや、そんなもんは聞いた事ないな。あえて言うなら母さんやベルが栽培してる野菜とかが珍しいんじゃないか？ 母さんのはいろんな場所から採って来たものだし、お前のはこの世界のものじゃないし。なあトビアスはどう思う？」

「俺も兄貴と同じだよ。母さんに聞いてみないと分からないけど多分そついうのではないと思う」

「ということは、一番高い可能性はあいつらの目的は孤児院って事か！？」

あいつらから聞き出す必要がありそうだ。

「何でいきなりそんな事聞いてきたんだ？」

シュレが理由を聞いてくる。

「あいつらが話してたから確認したんだ。多分だけどあいつらの目標は、孤児院の食料だ。」

「それは本当か！？」

「まだ可能性だけだな。これから、それが本当か聞き出す為にあいつらを無力化したいから弓と魔法で援護してくれ」

「相手は5人だぞ？ 大丈夫なのか？」

トビアスが心配な顔で聞いてくる。

「大丈夫だろ。あいつらはそんなに実力無さそうだし、今は油断してる。多分シュレ達でも勝てると思うけど万が一があるかもしれないな

いから援護を頼む」

その後、シュレに俺が居なくなつてから1分後に先頭の男に弓矢で攻撃するように言つと、俺はこの4ヶ月で覚えた魔法の一部である、火属性魔法の『ブースト』と、闇属性魔法の『同化』を発動させる。

『ブースト』は、身体強化、思考速度強化、視力強化、聴力強化を同時に行える魔法で、火属性魔法初級『フォース』の発展型だ。この魔法はフェイが俺と一緒になくても、一緒の時と変わらない力を出せるようにと考えたもの。

『同化』は文字通り、景色と同化し相手に視認されにくくする魔法で、カメレオンの能力を参考に考えたものだ。この魔法は、闇属性初級魔法『暗黙』の効果もあり、気配を完全に消す事ができる優れものだ。

魔法が無事発動された事を確認すると、物音で気付かれないように少し離れた所から後ろに回り、シュレの攻撃を合図に動き始める。シュレの矢は先頭にいた変態Dの右足に刺さり、全員の意識が矢の放たれた方向に向くと近くの木を蹴つて男たちの高さまで飛び、最後尾にいた変態Aの頸椎を手刀でたたき、意識を刈り取る。その男を踏み台にして前にいた変態Bと変態Cの後頭部に連続で回し蹴りを入れる。そこで、変態Eが後ろで打撃音と誰かが倒れたような音に気づいて振り向いた。俺は、そのまま変態Eの鼻っ面に回転を利用して裏拳を入れた。変態Bと変態Eの意識がまだ残っていたためそこから2人同時にチョークスリーパーをかける。2人は爪を立てて俺の腕を引きはがそうとするが、今の俺は大の男の筋力を遥かに上まつた力で絞めているため爪が食い込むのは痛いそのまま気絶するまで続けた。そんな状態で数十秒ほどいると、2人の腕がダランと力をなくした所で首を離すと地面に横になった。変態Aは矢が刺さつた足を抑えて喚きながら転がっているが、情報を聞きだす必要があるためそのままにしておく。殺していないか確認するため倒れている4人の脈を測つたが元気に拍動をしていたので大丈夫だ

るう。骨が折れた感触もないし手加減もしたからな。良かった良かった。シュレ達にもう大丈夫という事を伝えた俺は、変態達が暴れたりしないようにマナで縄を創りだして手と足を縛る。

「うう、痛え……いきなり何しやがる！俺達が何かしたって言うのか！？」

足から血を流したままの変態Aが殺気のコもった眼でこちらを見ている。

「こつちの質問に答えてくれたらその傷を治して解放してやる。お前らは何者だ？お前らの目的はなんだ？」

「へっ、誰が言うかよ！」

「そうか」

俺は、自分の状況を理解していない変態Aの態度にイラツと来て傷口を思いつき踏みつける。

「ぎゃあああああ！やめる！やめてくれっ！！」

「質問に答えろ」

無機質な声で痛がる変態Aに告げると首を勢いよく縦に振ったので足を離す。

こつちは家族の命と安全がかかっているんだ。なりふり構っている余裕はない。

「俺達は近隣で活動してるグラハ山賊団だ。俺達はお頭が村で珍しい食料を売っているって言う噂と、それがこの森のマリア・クラインの住処にあるっていう情報を手に入れてそれを手に入れようとしていただけ。偶然、マリア・クラインは遠出して当分戻ってこないって言う情報も手に入れてたからやるなら今って事でその住処を探していたんだ！」

予想通り悪党か。しかも狙いは孤児院と来てる。最悪だな……

「そのお頭と仲間はどこにいる」

「別の仲間と一緒に住処を探してるはずだ！」

「数は？」

「お頭を入れて15人だ！もういいだろ！？早く傷を治してく

れ！」

「最後に、もしその住処に人が住んでたらどうするつもりだったんだ？」

「そりゃあお頭次第だが、男なら人買い専門の商人に売りつけるか殺して、女なら俺達の慰め物になってたんじゃないか？ 最近みんなご無沙汰だったしな」

内容を聞いた瞬間、後ろのシユレとトビアスから殺気立つ。俺はそれを手で窘めながら変態Aを睨みつけた。

「悪いが、俺達がクライン孤児院の住人だ。そんなことを聞いた以上お前らには動物の餌になってもらう。幸いこの森には、ブルウォルフやレッドベアーがいるからお前の血のにおいに釣られてやってくるだろうよ」

「！？ おい、待て！ 話が違うぞ！ 知ってることを全部話したんだから約束を守れ！」

「悪党相手に守る約束なんかかないな」

変態Aに一言言つとシユレ達を連れて『飛行』を使い急いで孤児院を目指す。

考えてたよりも状況が悪いな……

まずはフェイに状況を伝えないとな。

<おい、フェイ聞こえてるか？ 大事な話がある。聞いてくれ>

<今はそれどころじゃねえ！ 知らない連中がいきなり襲ってきやがって相手してる最中なんだ！ 数が多すぎて手が回らねえ……

早く帰ってきてくれ！>

<つつつ！！ 分かった！ 今そっちに向かっている最中だ！ もう少し耐えてくれ>

<頼むぜ！ もう部屋の中に押し入れられてるんだ。出来るだけ早くしてくれ>

そう言い残してフェイの念話が切れた。

クソ！ 早く戻らないと！ 今の俺から離れてるからフェイは魔

法が使えないし、ケインとアリスもエリーとライオを守りながらだから苦戦してるはずだ。

俺が苦虫をつぶしたような表情にシユレ達が不安の声を上げた。俺はそれに対応する余裕もなく無言で孤児院を目指した。

第三章 3 遭遇（後書き）

今日、UverWorldの全国ツアーファイナルに行ってきました。
た。

筆者は、UverWorld大好きです!!

第三章 4 暴走（前書き）

どうも！

今回はペンの進みが悪く今日の投稿になってしまいました。

今話も前話の続きで次話でこの章が終わる予定になってます。

文章力が足りず、読者の皆さんが分かりにくいかもしれせん。

こんな筆者ですが許してください……

お気に入り登録ありがとうございます！

ストーリー評価、文章評価ありがとうございます！

おかげさまで総合評価がもう少して1000を越えそうです！

これを励みにこれからも頑張っていきますのでどうぞ宜しくお願いします。

第三章 4 暴走

フェイ side

ベル達が山賊から仲間の居場所を聞き出している頃、フェイは家事が終わったエリー達と一緒に集会広場で一休みしていた。

テーブルの上には、水が入ったコップと野菜が入ったパンが乗っ
ていて雑談をしながら和んでいる。

「ねえ、フェイって他の世界の神様なんだよね？ 神様ってどんな
ことするの？」

パンを片手に持ったアリスが俺に質問する。

「神に近い存在であっただけで実際に神様では無かつたけどな。俺
は命を司る存在として世界に定着していたから、その世界の生物の
一生が終われば、その命の情報をすべてリセットして転生させたり
してたよ」

「そうなんだ。それじゃあ、私たちの本当の父さんと母さんを生き
返らせる事ってできる？」

「悪いが……、それは出来ない。まず、魂があつたとしてもその依
り代がないんじゃないし、時間も経ち過ぎてる。……期
待にこたえられなくて悪いな」

「ううん。ダメもとで聞いてみただけだから大丈夫だよ。それに、
私たちにはマリアお母さんがいるし、フェイには、トビアスの命も
救ってもらったからね」

「そう言ってもらえると嬉しいよ」

俺は、社交辞令だと思いつつも感謝の言葉を口にする。

「ねえ、フェイはこの世界にも神様はいると思っ？」

「どうだろうな…… 神様かは分かんねえが、俺とは違う何かなら
感じるぜ？」

「それってどこにいるの？」

「説明はできねえけど、世界全体にその何かがある気がするんだよ……もしかしたら、神様なのかもな」

「そっかぁ……教えてくれてありがとうね」

「いいって。これぐらいお安いご用さ。また何かあったら聞いてくれな」

アリスは「うん！」と返事をする。と飲み物のお代わりをとり調理場に向かった。

「やっぱり、フェイって神様なんだね……」

「うん、フェイ君って神様なんだね……」

「かみさま？」

ケインとアリスが顔を見合せながらつぶやき、意味がよく分かっていないライオは首をかしげている。

「俺は神に近い存在であって神本人ではねえよ。俺にだって出来ないことがあるしな」

「そっなの？」

ケインは納得できていないようだ。

「そうなんだよ。この話はこれで終しまいだ。それよか、少し外が騒がしいな……」

院の外から聞こえるドタバタした物音に不思議に思うフェイ。俺の声にエリー達もようやく気がついたのか外に耳を傾ける。

「ちよつと確認^みしてくるから動かないで待っててくれ」

俺は、3人にここにいるように伝えて入り口に向かう。

外からは未だに物音が絶えない。

「いったいなんだってんだ？ マリアが客連れて帰ってきたのか？ 考え事をしながら玄関まで行くと、外から複数の銀刃が扉から突き抜きでていた。」

剣が外に引き抜かれると、扉が蹴破られ複数の男たちが院内に入ってきた。

入ってきた男たちは、1人を除いて腰に抜身 ぬきみ の両刃刀

をさしている。除いた1人は最後に院内に入ってきた男で、周りの男達よりも2回りほど大きく、背中には斧を背負っている。

「頭あ、こんなところにガキがいますぜ？ どうしやすか？」

入ってきた男の一人が、一番最後に入ってきた男に尋ねる。

「あん？ いつもと同じで縛っておけ。しかし、こんな森の奥に立派な建物が建つてるとは思わなかったぜ。噂も馬鹿にするもんじゃないな」

「おい、おめえらいつたい何者 なにもん だ？ いきなり玄関壊して入ってくるとは礼儀がなってねえんじゃねえか？」

「この糞ガキ！？ 誰に向かって口きいてやがる！」

リーダーっぽい男に言つたつもりだったんだが、部下のほうが反応してきやがった。

「お前みたいなたつ端には話してねえよ。そのリーダーっぽい奴に聞いてんだ」

「リーダー？ 知らねえ言葉を使うガキだな。俺達はグラハ山賊団で俺が頭 かしら をしてるグラハだ。それにしてもボウズ、上等な服装てんじゃねえか。食料だけだと思つたら結構な掘り出し物も眠つてそつだ。さすがマリア・クラインの住処だな」

たまに、近くの村に売りに出してたからその噂を聞いて狙つてきたつてところか。よりもよつてマリアとダイキがいない時に来るなんて運が悪いな……

「悪いがお帰り願おうか。もうすぐマリアも帰つてくることになつてんだ。あんたらもマリアのことは知ってるみたいだし怪我はしたくないだろ？」

「ガハハ！ クラインが当分帰つてこないことはもう知つてんだ。そんなこけおどしは通じないぜボウズ」

「俺がお前よりも強いつていう可能性もあるぜ？」

俺は身体を半身にして構えながら言葉を口にする。見た感じ数は15人か。もしかしたら他に仲間がいるかもしれねえけど今は居ない奴の事を考えてもしょうがねえ。

「ほー、言っじゃねえか。そんな線の細い身体で俺たちに勝つって？」

グラハは挑発だと受け止め髭に埋まった口元を吊り上げる。魔法が使えれば一掃できるんだが、ダイキが近くに居ねえからしよつがねえ。武器が面倒くせえが近づいてぶち込むしかねえか。

山賊達に仕掛けるタイミングを探る。向こうも多くの場数をくぐつて来ているようで、不用意には仕掛けてこない。

そのまま数秒間睨み合いをしていると中から様子を見にアリスが出てきてしまった。

「フェイ、さっきの音何だったの？ エリー達には動くなつて言うし……つてあんた達誰なのっ！？」

「ばっ！？ 出て来るなつて！」

俺は、部屋から出て来たアリスに意識をズラしてしまった。

「今だ！ やれ！！」

そして、その隙を見逃す奴らではなかった。

グラハの指示で目の前にいた3人が腰に差した剣を抜いて襲いかかって来る。

「部屋のドア開かないようにして入れられないようにしてる！！」

そのうちの1人が俺に向かって剣を振り下ろして来たので、剣を避けながら踏み込み、鳩尾を右手で突き上げた。

その間に他の手下2人がアリスの元に殺到する。

「クソっ！ アリスとケインでライオとエリーを守れ！ 組み手の時と同じようにやれば大丈夫だ！ すぐに行くから何とか耐えてくれっ！」

アリスは頷きながら急いで部屋に戻ってドアを閉める。

中では俺の声を聞いていたケイン達が家具を移動して入り口を塞いでいるみたいだが、2人掛かりで無理やり開けて入って行く。

俺は、これ以上中に入れないように通路をふさぐ。

「すぐに行くだと？ 確かにボウズは腕が立つようだが、この人数

を相手には無理だろう」

「それがどうした！ 俺はマリア達から留守を預かってんだ！ 無理かどうか関係ない！ やるんだよ！！」

グラハに対して啖呵を切る。すると、待っていた相棒 ダイキから連絡が入った。

<おい、フエイ聞こえてるか？ 大事な話がある。聞いてくれ>

<今はそれどころじゃねえ！ 知らない連中がいきなり襲ってきたやつて相手してる最中なんだ！ 数が多すぎて手が回らねえ……早く帰ってきてくれ！>

<つつつ！！ 分かった！ 今そっちに向かっている最中だ！ もう少し耐えてくれ>

<頼むぜ！ もう部屋の中に押し入れられてるんだ。出来るだけ早くしてくれ>

そう言つて念話を切る。

これで、何とかなる算段はついたな…… 後は、こいつらを足止めすればいいだけだ。

俺が、先の事を考えていると、不意にグラハが斧を大きく振りかぶり、集会広場に続く壁に向かって振り下ろした。

壁は斧の衝撃で壊れ、衝撃で建物が揺れている。

グラハは、穴の方に首をクイッと動かし手下達に合図を送る。

「お前らはこつから中に入ってさっさとガキ共を捕まえてこい」

手下達は「ハイ！」と返事をすると穴から部屋に入って行く。

「行かせるかよっ」

俺は、急いで穴に走り出し手下達を止めようとするが、グラハの斧が進路を塞ぐ。

「ボウズは俺の相手をしてくれるんだろ？」

グラハは嫌らしく笑いながらも、目で俺を牽制してくる。

壁ぶち破るとかどんだけなんだよ！ アリス達じゃあの人数は絶対に無理だ。はあ、やりたくねえけど方法はこれしかねえか。マリアには後で謝ろう。

「悪いな。オツサンの相手してる場合じゃねえんだ。後にしてく………れっ！」

俺は、話しながら左手を伸ばして壁を触ると、重心を下げながら、体重を身体の右半身に溜めながら右腕を上げ限界まで伸ばす。グラハからみれば珍妙な事をやっているように見えるが、この動きにはちゃんとした意味がある。右腕が限界まで伸びきった瞬間に体重を左半身に移動させながら今度は左腕を限界まで伸ばす。すると、ただ触れているだけに見えていた壁が粉々に吹き飛んだ。この技は、ダイキの記憶にあつた技で体重を何倍にもして威力を上げる技法らしい。グラハは目を丸くして驚愕していたが、そんなことには目もくれず部屋に入っていく。

部屋に入ると、顔や腕に殴られた後や薄い切り傷が痛々しく残っているアリス達が部屋の角に集まっていてそれを手下達が囲んでいる。その輪の外には最初に入った手下2人が床に転がって気絶しているのが見える。どうやらアリス達が倒したみたいだな。

手下たちはいきなり壁に穴が開いたことに驚きこちらに視線を向け、アリス達は俺の姿を見て安堵の表情を浮かべている。

俺は身体を低くして走り出し、手下達の間を縫ってアリス達の前に出る。

「2人も倒すとは良く頑張ったじゃねえか！ 後は俺に任せとけ！」俺は、手下共が不用意に手を出せないように殺気を込めて威嚇しながら身体を傷だらけにしたアリスとケインを褒める。初めて？の命のやり取りで限界だったようで、2人とも腰を抜かして座り込んでしまう。

目の前には、山賊がボス含め12人か。不利な状況だが、そろそろダイキ達も着くだろうし、手下は弱いからもう少し気張るかなっ！

俺は、フエイの念話が切れてから『飛行』のスピードを限界まで飛ばして向かい、2、3分で孤児院に着いた。

孤児院は、入口の扉が剣で切りつけられた痕が残ったまま無残に倒れていて、外の菜園は酷く荒らされているように見えた。後ろでシュレとトビアスが身体を震わせているが、気にしてる暇はない！俺は、急いで院内に入ると、通路の壁に2つの穴が空いていて、その穴の先に隅に追いやられながらもアリス達を守っている相棒フエイとそれを取り囲んでいる山賊達、身体が一回り大きく、その体長より少し小さいくらいに斧を持ったリーダーらしき人物がいるのが見える。俺は、変わり果てた孤児院 いえ にシヨックを受けながらも部屋に入る。

「お前らがグラハ山賊団だな？俺の家族が世話になったみたいだな？」

俺の声に気がついて、リーダーらしき人物が振り返る。

「おお、これまた小さなボウズが出てきたな。この中で一番ガキみたいじゃねえか。俺達がグラハ山賊団だが、ボウズはどこでその情報を知った？」

「それは、森の中で年甲斐もなく宝探ししてた心優しいおじさん達が簡単に教えてくれたよ。今頃、来もしない助けを呼んでるころじゃないかな？それよりも、あんたがグラハであってるか？」

「部下が世話になったようだな。俺がこの山賊団の頭かしらをしてるグラハだかどうした？」

「あんたにいくつか聞きたいことがあってな。1つはあんた達がこのを襲ったのはこの食料が狙いか？」

「そうだ。フロン村でこのうわさを聞いてな。金になると思ったからここに来た」

「2つ目、あんた達は俺達がいることを知らなかった。今更だが見

逃して帰ってくれないか？ そうすれば、あんた達にもこれ以上危害を加えるつもりはない」

「ガハハハ！ お前もその赤髪ボウズみたいな事言うんだな。だが、その提案は却下だつ！ 部下が何人もやられたみたいだし、食料以上にお前らが着てる服は上等なもので金になると見た。それにここには……、魔人や獣人のガキもいるようだしな！ こいつらは上流階級様に売れば大金になるし繋がりも持てるからな。この機会を捨てられるとは思えねえな」

「そうか…… 交渉決裂だな。お前らには家族と家を傷つけた報いを受けてもらうつつ！」

俺はそう言つて腕輪を棍棒に変化させる。フェイも俺が近くに来たので魔法を使う気みだ。

「珍しいもの持つてるじゃねえか。へん！ やれるものならやってみな！」

グラハ達も武器を構えなます。

いつもは家族の平穏な生活を送る部屋が一触即発の雰囲気にかまれる。

しかし、その空気を壊したのは、ベルでもフェイ達でも山賊達でもなく遅れて入ってきたシュレとトビアスだった。顔を怒りで真っ赤にしたシュレは奥にいるフェイ達を見た後に射殺さんばかりに山賊達を睨む。

「お前らが…… お前らが俺達の家を壊したのか？ なあ、お前らが俺の大切な家族を傷つけたのかつ！？」

普段とは違うシュレの迫力に俺はただ動けずにいた。

そして、その異常さに気がつかないグラハは不用意に言葉を紡ぐ。「俺達がやったから何だつて言うんだ？ そのボウズたちみたい

に俺が相手にしてやるとでもいうのか？ まさか竜人もいるとはな

お前らは家族そろつて仲良く貴族様に売ってやるよ」

すると、シュレの顔が普段の顔色に戻り、怒りの表情が仮面をかぶったように一瞬で無表情になった。

それを見た俺とフェイ以外の家族達の顔色が一気に悪くなる。

「ヤバイ…… これはヤバイよ！ ベル！ すぐに兄貴から離れるんだ！」

トビアスが顔を青くしながら俺に向かって叫びだす。

「ベル！ トビアスの言う事を聞いて！ 早く離れないと巻き込まれちゃう！」

アリスもライオを胸に抱えて声を上げる。ケインとエリーは魔法の準備をしていたフェイを後ろから抱き抱えてうづくまる。

「おい！ 一体どうしたんだ？」

俺が後ろから引つ張るトビアスに聞く。

「兄貴がキレちゃった！ しかも、この感じは前にシャロン姉 ねえ と喧嘩したとき以上にヤバい気がするんだ！！ 前は外だったから大丈夫だったけど、こんなところで龍化したら天井が壊れちゃう！」

トビアスが俺を無理やり部屋の外に連れ出されると、シユレの身が紅いマナに覆われてしまった。マナの中のシユレは身体が変化し始め次第に巨大化する。

「おい、お前らも早く隠れる！ 巻き込まれるぞ！！」

グラハが、未だに呆けている手下に指示を飛ばす。

「おい！ 早く行けよ！！ 巻き込まれちゃうだろ！」

「うるせえ！ 俺が先だ！ 退け！！」

下つ端達が我先にと外に逃げ出そうとする。

シユレの変化は、頭が天井に当たっても変化が止まる事がなく、そのまま天井を破り、3mを越えたところで止まった。

「な、なんだこれは……」

天井の瓦礫から逃れた山賊の1人が頭上を見上げてつぶやく。

さつきまで人だったものは、高さ3mを越える「龍」ドラゴンになったのだ。龍は、西洋龍の姿で、身体は赤い鱗に覆われて、瞳は黄色く光り、後ろには長さが2m程の尻尾が生えている。

「GYAAAAAAAAAAAAA！！」

すでに人語を話せないのか、鼓膜を破りかねない声で咆哮を上げる。

最近、平穏な生活が続いていたから忘れていたが、俺はトビアスに抱えられながら姿を変えたシュレを見て再度認識させられた。

ああ、俺は異世界にいたのだ……………と。

第三章 4 暴走（後書き）

もうそろそろ試験期間に入るので更新が遅くなるかもしれません。

一応、次話は日曜日を目標に頑張ります！

たぶん少し早い投稿になると思いますがこれを目安におねがいします

第三章 5 殺人（前書き）

どうも！

明日にしちゃうと完成しなさそうだったので何とか今日に完成させました。

はっきり言います。スランプっばいです。文に違和感しか感じなくなってきました。

もしおかしくても許してください。

お気に入り登録ありがとうございます！

今話は駄文になってしまった気がしますが試験期間が終われば本調子に戻ると思いますが多めにみてください。宜しく願います。

第三章 5 殺人

俺の目の前には自分の何倍もの体長がある深紅のドラゴンがいる。突如襲って来た山賊団のリーダー、グラハがシュレに軽率な言葉を言った事で、シュレが龍化してしまったのだ。

室内で龍化した事で集会広場の天井の一部は崩れ、不運にも逃げ遅れた山賊の手下が数人、瓦礫や変化したシュレの下敷きになり、辺りが鉄の匂いに包まれている。

フェイ達は部屋の隅に固まっていたため瓦礫の被害にはあわなかつたようだ。

場が沈黙に包まれる中、生き残った手下達が我に返り部屋から出ようと俺達の方に動き始める。

「GYAAAAAAS!」

足音に気がついたシュレは、彷徨を挙げながら身体を半時計回りに回しながら、遠心力のついた太い尻尾で手下達を攻撃する。

おいおい！俺とトビアスもいるんだぞ!?

壁を破壊しながら迫って来る尻尾から逃れる為に急いでトビアスを押し倒す。尻尾は、俺達の上を通過して手下達を部屋の破片と一緒に外の遊具場の方向に吹き飛ばす。

グラハは吹き飛ばされた手下を助けに壊れた壁から外に向かい、シュレが天井を破壊しながら追う。

俺は、フェイ達がの攻撃で無事かどうか確認しにトビアスの手を引っ張って行く。

「みんな大丈夫か？」

みんなに近づくと、所々に傷が増えているものの軽傷のようだ。

「こつちは何とか大丈夫だ。アリスとケインが手下達と戦った時の傷が気になるがエリーの『ヒール』ですぐに治るだろ」

「そうか。エリーはみんなの傷を治してやってくれ。そしたら、俺とフェイがシュレと奴らを何とかするから、奥の部屋に隠れてろ。」

絶対に出て来るなよ？」

俺は、今後の指示を出しながらエリーの傷を治す。

「分かった！」

アリスが代表で返事をした。

「アリスとケインは大変だろうけど、俺達の方までみんなを頼むぜ！」

「うん！」

アリスが変わってケインが元気に応えてくれた。

「よし、問題を片づけに行くか！ 行くぞ相棒^{フェイ}」

「ヨツシャー！！」

俺とフェイは、シュレが開けた大穴からシュレと山賊達を追って外に向かった。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAA！」

俺達が外に行くと、怒り狂ったシュレをグラハを中心に山賊達が囲んでいる。今はグラハを含め6人しかおらず、他の仲間は瓦礫の下か、シュレの餌食になったか数が大分 だいぶ 減っている。

「あいつが誰かに攻撃した時に反対にいる奴が切りつけ！ 攻撃しなからすぐに離れるよ！ 反撃食らって死にまうぞ！」

グラハが残った仲間^に指示を出しながら仕掛けていく。それに呼応して他の仲間も両刃刀を振り上げて巨体に立ち向かっていく。

「あいつらは何やってんだ？ この世界の龍は知らないけどあんな装備じゃ敵 かな いっこない事ぐらい分かるだろ…… あの様子じゃ魔法も使えないだろうし死にたいのか？」

俺は何でグラハ達は逃げないで戦っているのかが分からず、フェイに尋ねる。

「理由は色々あるだろ？ 仲間がやられた敵討ちって理由や、龍が珍しくて高く売れるからなんとか倒そうとしてるとか。俺は前者だと思っけどな」

フエイが俺の問いかけに答えてくれる。

「何で前者だつて分かるんだ？」

「もし後者なら、自分の命も計算に入れて割が合わなかったらすぐに逃げ出してるだろ？ あの装備でシュレと戦うのは死ぬ可能性が高すぎる。それに手下がリーダーを置いていかないで一緒に戦ってるって所が慕われてると思ったからだよ」

「成程な。でも、このままやらせるわけにはいかないな！」

「確かに。幸い、あの装備じゃシュレを傷つけるに至ってないみたいだが、目や口の中みたいな急所を狙われれば危ないだろう。どうする？」

シュレが俺に尋ねてくる。

「俺がグラハを抑えるから、フエイはあの手下達とシュレを頼む。

俺の魔法じゃどっちも相手には出来ないからな」

「オツケー、まかせな！ ダイキが近くにいるから魔法も使い放題だしいな。それじゃあ無茶しすぎるなよ？」

「フエイもな！ それじゃあ行くか！！」

俺は、シュレからいったん離れて指示を出しているグラハに、フエイはシュレの周りにいる手下達に向かって走り出した。

――ーグラハside――ー

「おめえらも一旦下がれ！ 相手は疲れを知らない怪物だぞ？

交代で当たらないと死んじまうぞ！！」

俺の指示で、部下達が息を切らせながら交代でかく乱攻撃を続けている。

目の前の龍は今まで戦ってきたどの敵よりも巨大で強い。攻撃は当たるが、俺達の装備と技術じゃ、あの赤い鱗には傷一つ付く気配

がなく完全なジリ貧状態だ。戦争の時もこれほどの奴はお目にかかれなかった。なんで、こんな辺境の地でこんなモンと戦わなきゃいけないんだか。だが……

「部下達が何人もやられている以上同じくらいの見返りがないと死んだやつらが報われねえんだよ！」

俺は、斧を持ち上げながら走り出す。龍がこっちに気づき、身体を回して尻尾を振ってくる。

その攻撃は見飽きたよ！

斧を龍の頭上に放り投げて、迫ってきた尻尾を跳んでかわす。着地してすぐに斧の落下地点に走り、落ちてきた斧を空中で掴み落下の勢いで龍の膝に振り落とす！

「GYAAAAAAAAA……」

相変わらず傷はつかないが、声を聞いてると痛みはあるようだ。

しかし、斧の重量と俺の全体重を合わせた斬撃で痛みを感じるだけなんて……俺以外の攻撃は無駄だな。

「お前らは攻撃しなくていいからこいつの注意を引いてくれ！

その間に俺が攻撃する！」

「……へい！」「」「」

部下達が返事をする。

よし！まだ覇気は衰えていないみたいだ。龍から獲れる素材は貴重で王都まで行けば高く売れるだろう。なんとかこいつを倒して、ガキ達を始末すればまだなんとかなるはずだ。

俺が再び攻撃しようと斧を担ぐと視界の左側から小さな影が入ってきた。咄嗟とつさに左手を曲げて顔を守ると腕に衝撃が響く。思っていた以上に威力が高く、少し身体が浮いてしまう。

「……」。おいおい、誰だよ、こんな忙しい時に「

そう言つて衝撃が来た方向を見ると、ちょうど着地した黒髪のボウズの姿があった。

「すみませんね。これ以上俺の家族をやらせる訳にはいかないんですよ」「

「家族つて、あれはもう化け物だろうが。さつきも攻撃に巻き込まれかけてたみたいだし、見捨てて俺達の邪魔はしないでもらえるか？」

「あれは事故だと割り切っているんで気にしてません。それに、シユレがしなかつたら俺が殺ってたと思いますから。なんで、あなたが諦めて退いてください」

「悪いな。部下達が何人も死んでるのに、はいそうですかって訳にはいかないんでね」

「そうですか…… このまま話していても平行線ですね。実力行使で行きましょう」

「殺されても文句言うなよ、ボウズ！」

俺は、斧を右肩に担いで右足を引きいつでも動けるようにする。

それに対して、ボウズは右手の腕輪が光って出てきた金色の棒を半身になって両手で持っている。戦い方を知らないボウズだと思っていたが、今のボウズの構えからは全く隙がなかった。どうやら、認識を改めたほうがよさそうだ。

「言い構えじゃねえか。クラインはボウズみたいなガキにも武術を教えるのか？」

「いえ、これは自前なので母さんは関係ありませんよ」

「そうか、ボウズも充分化け物だな！ それでは元王国騎士団10人隊長グラハ・ローウエルが相手をしてやるぜ！」

俺の名乗りにはボウズは驚愕の表情を見せている。そりゃあそうか。騎士団員がこんなところで山賊してるんだもんな。

ボウズは、すぐに意識を切り替えたようで俺に続いて名乗りを上げた。

「クライン孤児院5男ベル・クラインがお相手する！」

俺は、大人げないが高揚感に身を任せながら二周り以上小さい子供に向かって行った。

さっきの不意打ちは完璧だったのにガードされるとは思わなかった。出来るだけ早く倒してフェイの手助けに行きたかったけど、そう上手くいかないな……

話を聞いていると、どうやらフェイの仮説が正しかったみたいだ。賊のイメージはもっと個人主義でそのトップは性根が腐った奴だと思ってたけど、こいつはどうやら違うみたいだ。

殺しなんてしたくないし、黙って引いてくれないかと思ったけど、やっぱり無理か。

「元王国騎士団10人隊長、グラハローウエルが相手になるぜ！」
何?! 今元王国騎士団って言ったか? マリアさんの部下的な人がなんで山賊なんかやってるんだ?

俺が驚愕の表情をグラハがやっぱりなと口元を上げる。
クソっ。嘘ではなさそうだし、本当にやりにくくなっちゃったな。でも倒さないとシユレや家族がやられちゃうし、彩花に会えなくなっちゃう。

「クライン孤児院5男、ベル・クラインがお相手する！」
全力でお前を倒す!

俺は、棍棒を作り中段に構える。

グラハは斧使いで一発必殺のパワータイプだ。スピードは俺のほうが断然早いけど、当たれば強化してる状態でもどうなるかわからないだろう。だからって自分から当たりに行ったりしないけどな。だって、怖いし怪我したら嫌だし。

グラハが、斧を右肩に担ぎながらこっちに迫ってくる。

俺は、ヒット&アウェイを採用し、グラハを中心に時計回りに動きながら様子を見る。

グラハは、その場に止まり俺を見失わないように同じ方向に回り

始めた。

斧が届かない距離でステップを踏みながら攻撃のタイミングを探す。

3週目に入ったところで隙を作らせるために少しスピードを落とすと焦れてたグラハが突っ込んできた。俺は、落としたスピードをすぐに1段上げ後ろに回って左ひざ裏に棍棒を打ち付けようとする。いわゆる膝カツクンを仕掛けた俺に対して後ろに回られることを察していたのかグラハは左足を軸にして身体を回し、風を切りながら斧が俺の顔に迫って来る。しかし、俺の打撃の方が早く当たり、バランスを失った斧は頭の上を通過する。斧を振りながら膝をついたグラハの左膝に棍棒を真上から打ち下ろす。場に「ゴキン！」っと鈍い音が響きグラハの顔が苦痛に歪む。

「これで勝負はついただろ？　今ので左足は動かせなくなったはずだ。降参しろ」

一応、反撃を警戒して射程範囲外に下がってからグラハに声をかける。しかしグラハは脂汗を出しながら斧を支えに立ち上がる。

「何言ってやがる……　決闘で降参なんてありえねえ！　始めた時点で命のやり取りなんだよ。それにまだ終わってねえだろ」

「そうか……」

こつちの世界では命のやり取りが当たり前なのか？　しかし、グラハの目は冗談を言っているようには見えない。

「そんなに……、死にたいのか？」

俺は、その感覚を理解できず、グラハに聞く。

「逆に聞きたい。なんで決闘なのに殺そうとしない？　クラインがそう教えたのか？」

「母さんがどうなのか知らないが俺は簡単に殺したくないだけだ」
「なら、覚えておけ。時には殺さないことが生き残るよりもキツイことなんだ。決闘の時に命が残るなんて事があつたら負け犬と後ろ指さされることになる。これはすべての種族共通の事でもある」

グラハは、相変わらず額から脂汗をかきながら真剣な面持ちで言

う。

「……………分かった」

本当は殺したくない。だが、グラハは本気で殺してほしいと願っている。さっきの戦闘 やりとり と今の状態で勝ち目がないと考えたのか？

俺は、腹を括って棍棒を槍に変えて握りなおし、切先をグラハに向ける。

せめて痛みを感じないようにと心臓を狙い肩を、腕を、そして手を身体の内側に捻りながら突く。

「そうだ。それでいい」

グラハが何か言った気がしたが、俺は初めて人の命を奪う事に頭が真っ白になっていてよく聞こえなかった。

目をあけると、胸に槍が刺さって絶命しながらも薄く笑っているグラハがいる。

ああ、俺は人殺しになったんだな……

俺の手には、グラハを貫いた感覚が残っており、急に吐き気がして泣きたくなくなった。

だが、まだ終わっていないと自分に言い聞かせて我慢してフェイの方を見る。

向こうはほとんど終わっていて、シュレが前にブルウォルフを縛った紅い鎖の大きいバージョンで地面に縛りつけられて動けなくなっており、手下たちは死んでいるのか分からないが地面に倒れている。

フェイはシュレの頭の上において、前に話で聞いたように後頭部に強い衝撃を与える。すると、シュレの身体が輝き、数秒後、裸で気絶したシュレがフェイの下に現れた。

山賊のリーダーは俺が殺して、手下達は気絶してるか死んだかのどちらかで今は何もできない、シュレも元に戻ったし、みんなは無事。

安全を確認して気を抜くと、視界がグチャグチャに歪み始め、気

付くと地面に倒れていた。

……あれ？　なんで倒れてるんだ？

俺の意識は原因を考えてる間に無くなった。

第三章 5 殺人（後書き）

今週から試験期間が近づいているので投稿が遅れるかもしれません。
試験が終わるまでは多分4〜5日ペースになると思います。

第三章 6 自責（前書き）

どうも！

まずは、更新が遅れて本当にすみません！！

試験期間が近いのとスランプ気味なんです…… 大目に見てください。

今話は、ちょっと鬱な感じになっているので苦手な方は見ない方がいいと思います。

お気に入り登録ありがとうございます！ これからもがんばりますのでよろしく願います。

第三章 6 自責

「ダイ君……」

赤と黄色、2つの陽光が血で赤く染まった槍を持つ俺と、胸から大量の血を流して倒れているグラハ、その光景を見て冷たい視線を送ってくる彩花を照らしている。

「彩花、俺……」

彩花は、何も言わず顔が返り血で汚れた俺を見つめ続ける。

「俺はどうすれば良かったんだ？ 彩花なら、グラハを殺さないで解決する方法も見つけられたんじゃないか？ 俺にはそれが見つけれなかったんだ…… 俺は人を殺した」

俺は、初めて人を殺した事で弱気になっているみたいだ。いつもならこんな弱音は言わないはずなのに……

「まだ、グラハの身体の感触が手に残ってるんだ」

槍から血が伝って赤くなった手を彩花に見せる。

「ダイ君……」

彩花は表情を変えずにそれを見つめる。

「なあ、頼むから何か言ってくれよ……」

彩花は、何も言わずに後ろを向いて歩き出した。

「どこ行くんだよ？ 置いてかないでくれよ？」

彩花を追いかけようとするが、グラハの死体が俺の足を掴んで動きを止めてくる。

「離してくれ！ 見捨てないでくれよ！？ 頼む！ 行かないでく

れえ つ……」

ガバっ！

彩花の背中を追おうとしたところで目に映る風景が変わる。

「夢……………だったのか？」

俺は、布団を強く握ってハアハアと荒い呼吸をしながら状況の確認をするために周りを見してみる。外はまだ明るいらしく窓から光がさしていて、俺の周りには6枚の布団が敷かれている。どうやら男部屋で寝ていたようだ。

そういえば、フェイがシュレを元に戻したあたりで気絶したんだっけか？ あれから何時間たってんだ？ みんなは大丈夫なのか？俺は、布団から出てみんなの有無を確認するため部屋出る。

部屋を出て左に進み、突き当たりを右に曲がると玄関につながる廊下に出る。廊下は、シュレや山賊達が壊した壁や天井の破片が散らばっていて痛々しくなっている。調理場、客間、集会広場と覗いて行ったが、誰もいない。そのかわり、戦闘中に会ったはずの死体がすべて消えている。何で死体まで無いのかは分からないが、家族にまで置いて行かれたのではと不安になり早足で院の外に向かう。

幸いなことに、みんなはすぐに見つかった。遊具場に倒れている山賊の身体を2人で1人を持って森の入口まで運んでいるようだ。運ばれて行く山賊達は手が力無く垂れており、死んでいるのだろう。フェイが殺したのか？ だけど、さっきはただ気絶しているだけに見えたんだけどな？

死体の状態に疑問を抱いていると、遠くから大きなソプラノボイスが聞こえてきた。

「ああ〜！ ベルが起きた！！」

「えっ？ どこにいるの？」

「玄関とここにいるよっ。ベルう〜」

声の方向に視線をやると、森から帰って来た所で俺に気付いたらイオが走って抱き付いてきた。

「うぐっ」

「大丈夫？ どこか痛いところない？」

「だっ、大丈夫だから離してくれっ」

ライオは、苦しそうに頼むとすぐに離してくれた。

「俺とエリーが治してるんだから大丈夫に決まってるんだろ」

「ベル君大丈夫？」

「エリーも心配し過ぎだよ」

「何だ、大丈夫そうだな」

「元気そうで良かったよ」

ライオの声につられて、フェイ、エリー、アリス、トビアス、ケインがやってきた。ん？ シュレがいない？

「あれ？ シュレはどうしたんだ？」

するとみんなが顔を見合った後に陰りが浮かぶ。

「どうしたんだよ？ 早く教えるよ」

だが、誰も答えようとせずフェイとトビアス、アリスとケインが目線を下に落とす。

えっ？ ちよつと待って？ そんなに深刻な状態なのかよ？ 実はフェイが力加減を間違えてたとか？

「おっ？ ベルも起きたか。 さっきは迷惑かけてわりいな」

俺が色々な可能性について考えを巡らせていると、何事もなかったかのように院の中から両手に木製のシャベルを3本持ったシュレが姿を見せた。

俺は、やり切れない感じになりフェイ達に振り返ると、フェイとトビアスがニヤリと言う表現が似合うように口元を吊り上げ、他は苦笑している。

「俺達は何も言っていないぜ？ 勝手に勘違いしたのはお前だからな」

「おっ、お前ら〜」

「だって、ベルが簡単に騙されるなんて思わなかったんだもん」

「ごめんね、ベル君」

「ベルにも冗談が通じるんだな」

他者多様の反応を見せるみんなに内心溜息を吐きつつ、みんなの状態を聞く。

「とりあえずみんなは大丈夫なのか？ いきなり襲われて精神的に回復してないだろうし、シュレは龍化が解けて時間も経ってないだ

ろうし動いて大丈夫なのか？」

「俺は龍化した時の記憶がないから何とも言えないんだが怪我はしてないぜ。前になつたときも特に異常はなかつたし今回も大丈夫だろ。といつても俺が起きたのもさつきなだけだな！」

「私たちもエリーとフェイが治してくれたから大丈夫だよ。それに時間が経ってないって言つても4時間は経ってるしみんな少なからず荒事も経験してるから平気よ。それよりもベルだよ！いきなり気絶しちゃつたみたいだし、どっか怪我したんじゃないかってみんなが心配したんだからね！」

アリスがプンプンと怒り、シユレとフェイ以外が頷く。

「あれは、色々あつて疲れてたから、終わつたつて思つたら気が抜けちゃつたんだ。心配掛けて悪いと思つてるよ」

初めて人を殺してシヨックを受けてたなんて言えないもんな。

「これからは倒れる時はちゃんと伝えてから倒れるよな」

「んな無茶なと心の中でトビアスに突つ込みを入れつつ頷いておく。それより、みんなは今何してたんだ？ 森の方に行つてみたいだけ」

「今は死体の片づけ兼埋葬だな。このまま放置しても家を直す時の邪魔になるだけだし、血の匂いに釣られて結界内に肉食動物が入ってくるかもしれないからな」

「僕は2人運んだよ！」

「こら！ そんなことで自慢しちゃだめよ」

ライオが右手でピースして胸を張つたがアリスに頭をはたかれてる。

「外の死体はフェイが殺したのか？」

「いや、俺が相手にした奴は気絶させてたんだが、目を覚ましてグラハが死んだのを知つたら全員舌嚙んで自害しやがつた」

トップの死を知つてすぐに自害つて事は事前から情報を漏らさないように捕まつたらそうするように決めてたか、自害を試みる程グラハが慕われていたか。結果としてしつかり統率のとれた集団だつ

たつてことか…… 彩花のように機転がきけばこんな結果にならないかかったのかもしれない……

「そうか…… グラハの遺体はもう移動させたのか？」

「いや、まだそのままにしてあるが？」

「グラハの身体は俺が持つていく。それが、決闘をした相手への礼儀だ」

「分かった。よし、ベルも大丈夫そうだし作業に戻るぞ！ 早くしないと日が暮れちまうからな！」

フェイが号令をかけ各自の作業に戻っていく。俺も、仰向けに事切れているグラハの元に進み始めた。

俺はグラハを両手で抱えて運んで森に入ったところに置き、戻ってグラハが使っていた斧も持つてくる。シユレ達はここから20m程離れた場所で移動した死体達を地面に埋めているところだ。

俺もグラハの身体が大きいので、広めに地面を掘ってそこに遺体を入れる。顔を覗くとグラハの顔は清々しい位に笑っている。

「何で殺されたのにそんな笑顔でいられるんだ……」

俺の問いかけに死体は何も答えず、小さな風がふいた。俺はそのまましゃべり続ける。

「もつと違う出会い方をしていれば、あなたとはいい友人になれたと思ってるんだぜ。短い時間だったし、あまり言葉を交わしてないけど戦つててそう思ったよ。あなたは俺と戦つててどう思った？」

「あなたを貫いた時の感触がまだ残ってる。実を言うと俺は違う世界から来たんだ。だから、殺し合いをするのも、自分の手で人を殺すのもあなたが初めてだった。話ではあなたはたくさんの人を手にかけたみたいだが、初めて殺した時はどんな気分だったんだ？ 今の俺の気分は最悪だよ…… 思い出すと吐きそうになる」

「もし、またあなたと逢えたら他にも聞きたいことがあるから教え

てくれよ。あんたの仲間は近くで眠ってるから、向こうでまた会えるだろう。だから……安らかに眠ってくれ」

俺は、近くに咲いていた白い花を数本摘んで胸の上に重ねた手の上に置き、目を瞑って両手を合わせる。いつの間にか、フェイが後ろに来ていてグラハに花を供えてから両手を合わせた。

数秒間手を合わせた俺達は、無言で遺体を土で埋める。埋め終わると斧を墓石代わりに地面に刺したフェイが俺に笑って話しかけてきた。

「何か悩み事があるんじゃないか？ 初めて人を殺して心が揺れているのが俺に伝わってきてるんだ。俺には、弱気なところを見せていいんだぜ？」

「……さつきからずっと考えてるんだ。グラハを殺さなくてもいい方法があったんじゃないかってさ。あの時、グラハの仲間が何人も死んで退けないのは分かってたけど、彩花だったら違う方法を考えてグラハ達が戦いをやめるように説得できたんじゃないかって。何で、俺にはそれが出来ないんだって」

「直接彩花に会ったことねえからはつきりと言えねえが、あの時はグラハとは戦うしかなかったし、あそこでシユレが龍化して山賊達を殺しちまうなんて誰も考え付かないだろ？ 今回はしょうがないと思うし、これからに生かせばいいじゃねえか」

「それだけじゃない。俺は人殺しだ。こっちの世界ではどうか分からないが地球では完全な犯罪者なんだ。そんな俺がのうのうと彩花に会っていいのかって思っ……彩花は俺が人殺しだって知ったら見捨てるんじゃないかって……」

「おいおい、それは考えすぎだろ。お前の記憶で見た限りの彩花はそんなことする奴には見えねえし、実際しないだろ？ 嫌なことが連続して起きてるから考え方がネガティブになっただけだよ」

「そうか？」

「そつだよ。少し時間をおいて気持ちを落ち着かせるよ。これから

も相談に乗ってやるから今日は早めに寝な」

「……………分かった。相談に乗ってくれてありがとな」

「気にすんなよ。俺達は親友だろ？」

「ああ、そうだな」

「それと、家族に心配かけないように隠すのはあまり感心しないぜ。チビたちに相談しろとは言わないがせめてマリアには話しておけよ？　なんてったって俺達の『母さん』なんだからな！」

「考えておくよ。それじゃあ、みんなも終わったみたいだし、戻って片づけを再開するか！」

そう言っつて、俺達はみんなが待つ孤児院に歩き出した。

第三章 6 自責（後書き）

本当にボキャブラリーがなくてすみません。
次話はまた、4、5日後になるとおもいます……

第四章 1 帰宅（前書き）

どうも！

今回も短めです。

お気に入り登録ありがとうございます！

これからも頑張っていくので長い目で見てください。
宜しく願います。

第四章 1 帰宅

グラハ山賊団の襲撃から2日後、孤児院は未だ壊れたままである。子供達で話し合った結果、壊れた孤児院の修復はマリアさんが帰って来てからやるうという事になったからだ。食事場として利用していた集会広場は、瓦礫と死体を片付けた状態で保留。床が所々山賊の血で赤くなってるけどそこはスルー、集会広場が直るまでは客間で食べることになった。

夜寝るときは、みんなが集まって寝ることに。みんな明るくふるまってるけど内心気にしてるんだろ。寝静まるとだんだん布団から転がって人肌を求めだすんだ。唯、その人肌が主に俺になるのはやめてほしい……。シユレは力強く抱きしめてくるから息ができなくなるし、アリスは膨らみ始めた胸が顔に当たって気になるし（断じてロリコンではない！）、トビアスは寝言がうるさいし、エリーとケインは……。特にないや、ライオは涎をつけてくるし、フェイはそれを避けるために実体化解くし、この2日は全然眠れなくて眠い……

起きている間は、今まで通りグループ分けをして狩りと家事で分かれて行っている。これは、みんなの意見で、もうグラハ達のようなやつらは来ないだろうという事で決まった。その時の武術練習の時にアリスとケインの動きを見てたんだが、大人を1人で倒せたことと、家族を危険から守れたことで自信がいたらしく動きが良くなってている。試しに2人に組み手してもらったら、2日前の実力がウソのような動きを見せ始める。例えば、動きの要所や目線でフェイントを入れて牽制したり、相手の思考を先読みして攻撃しようとしたりと実践的な動きが入りだした。やっぱり、まだ不自然な動きだが、そう言う事をしだすことに意味があると思う。そう言った意味では、100日の練習よりも1回の実践って言葉が良く分かる。2人共一皮剥けてるわ。俺もうかうかしてられないな！

後は、今回の事で孤児院の護りを強化した方がいいと考えてちよつと考えてることがあるんだ。これは、マリアさんが帰って来てから相談しようと思ってる。

そうそう！ たぶんみんなが「あんだけ人殺して鬱ってたのは回復したの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？」って思ってるんだろうけど……

……回復するはずないじゃないか！！ ここ2日寝れてないって言ったけど1番の理由はグラハが夢に出てきて途中で目が覚めちゃったんだよ！ 不眠症だよっチクシヨ …… …… 吐き気や倦怠感はなくなくなったけど、悪夢とスイッチが入ったときのネガティブモードは全然なおんねえよ……… フェイ先生にもカウンセリングしてもらってるし頭の中では理解してるつもりなんだけども……

とまあ、この2日間はこんな生活を送っていた。

その日の午後、今日は狩りに行かず全員で大掃除をしていると、森の方向から黒いマントをたなびかせて、身体を軽装のプレートアーマーで固めた見慣れた金髪 ブロンド をたなびかせた人影が飛んでくるのが客間の窓から見えた。俺はみんなに声をかけて外に出るとマリアさんが入口に降り立つのと同時だった。

「……………何なのこれ？」

「……………おかー！ さー！ ーん！！」「……………」

帰って来て早々、壁と天井が崩れ所々に血痕が残った孤児院（集会広場と遊具場）を見て頭をフリーズさせてるマリアさんに涙目の子供達が走った勢いそのままに抱きついていく。放心してるマリアさんがそれを受け止められるわけがなくそのまま地面に押し倒される。その勢いのよさに受け身をとれず頭を打ったことで頭が再起動したマリアさんは、起き上がると3歩離れたところで傍観してた俺とフェイ（幼児モード）の所に来て説明を求めてきた。

俺達も何があったか報告するつもりだったのですが、グラハ山賊団が来たこと、アリスとケインが大人を1対1で倒したことも

ちろん不可抗力でその状況になってしまったことも説明した）、シユレが龍化したこと、グラハ達との戦い（8割がシユレの暴走で）集会広場が壊れてしまったこと、山賊達はすでに死んでいること、などを話した。途中でグラハの事を思い出してちよっと暗くなっちゃっただけで気付かれてないよな？

報告が終わると、マリアさんは子供たちの身体（特にアリスとケインとシユレ）を触り怪我がないか確認し始める。みんなは気恥かしそうにしながらもマリアさんの気のすむまで触らせている。

マリアさんが落ち着くと、壊れた個所をどうするかの話し合いが始まった。

「壊れた個所だけど俺達が魔法で直すか？」

「そうねえ。そこは私でもいいんだけど、その方が早いかしらね」

「分かった。形は今まで通りでいいよね？」

「特に変えたい所もないしそれでいいわ。お願いね」

「了解。それじゃあフェイ、頼むよ」

「頼まれたぜ！」

そう言い残しフェイは意識を俺に戻る為に姿を消し、俺も魔法を使う為に集中し出す。そのまま、緑色のマナが孤児院を覆い壊れている箇所が一層激しく光りだす。その状態が、2分程続くと光が収まり、傷1つない元の姿に戻っていた。

風呂場を作った時から規模の大きい魔法は使わないで来たけど、前よりも貧血みたいに頭がクラつてくる事もないし、発動速度も上がったみたいだ。

（これはフェイが魔法の扱いに慣れたって事か？）

（それもあるが、ダイキの身体が魔法の行使に慣れたって言うのと、単純に魔力が上がったって言うのもあるな）

（分かった。教えてくれてありがとな）

（別に礼はいらねえよ。それじゃ、また実体化するぞ）

（了解）

フェイからの念話が切れると、再び幼児モードになったフェイが

俺の横に現れる。

「2人ともありがとうね。それで、その山賊達のお墓はどこにあるの？」

「それなら森の入り口にあるよ」

感謝の言葉を言ったマリアさんの質問にライオが墓の方向に指をさしながら答える。

マリアさんは、そのまま森に向かい俺達もそれを追う事にした。

マリアさんは、まず手下たちの墓に向かい胸に右手を当てて瞑目する。数秒程でやめるとマリアさんは、振り返って後ろで様子をつかがっていた俺達に語りだした。

「話したいことがいくつかあるのだけど、まずはあなた達が危険な時に傍に入れなくてごめんなさい」

「そんなことない！ お母さんは悪くないよっ」

「そうだよ！ 母さんは悪くない！」

マリアさんの言葉にすぐさまエリーが反応し、ケインが続く。他もしきりに頷いている。

「ありがとう。でも、これは私がしたいから謝ってるの。だから、みんながもし許してくれるなら違う返事がほしいな」

みんなは、マリアさんの言葉をいまいち理解できていないみたいだ。しょうがない。

「分かった。いいよ！」

「いいぜ。許してやるよ」

俺が言うつとフェイも笑いながらつぶいた。これでみんなも意味が分かったらしく許しの言葉が続く。

「みんなありがとうね。それとみんな、怖い思いをしたらどうけど良く頑張ったわね」

「アリスとケインは弟妹 きょうだい を身体を張って守ってくれた。シユレは結果として暴走してしまっただけど兄貴分として家族の

事を大事に考えてくれた。エリーは怪我したみんなを得意の魔法で癒してくれた。トビアスは、みんなが満身創痍な中で自分ができることを考えて動いた。ライオはどんなに怖くてもその気持ちにのまれないでくれた。ベルとフェイは頭を働かせてできるだけ家族に危険がないように動いてくれた。母さんはそんなあなた達を誇りに思うわ」

マリアさんの言葉にみんな思うところがあつたみたいで感極まつて目に涙が溢れそうになりだした。正直、俺もマリアさんの言葉にちよつとだけウルつときてしまった。

「その上で、みんなには、特にベルには知つてほしい事があるの。この世界には純粋な悪人がいる。息をするように嘘をつき、平気で人を親しい人を殺すような人が。そう言う人たちはあなた達の油断や躊躇に付け込んであなた達の命を奪おうとする。この中にもそれが分かる人もいるでしょう」

マリアさんがそう言うのと、アリスとシュレが頷いた。この2人はそんな人に出会ったことがあるのか？　もしかしたら、今孤児院ここにいる理由に関係があるのかもしれないな。

「だからと言って悪人が全員そう言う悪人じゃなくて、そんな悪人とは正反対の人でも仕方なく犯罪を犯してしまった人もいる。難しい話なんだけど、あなた達には自分の眼でそれを見分けられるようになってほしいの。今は分からなくてもいい。ともかく今言ったことを忘れないで頭の隅においておいて」

ライオやエリーは頭の上に？マークが浮かんでいる。そりゃそうだ。今マリアさんが言ったことは地球でも解決していない哲学の1つだ。いわゆる、陰陽2元論ってやつか。子供には、あまりにも難解な問題だし、少しでも言ったことを理解してるアリスやケイン、シュレ、トビアスがおかしい。きつとシャロンもそうなんだろうな。多分この中で一番真理に近いのはこの中でダントツに長く生きてるフェイなんだろうな。

(フェイは分かるか?)

（まあ、な。だが、この考え方は個人の価値観で見方でどっちにもなるからな。この問題に関しては絶対の正解はないだろうよ）

やっぱり、長く生きてるやつは違うな。そういう考え方が自分の中でしっかりできてる。

「私の話はこのなところよ。私はベルと少し話があるから先に孤児院に戻っててくれる？」

マリアさんの表情が和いで、場の空気も軽くなる。

「よし、じゃあみんなでさっきの続きするか」

フェイが空気を読んで先頭をきって孤児院へ走りだす。それに面白がったライオが続き他の人も笑いながら孤児院に歩いていく。

みんなが声の聞こえないところまで行くと俺とマリアさんの2者面談が始まった。

第四章 1 帰宅（後書き）

次話は水曜前後に投稿する予定です。

第四章 2 相談（前書き）

どうも！

今回も短めになってしまいました。

一応次の話で一気に期間が跳ぶ予定になっています。

文章、ストーリー評価ありがとうございます！

お気に入り登録ありがとうございます！

8月の始めに試験期間が終わるのでそれまでは4、5日の更新になると思いますが、宜しく願います。

第四章 2 相談

ラージの森の入口には、孤児院にある異世界の食べ物や衣服を狙って襲撃してきたグラハ山賊団の墓がある。

墓を作ろうと言い出したのはフェイらしく、それにみんなが続いたようだ。

らしいやようとやっているのは、その時に俺が気絶してて居合わせなかったからだ。

マリアさんと俺は、フェイ達と別れ手下達の墓からグラハの墓の前に来ている。

グラハの墓には、グラハの武器である2m近い大きな斧と、赤と青の花が数本置かれている。

マリアさんは、さっきと同様に右手を胸に当てて瞑目しながら口を開く。

「グラハって名前は知らないんだけど、戦争の時に斧を武器に使っていた騎士を見かけたわ。その人かは分からないけど、騎士は剣を装備するのが普通だったのに斧を使っていたし、大きい体格を利用した攻撃は派手だったから余計に目立っていたのよね」

「それじゃあ、グラハが騎士団に所属したのはウソって訳ではなんだね？ 何でそんな人がこんな所で山賊やってたんだろ？」

「そのひとと決まったわけではないわよ。そうね、それを説明するには今の世界の情勢から説明する必要があるわね。今の世界情勢は魔族が、一番力が強く、それに竜人族、獣人族と続いて、最後に人族という状況なの。この順位は中央戦争での種族間の勢力差で人族は私を含めてまともに他種族と戦える人材が少なかったから4種族内で一番劣勢だったの。いや、敗戦だったと言ってもいいわ。ピースフルが出来て、和平交渉が行われた時、一番劣勢だった人族が多額の賠償金が課せられたわ。人族のトップ首都『ヒューワン』にいる国王はその賠償金を支払うために住民からの増税と騎士団の再

編成を決めたの。もちろん、反対する人はたくさんいたんだけど、国王自らが住民の前に出てきて頭を下げて一応納得してもらったわ」なるほど。地球で例えると、魔族がアメリカ力で人族が日本やドイツってどこか。確かに、戦争に負ければ相応の見返りは求められるし、その政策については分かるけど……

「再編成したのは分かりませんが、グラハの指揮能力は優秀で、実力も高いと思うのですが、それで騎士団をやめさせられたの？ その部下たちなら分かるけど、10人隊隊長って名乗ってたし普通ならやめさせられないと思うんだけど……」

「私も戦争が終わってあまり日のたたないうちに旅に出たからこれは推測なんだけど、私がいた頃の騎士団に所属してた人は、貴族出身と庶民出身がいたの。それで、再編成の時にその貴族出身の騎士が上層部の貴族に取りあつて無理に残った可能性があるの。その貴族達の代わりに除名されたのが庶民出身の騎士でグラハもその中に入っていて山賊になったんじゃないかしら」

「どこの世界にも性根の腐ったやつはいるもんだな。そんな奴らのせいでグラハはこんなことになったのか？ グラハを殺さなくちゃいけばよかったのか？」

推測かもしれない。しかし、地球にも権力を振り回す無能なやつはたくさんいたし、リアル貴族を見たことはないが、良いイメージはわかない。異世界に来て権力の理不尽さを目の当たりにしてほとんどん怒りがわき出てくる。

「そうしたら、今の騎士団のほとんどが貴族の息がかかった人たちってこと？」

「私の推測が正しければ………ね」

はい、決定！ マリアさんの考えが外れるとは思えないし、今後一切人族の騎士団には近づかないぞ！ 俺の大学にいた金持ちも絡みがウザくてむかつくし、無駄にプライドが高くてめんどくさかつたし。この世界でもそんな変わらないだろうな。ていうか、もしヒューワンにおいて貴族達の毒牙にかかっていたら…… いや、ない

ない。彩花はのほほんとしてるようにみえてしつかり考えてるし、フエイ同等の力を持ったやつが近くにいる見ただし大丈夫か。

「マリアさんの、貴族の人たちの印象ってどんな感じなの？」

「うーん、一部を除いて自分の利益しか考えない人たちだったわ。いつも自分より上の人にくつついて甘い汁を吸って、下の人間は簡単に切り捨ててたわね。私も、騎士団にいたころ言い寄ってきてあしらうのが大変だったわ。それも、私が人族の中で力があつたからと、師匠とのパイプがほしかつたって理由なんだろうけどね」

マリアさんも苦勞してるんだな…… あれそう言えばグラハは何でギルドとかに入らなかつたんだろう？

「でも、何で山賊なんだろう？ この世界じゃマリアさんみたいにギルドに入ることでもできたし、小さな村とかで自警団をすることも出来たと思うのに……」

「それは、本人にしか分からないことね。ギルドは特例を除いて15歳以上は性別種族関係なく誰でも登録できるようになってるし、チームを組んで依頼に当たることと許されてるのだけだね」

今となつては謎のままってことか。気になるな……

「まあ、この話は考えてても答えは出ないからこれくらいにして本題に入りましょうか。違うんなら別にいいんだけど、ベルはグラハを殺したことを引きずっているみたいね」

「……はい。フエイに聞いたの？」

「違うわよ。大体、戻って来てすぐにここに来てるのに聞く時間なんてなかったわよ。さつき、私に報告してるときに殺した話になつたときに表情が硬くなつたし、声の高さも少し低くなつたから気になつてカマをかけてみたのよ」

そんなに分かりやすかつたのか？ 普通に話してたつもりだったんだけどな……

「さつきみんなに言つたみたいに気にしなくていいのよ？ グラハからどんな話を聞いたかは知らないけれど、犯罪を行ったことに変わりはないし、こんな辺境の地では逮捕しても拘留する場所がない

から死罪にしちゃうのよ。だから、深く考えない方がいいわ」

「フェイにも似たようなことを言われたよ。でも、頭では理解しても納得ができないんだ」

「ベルの国は平和だったみたいだし、しょうがないのかもね。でも、この世界で生きていくには殺すことに慣れないといけないわ。この世界では殺すことを躊躇 ちゆうちょ すると逆に殺 や られる可能性があるし、それが自分じゃなく家族や仲間、大切な人が死んでしまう時だってあるわ」

「確かにそうだけど……」

「犯罪者の中にはそれをを利用して付け込んでくる奴がいるってさつきも言ったでしょ。犯罪者には譲歩しちゃだめ。向こうは死ぬことを覚悟して犯罪を続けてるんだから。それでも殺したくないなら色々なことを学ぶ必要もあるし、相手を無力化出来るくらいの実力もつけないと。といっても、実力は充分だと思うから後は知識をつけるだけだと思うけどね」

「……」

「グラハを殺したことを気にしてるならお門違いよ。グラハの指示で彼らは私達の孤児院 いえ を襲い、家族を傷つけた。もし、あなた達がしていなくても私が必ず殺していたわ。忘れないで、彼らは家族を傷つけたの」

「それに、ベルが本当に気にしているのは別の事でしょ？」

「そんなことないよ」

「いえ、違うわね。あなたが本当に気にしてるのは、人殺しをした自分を彩花さんがどんな態度をとってくるかってことじゃないの？」

俺は、何も言わず足元に視線を向ける。

「私は、直接彩花さんと会ったことがないし、あなたの世界を見たことがないから気休めにしかならないけれど、彩花さんの態度は変わらないと思うわよ」

マリアさんが強く言い切る。一度も会ったことないのに何でそこまで言えるんだ？

「……………何で言い切れるんです？」

「女の勘、かしら？ 私も女だからなんとなく分かるのよ」

「そうか……………確かに母さんの勘は良く当たるよね」

「私が言ったことはこれから何かを考える時に思い出す程度に覚えていてくれればいいわ。楽になった？」

「うん。少し吹っ切れた気がするよ。話を聞いてくれてありがとう」
「そう？ 何かあったらまた話してね？」

「マリアさんは笑いながら言うてる。フェイと言い、マリアさん
と言い、俺の周りはお人よしな人が多いな。」

「わかったよ」

「それじゃあ、みんなの所に戻りましょうか」

「そうだね、長く話しこんじゃったし、暇を持って余してるかもね」
俺とマリアさんはグラハの墓を離れて家族の元へ向かった。

俺とマリアさんが森を出たあたりで、ふと言い忘れていたことを
思い出し、それをマリアさんに伝える。

「そうだ、後で母さんに少し聞きたいことがあるからよろしくね」

「いいけど、今じゃダメなのかしら？」

「フェイもいないとダメなんだよ。それに、もしそれが出来るって
なったときにみんなの意見も聞きたいしね」

「そう？ じゃあ戻ったら直った集会広場の確認がてら話し合いも
しましょうか」

「そうだね」

伝えたいことと言ってスッキリした俺は、軽快な足取りで孤児院に
向かうのだった。

第四章 2 相談（後書き）

次の投稿は土曜前後になると思います

第四章 3 反省と提案（前書き）

どうも！

やっと20部になりました！

最近筆の進みが悪かったんですけどちょっと調子が戻ってきました！
来週の火曜に試験が終わるのでそれまでは今の間隔になると思います。

お気に入り登録ありがとうございます。

これからも継続的に投稿していくつもりなので宜しくお願いします

第四章 3 反省と提案

「それじゃあ、第何回か忘れたけどクライン家族会議をはじめまーす」

パチパチ ピーピー ワーワー

さつきリニューアルした集会広場は、部屋の外観は変わっていないものの、戦いで壊れた木を形にただけの乱雑な机と木の丸椅子は10人以上座れる形も綺麗に加工された洋風のテーブルと背もたれと腰掛け部分にクッションがついた椅子に変わっている。そのテーブルに調理場の方から左にエリー、ライオ、シュレ、トビアス。右に、マリアさん、フェイ、俺、ケイン、アリスという配置になって座っている。

今回の司会役、ケインが立ち上がって、始めの言葉を言うと共に全員が拍手や、指笛、声を出すといった行動で反応を見せる。指笛と声は、悪乗りしたシュレとトビアスがやったんだけどな。ほんとにこの2人は、いろんな意味でムードメーカーをやってるよ。隣でフェイも苦笑いしてるし。いつもなら率先して騒ぎ出すのに出遅れたみたいだな。

「それじゃあ、今回の話をベルに説明してもらおうか」

「オツケー」

ケインに指名されて俺は立ち上がる。

「まずは、今回の件で母さんが謝ったけど、俺にも落ち度があったと思う。だからそれについてまずは謝らせてくれ。今回は、売りに出していた食品がそこまで人気になってるとは知らなかったし、それを手に入れるために襲ってくるとは思わなかった。そこで、いくつか提案があるんだ」

「1つ目は、孤児院の周りに見張りを置きたいと思っただけかどうかかな？」

「それは、どんな感じのものなのかしら？」

「今考えてるのは魔法で自立型のものを創るか、もしできるなら手っ取り早く何かを召喚しちゃおうかってところかな。創ろうと思ってるのは石で出来た人形で、俺の世界ではゴーレムって呼ばれてる身体が岩石で出来た空想の生物で、自我をもっているんだよ。絵にするとこんな感じ」

俺は、部屋の角にある棚から紙と鉛筆を取り出して、某モンスター育成ゲームに出てくる心根が優しい岩の巨人を描きどんなことができるかも横に記していく。もし意識があるなら、性格は設定のままがいいな。技は全部使える状態にしておいて、口からビームとか打てるようにしようかな？

「どうかな？ 出来そうかな？」

「ベルの頭の中で形になってるならできるだろうけど、自我を持つかは分からないぞ？ それに、召喚もできたとしても言う事聞くかないかもしれないから色々試してみないと」

「確か地属性の最上級魔法に似たようなにあるのを師匠から聞いた事があるわ。でも、それは自我を持っていない人形を作るだけで術者が自分で操作しないと動かないから、あまり使い手がないって言うってたわね」

やっぱり、この世界にもそう言う魔法はあるんだ。でも自我がないってことは子供の魔法先生の師匠が持つてる人形使い ドールマスター 位のスキルがないと扱いにくそうだな。そういうのってほとんどがガタイが大きいだけで動きが鈍いからただ的になるか、壁にするか位にしかなれないもんな。ゴーレム創る時は敏捷性にも注意しよう。

「もしベルがゴーレムを創ったとして、ご飯とかはどうするの？ 私達と同じものを食べるの？」

「俺の想像通りにできればご飯はマナを吸収させるようにしようと思ってるからいらなと思うよ。もちろん食べようと思えば食べられるようにはしておくつもりだけどね。その時は、俺達が食べてるようなものでもいいし、岩や石も食べるはずだからそれをあげても

「喜ぶと思うよ」

「わかった」

「それでもみんなにお願いがあつて、もし見張り役が出来たら名前を付けてあげて欲しいんだ」

「名前つてゴレムじゃないの？」

「ゴレムは種族の名前で、個人の名前じゃないよ。アリスだつて魔族のアリスでシュレも竜人族のシュレでしょ？」

「あつ、そっかあ！　じゃあいい名前考えてあげないとね」
「よろしくね」

「2つ目は、今回の反省を踏まえていつどこにいても帰つてこれる道具と、いつでも連絡を取れる道具を作ろうと思つてるんだよ。名前は、まだ仮名だけど転移符と魔電にしようと思つてるんだ」

「？」

「例えば、母さんがピースフルにいるとして、事前に孤児院に行きたい時に転移符を使えば一瞬で孤児院にこれちゃうつて物で、魔電は、母さんがピースフルにいて俺達が孤児院にいても、すぐに連絡がとれちゃうつて物だよ。これがあれば何時でもこっちの状況が分かるし、危険な事になつてもすぐに駆けつけられるよ」

「確かにそれがあれば凄く便利になるかもね……」

「でしょ？　で、その道具も出来上がったらみんなに名前を付けてもらおうと思つてさ」

「でもそんな道具が出回つたら、特に悪用しようとする人に渡つたら世界が混乱しちゃうわね」

「それは、魔電と転移符に認証機能を付けておくから大丈夫だし、あくまで家族専用の道具にするから商品化はしないよ。ちなみに、認証機能は指紋つて言うのを利用した技術予定だよ。俺の世界ではすでに使われている技術で、指の腹にある渦巻きの形が人それぞれ違うことを利用したものなんだ。この世界でも同じか確認する必要はあるけど、俺の世界でもいろいろいな人種がいたけど違ったから、多分大丈夫だと思うよ」

俺がそう言うともみんなが自分の手のひらを確認しだす。

「気になるなら今調べてみる？」

俺はゴーレムの絵を書いた紙を裏返し、赤色の液体と大人の手のひらが入る位の容器を創造する。

子供達は、我先にと容器に手を突っ込み、赤く染まった手を紙に押し当てて行く。

マリアさんも気になるのか席を立ててみんなの様子を見ながら手をもぞもぞさせている。

「おお、本当に違う!!」

「えっ、本当に？」

「見てみるって！ みんな、少しだけ形が違うぜ!？」

「ああ！ 僕のもんの上に押さないでよ！ 分かんなくなっちゃったじゃないかあ！」

「しょうがないじゃない！ もう押し付ける場所がないんだもん！ 最初は、仲良くやってた筈なのに、何時の間にか喧嘩腰になり始めてる……」

「新しい紙用意するから喧嘩するなよ！ 後、色を落とすのが面倒だからテーブルには零 こぼ したりつけたりするなよ！」

棚から十数枚の紙を取り出してテーブルの真ん中に置く。ついでに、他の色のも創っておくか。

さっき創った赤色の液体の他に、青、緑、黄色の液体を新しく創り出す。

シユレとアリスが新しい色に飛びつく中、ケインとライオが少し離れた場所で見えていたマリアさんの手を引きながら話しかける。

「母さんも見てないでやろうよ」

「みてみて！ ほくのてまっかっかになっちゃった!!」

マリアさんもやりたそうにしていたから、そのまま輪の中に入ってきた。

「お母さんは何色がいい？」

「いろいろあるんだぜ!!」

エリートとトビアスがマリアさんの前に容器を持っていく。

「あら、本当にみんなと違うのね！」

マリアさんも感嘆の声をあげる。

でも、この感じだと地球と同じで指紋は個人で違うみたいだな。そしたらみんなの指紋を入れれば出来るな。

ん？ そういえば、フェイの指紋ってどうなんだろう？

「なあ、フェイの指紋ってどうする？ モードによって違うんじゃない？」

「多分、ベルと同じ指紋になってると思うぞ？ 試してみるか？」

フェイは、青色の液体に手をつ込み紙に手形を作り、続いて俺も青く染まった手をフェイの手形の隣に当てる。

うん、確かに同じだな。機械で調べても95%以上の確率で同一人物って言われるくらいに一緒だわ。

「これって変えられるの？」

「意識すれば姿形変えられるだから変えられるんじゃないか。けど、わざわざ変えるのがめんどくせえし一緒でいいよ」

「そうだな。仕事を増やす必要もないし大丈夫か。そろそろ話に戻りたいから一度席に戻ってく……………れ？」

俺がみんなの方をみると、顔や服の要所がカラフルになっている姿が見える。もちろんマリアさんも込みだ。あれ？ 色々あって疲れてるのか？

一度視線を外して右手で目頭を押さえてから再度確認する。

残念ながら幻じゃなかったみたいだ…………… さっき注意したばっか

だったのに。あまりの力オスぶりに自然にため息が出てきてしまう。

「溜息すると幸せが逃げちまうぞ？」

今幸せになりたいよ……………

「とりあえず部屋を掃除しておくんで、みんなで風呂に入っていこい！！」

俺の剣幕にみんな一度え動きを止め、有無を言わず風呂に向かいます。それにフェイも続こうとしたが肩をつかんでその場に止まら

せる。

「俺も手が汚れたから風呂に行きたいんだけど……？」

「フェイは俺と一緒に部屋の片づけに決まってるだろ？」

言外に押しつけんなよと言う意味を込めて笑いかけてやった。

フェイは、諦めたようで身体から力を抜いた。まずは、水ぶきからだな。

俺は、雑巾を取りにフェイを連れて倉庫に向かうのだった。

「それでは、さっきの話を続きをするぞ」

俺とフェイ、風呂からあがってきた人から手伝わせて部屋を元の状態にした俺達は、再び会議を始める。

「さっきので指紋の有無は確認できたので、認証機能は指紋を使ったものにする。反対の人はいる？」

「いないよー」

「それはベルに一任するわ。私には分からないしね」

「別にいいぜ！」

「俺も兄貴と同じだよ！」

「それでいいよ」

「私もみんなと同じよ」

「私も……」

全員の返事を聞いたので話を進めるか。

「道具はこれからフェイと色々試しながら創っていくから、手伝わしてほしいことがあったら言うからよろしく。それで、これから食料を売りに出しに行くかってことだけど、母さんに一度村に行ってもらって何があったかと、襲ってきたらどうなるかを伝えてもらって、その後は見張りか道具のどっちかが完成するまでは保留することにしようか。また、今回みたいなきごとがあったときに対応できなくないっちゃんうし、今までも不定期だったから大丈夫だと思っただけどうかな？」

「それは私も考えてたわ。このまま村に行かなくてもいいけど、グ
ラ八達のうわさを聞きつけて違う集団が襲ってくるかもしれないも
のね。後は、念のために動物避けの結界の他に人避けの結界も張る
うかしら」

「そのほうがいいね。他は何かあるかな？」

俺が問いかけるとみんな首を横に振って意思を示す。

「フェイは何かある？」

「うーん、森にも入らない方がいいんじゃないか。山賊達の血の匂
いに釣られて動物達が近くに來てるかもしれないしな。食料なら俺
達の魔法で創れるわけだしな」

「母さんはどう思う？」

「そうね、私も賛成よ」

「じゃあ、森に入るのも母さんに許可が出るまでダメってことで。
俺の議題はこれで終わりだよ」

俺は、言い終わったので自分のいすに座った。

「それじゃあ他にある人はいるかな？」

司会のケインが全員に確認する。

「ないみたいだから今回の会議はこれで終わりです。ありがとうご
ざいました」

ケインが最後にしめて会議が終わり、各自が手を上げたり、足を
伸ばしたりしてリラックスモードに入る。

「それじゃあ、これからご飯にしましょうか。私達で作ってるから
ベルとフェイはお風呂に入ってきてなさい」

マリアさんが、調理場に向かいながら俺達に声をかけた。俺達は
返事をするとい日の汚れを落とし風呂に行った。

とりあえず、いくつか問題が片付いたし良かった良かった！

第四章 3 反省と提案（後書き）

次話は火曜か水曜に投稿する予定です。

第五章 1 模擬戦1（前書き）

どうも！

今日で試験が終わりましたが、部活が忙しくなってきたのでもしかしら投稿が遅れるかもしれません。そこは勘弁してください。

今話は時間軸が一気に飛んで半年後になってます。

大分説明会になってしまいましたが、許してください。

トビアスの愛称をトビに変更しました。他の章も後日改稿します。

お気に入り登録ありがとうございます。

これからも長い目で見てもらえたら幸いです。

第五章 1 模擬戦1

この世界の一年は年初の月から始まり、春の月、春の月、夏
の月、夏月の月、秋の月、秋の月、冬月の月、冬月の月、年
終の月の10の月からなる。俺がこの世界にやってきたのが秋の
月、シャロンがピースフルに行つて、留守中にグラハ達が襲つてき
たのが年初の月と言うことになる。この暦は、中央戦争後4種族共
通の暦として作られ完全に定着していかないものの徐々に一般大衆に
受け入れられつつある。ちなみに、月に四季の名前が付いているが、
孤児院の周辺は気候の変化があまりなく、冬の月はちょっと肌寒
いかな？くらいで、夏も気温が少し高くなるくらいだ。

あれから約5か月が過ぎ、俺がこの世界に来てもうすぐ一年にな
る。孤児院の周辺には獣除けの結界の他に人除けの結界が張られ
ている。

会議が終わつた数日後マリアさんはフロン村に赴き、孤児院を襲
つたグラハ山賊団がどのような結末に至つたかをアレンジを加えて
話して回り、家族に手を出したら制裁を加えると言い残してきたそ
うだ。グラハ山賊団は地元でも力のある集団だった事と、マリアさ
んが有名だった事が賊達の抑制力となりその後孤児院に襲つてくる
事は無くなった。

見張り役として考えていたゴーレムとライガーは、フェイと何度
も話し合つて案をねり、ひと月程前によく誕生させる事ができ
た。名前は、ゴーレムが「ゴン」、ライガーが「ボル」となった。

ゴンとボルができるまでにあたって、どうやって自我を与えるか
を与えるか、ボルの場合は命をどうやって生み出すかと言う点が最
大の難所だったが、フェイの前の世界での知識と俺の知識を照合し
て、ゴンの場合は核となる部分を創り、そこに自己学習能力と主（

この場合は俺）に基本は従う事を付ける事で形になり、ボルは、幼体からなら生み出せる事が分かり、誕生に至った。ボルに関してはただ出来たというしかない。フェイの前の世界での経験が活きた結果なのだが、唯漠然と出来たって分かるだけでとても説明できるような現象じゃなかった。

ゴンは、核が周りの岩石を集めて形になるようにしたが、それだけでは侵入者に負ける可能性があった為、核の周りには俺かフェイの最大攻撃位の威力がないと壊せない強度のバリアを常に核の周りに展開させ、体は岩石ではなく個人的に最強の金属と考えてるダマスラス鋼を創り、それをベースにさせて防御を完璧に近い状態にした。攻撃パターンもすでにいくつかインプットして、地属性の魔法を使えるようにしてある。勿論、口からビームも、マナを口元に収束、発射と言う形で再現し、試し打ちは空に200mの氷塊を浮かべて発射させ、結果は貫通、粉々に破壊となった。

思ってたよりも威力が高かったため、最弱、弱、中、強、最強と段階を設定し、普段は最弱で撃つようにしといた。最弱でも、当たり所によっては死んじゃう可能性があるから充分なんだよな。

ボルは、体に毛が生え始めた位の状態で誕生し、生まれた際に刷り込み現象が起きて最初に見た俺が親だと認識したらしくいつも俺の後に付いて来る。知能も高いみたいで、お座り、お手、おかわり、伏せといった動作を直ぐに覚えて、こっちの言っている事も理解しているみたいだ。

生まれて1ヶ月しか経っていないが、俺の足首位だったのが、既に腰位の高さにまでなり、後数ヶ月したら身長は完全に抜かされそうだ。

技は、牙や爪の攻撃の他に天属性の魔法を使えるようにし、機動力、中距離、遠距離の戦闘でも活躍できるようにした。今は、まだ風を少し操る程度しか出来ないみたいだが、将来的には天属性の魔法を使いこなせるようになるだろうと考えてる。

今は、森に入る事も許されてるからいつも森に行くシュレヤトビ

ーと一緒にいかせて経験を積ませてる。

まだ、野生の動物に手を焼いているようだけど、ベビラピをくわえて帰ってくる事もしばしばあるので、すぐに慣れるだろうと踏んでいる。勿論、狩りに成功すれば顎や耳裏、をグリグリっど？いて褒めてあげる。すると、気持ち良さそうに目を細めながらされるがままになったり、お腹を見せてお腹をなでてと意思表示してきたりするからもう可愛くてしかたがないんだ。その仕草は女性陣に大人気で結構甘やかされて育ってます。ちなみに、男性陣は大きい身体に技の実験で見せたロケットパンチやビームを見て目を輝かせて興奮して暇を見つけてはゴーレムの所に行ってるみたいだ。ゴンは、もう自分のフォームを調整できるみたいで、子供達と遊ぶ時は身体の角ばった部分をなくしたり、時には身体を分解して子供サイズにまで変えられるようになってたからビックリだ。余ったパーツは空中にブロック状にして浮かべて待機させており、たまに俺の練習として多方面から攻撃してもらったりして役に立っている。ゴンのおかげでゴーレムのイメージが変わっていく毎日といっても過言ではないかもしれないな。

道具の製作は今やっている最中だ。魔電話に関しては順調に工程が進んでいる。形は端末式ではなく、腕輪に宝石がついたデザインを採用した。端末式と違って持ち運びが楽なことから、耐圧、耐水耐熱などの高性能なものにしようと考えているから端末式よりも頑丈なイメージをしやすいからで、すでに試作機も出来上がっている。腕輪の中心には、宝石型の投影機をつけており、テレビ電話のような感じになっている。最終的には、SFで見るような立体の電話にする予定だ。

逆に、転移符の方は作業が進んでいない。行きたいところに転移符を一枚張っておけば、他の転移符を使うことでもいつでも行けるってものにしたいんだけど、イメージがはっきりしなくて全然進んでない。

失敗して別の場所に飛ばされましたじゃ話にならないから納得で

きるものができるまでは実験もしないつもりだ。
とりあえず、新しい家族が受け入れられたってことだな。

孤児院の時計の針が13時を指そうとする頃、早めに昼ご飯をとった孤児院に住む9人と1体と1匹は、玄関前に集合し、1週間に1度行われる模擬戦の準備をしている。

「みんな集まって、もうそろそろ始めるわよ」

孤児院の院長であり家長でもあるマリアさんがみんなに声をかける。動きやすいように、金色の長髪を頭の上に丸めてあり、大人の色気がにじみ出る豊満かつ鍛え抜かれた無駄のない体は緑色の半袖Tシャツに紺色のホットパンツを纏っている。訓練用の片手剣を腰に2本さしていて、どうやら今日の模擬戦に参加するみたいだ。

「ハイイ」

最初に返事をしたのは、孤児院の4男で最近4歳になったライオだ。トレードマークだった長髪をバツサリと切り、短髪になったライオは、赤の半袖に水色の短パンを履いて、腰には木製のナイフを2本ぶら下げている。今までは何かと甘えたり、家の中でエリーと遊んだりしていたインドア系だったが、心境の変化があったのが最近。シユレ達の後に続いて良く森に行くようになった。俺としては、子供は外で動いた方がいいと思ってるから凄く嬉しかったりする。

「もう準備できてるよ」

ライオの後に続いて返事をした最年長でいつもまとめ役を買っているアリス。短く切った赤い髪に、白と青柄の半袖Tシャツにスパッツを履いていて、褐色の健康的な肌がこれでもかと言う位に見える。最近では、マリアさんの弟子兼手伝いと言う名目でギルドのクエストについていき、経験を積んでいるみたいだ。マリアさんもアリスに合わせて低難度の依頼を受けているようだが、殆ど手助けなしでクリアしているようで、アリスも自信になっているみたいだ。

それでも、「母さんには全然かなわないから」と天狗にならずに毎日のトレーニングに精を出している。最近のスタイルはマリアさんを真似た魔法剣士で、今は訓練用の片手剣を腰に差している。

「もし兄貴に当たっても負けないよ！」

「ほく、そりゃ楽しみだぜ！ 当たっても手加減なしで行くからなっ！」

少し離れた場所から、孤児院の子供みんなの兄貴分的存在で長男でもある竜人族のシュレーダーとシュレの弟分であり、孤児院の3男のトビアスが歩いて来る。

シュレは、頭にタオルを大工風に巻いて黒のアンダーアーマーのようなピチピチの半袖にテカテカ光った膝元まであるズボンを履いている。

身体の要所にある竜人族特有の鱗は殆ど剥がれており、今は素肌が晒されている。

最近、マリアさんがクエスト中に竜人族の知り合いから龍化をコントロールする練習方法を聞いてきたらしく、マリアさんの監視の元で色々試しているようだ。成果も出てるようで、今日の模擬戦ではそれを使うと言ってたな。背中に木製の両手剣を背負っていて、表情からはやる気の高さが見てとれる。

トビーは、青色の生地を黒で背中に「炎」とプリントされた半袖に、サッカー選手のような青いトレーニングパンツを履いている。

褐色の肌には狩りや模擬戦で付いた傷跡がいくつか残っている。本当は傷跡を消すように治せるのだが、トビーは傷は男の勲章だと残すように言ってきたからその通りにした。エリーも、綺麗に治したかったようだが渋々従っていた。こういう考え方は男特有のものだから、女の子には分らないよな。

この半年は、魔族特有の強みである内包魔力量の多さを生かす為に、武術練習よりも魔法練習に力を入れてきていて、マナコントロールの上手さは子供達の中でも随一になっていて、基礎能力ですつと上に行くシュレの強化した状態にも引けを取らないほどになっ

た。

手には、俺が誕生日にプレゼントした、2丁の魔銃を持っていて、手の中で器用にクルクル回している。

「僕は何時でも大丈夫だよ」

「わっ、私も準備できたよ」

最後に、獣人族のケインとエリーがやって来た。

ケインは、黒地にオレンジのチェックの入ったポロシャツに、黒の半ズボンを履いている。目には俺お手製で視力強化が付与された眼鏡をかけている。眼鏡には他にもボタンを押すと自動マナ索敵や目標との距離を測ったりと結構な自信作になっている。肩には自作の弓と鏃が丸まった矢の入った矢筒を掛けている。

アリスは、フリルがついた白のワンピースを着ていて、水色の髪はツインテールに結んである。手にはこの半年前から扱い始めた木製の棍棒を持っている。アリスは、半年前の事件で改めて人に傷付けるような武器を使いたくないと思っただけで、俺の棒術を教える事になった。一応剣術の練習もさせているがあくまで自衛として覚えてるみたいで本職は治療みたいだ。まあ、アリスの人柄が滲み出た決定だから俺としては満足してるんだけどな。

「ウオン！」

「……………」

俺の足元と横には、青と白の体毛に、頭から2本の角が生え始めたボルと、身体を子供の大きさにしたゴンがいる。

ボルとゴンには対人戦の経験を積んでもらうために模擬戦に参加してもらおう。

「もし俺と当たったら真剣勝負だかな！」

俺の相棒であるフェイが隣で燃えていらっしやる。フェイは子供モードの状態で俺の小学校の左胸にふえいと名前ステッカーが貼られた半袖と紫色の体操パンツを履いている。ぶっちゃけ言って、懐かしい気持ち3割、恥ずかしいのが7割って所だ。なんでいつもそんなチョイスなのか分からないわ。

そして、俺は陸上用パンツに赤のタンクトップを着ている。今日の模擬戦は楽しみにしてたからな。誰と当たってもいい勝負が出来るだろうな。

「みんな準備が出来たみたいね。それじゃあ、今日の模擬戦の説明をするわね。今日は、1対1で武器、魔法共に使っていていいわよ。場所は、森に模擬戦用に張った結界内よ。結界内では相手の攻撃を受けたら当たった箇所が威力に応じて制限されるから気をつけてね。模擬戦は、相手から一本取った時点で終わりよ。審判は、私とベル、フェイがやるわ。何か質問がある人はいるかしら？」

「はい」

「はい、ケイン」

「お母さんは武器を持つてるけどもしかして参加するの？」

「するわよ。直接成長を確認したいから当たったら全力でくるのよ」

「やっぱりか。予想通りマリアさんはやる気満々のようだ。」

「はい」

「はい、アリス」

「もし、ゴンと当たったらどうするの？ 私たちの攻撃じゃあ、通用しないと思うんだけど」「そこは、みんなと同じ条件でやってもらうから心配しないでいいわよ。ゴンもそれでいいわね？」

「……」

何も話さないけど頷いたからわかったんだろう。早く喋れるようになって欲しいな。

「他にあるかしら？ ………………ないみたいね。それじゃあ、組み合わせを決めるわよ」

マリアさんは、ズボンのポケットから1本の棒を取り出した。棒の先端には赤、青、黄、緑、黒の色が付いた棒が2本ずつと色のついてないものが1本あった。

「余った人は、私が相手になるからね。みんな順番に引いてね」

マリアさんに言われ、全員が順番に引いていく。

さて、俺は緑だけど相手は誰だ？
「俺は緑だけど緑の人は誰だ？」

第五章 1 模擬戦1（後書き）

変な締め方ですみません。

次話は金曜前後に投稿したいと考えています。

第5章 1・5 模擬戦2（前書き）

読者の皆様お久しぶりです。

長かった夏休みも終わり約2カ月が経ち忘れられたかもしれませんが更新を再開したいと思います。

今話は前話に書き忘れたものなので短いです

これからの更新はリハビリも兼ねてゆっくり目に行きたいと思いません

第5章 1.5 模擬戦2

孤児院の入り口前、軽装をした9人と1匹と1体は先端に色が塗られた棒を回りが見やすいように顔の前に持っている。

フェイとケイが赤、エリーとアリスが青、俺とゴンが緑、ボルとシュレが黄、ライオとトビー、余りはマリアさんだった。

「あれっ？ この場合って母さんはどうするの？」

「まさか、自分が余るとは考えてなかったから決めてなかったわ。どうしようかしら？」

「11分の1を引くとは、マリアさんも凄いな。あんなに気合い入ってたのに闘えないのは酷だしな。」

「俺が母さんとやりたいな」

「ベルと？ ……そうね。それじゃあよろしくね。みんな対戦相手は分かったわね？ 順番は赤から行くわよ」

「分かった！」ぜ！

ケイとフェイが元気に返事をする。

「こういうたたかいは、さんぞくとやっていらいだよ。よろしくね、フェイ！」

「あれから頑張ってたのはよく知ってるぜ！ 手加減なしで行くから覚悟しとけよ！」

「いいよ。でも、かつのはぼくだよ！」

「へっ、言ってる！」

ケインは、手を握りながら、力強くフェイを見つめ、フェイも拳をゴキゴキ鳴らしながら負けない位の目力で見返している。

「2人とも気合い入ってるわね。5分経ったら合図を出すからそれまでは始めちゃだめよ」

「よっしゃあ！ 先に行かせてもらおうぜ！」

「あっ？！ズルいぞ！」

マリアさんの言葉に先に反応したフェイが一足早く転送板にむか

つて駆け出し、ケイが文句をいいながら慌てて動き出す。

さあて、どんな試合になるかな？ 経験も技術もフェイが上回ってる以上ケイの勝ちは望み薄だけど、それでも今回のルールが特殊だしやりようはあると思うんだよな。

「どつちが勝つと思う？」

「やっぱりフェイじゃねえか？」

「おれもアニキと同じだな」

「ボクも！」

「わたしも……」

アリスの問いかけに子供全員がフェイだと答える。

さて、どうなるかな？

??? side

中心都市ピースフルから約30〜40km程離れたフロン村にある宿屋の一室、部屋には木のベッドに薄い布を数枚敷いて出来た布団と一枚の薄い掛け布団が用意されていて、木の窓の隙間からは光が差し込んでいる。外はすでに日が頂点近くまで昇っており、外から商人や村人達の活気溢れる声が聞こえてくる。

その部屋に薄紅色の長髪を1つに結っていて長年使っているかのように所々糸がほつれている灰色の半袖と紺色のショートパンツを着ている1人の女性と首程まで切られた金髪と部屋には不釣り合いな真新しい赤と白の横縞よじまにプリントされた半袖のTシャツと可愛いウサギが前にプリントされているベージュ色の短パンを着た人の少女が外に出る準備をしている。

2人の前には荷物が入った手提げ《てさげ》袋が置かれておりどちらも荷物をベッドにだして整理をしている。

「ふむ、着替えた服もしまつたし準備はこれくらいか。忘れ物がな
いように気をつけないな」

荷物を折り畳んで袋に入れた女性が他にしまう物がないか確認し
ている。

「はい！ 私も大丈夫です。先生、今更こんなことを聞くのもな
んですが本当にいいんですか？」

女性の問いかけに元氣よく返答しつつもどこか恐縮している少女。
「いいとは何をだい？ 私にはまったく思い当たる節がないのだが
？」

「こうやって一緒に来ていただいでる事です。私としては馬車で
フロン村に来てからラージの森を抜けようと考えていたので、先生
の飛行魔法のおかげで予定よりも早く帰れるうえに道中の危険も皆
無になつていいことづくめなのですが、先生もこの休みで自国に戻
られたりといった予定があつたのではないですか？」

「それなら心配いらぬよ。向こうは娯楽が少ないから戻つてもす
ることはないし、こっちにいても厄介事を押しつけられるだけだか
らぬ。それに來ることにわざわざ挨拶しに來てくれる義理がたい可
愛い弟子の娘を一人で歸らせる訳にもいかないだろ？ それに君や
マリアから聞いていた家族に興味があつたしちようどよかつたんだ
よ」

女性ははそう言うと女子に笑いかける。

「それならいいんですが……」

女子は、まだ納得しきれていないようだがすでにここまできてい
るためその言葉に甘えることにした。

「それにしても、何度みてもその服は本当にいいものだな。あまり
おめかしに興味がない私でも一度でいいから着てみたいと思つてし
まう」

女性は女子が着ているシミ1つない綺麗な服を触りながら呟く。

「家に行けば母の服もありますし弟達にも事情を話せば作つてくれ
ると思いますよ。私も先生が綺麗な服を着ている所を見てみたいで

す

「そうか？ それでは楽しみにしていようか」

女性は期待で言葉を弾ませながら服から手を離し手提げ袋に手を伸ばす。

「それでは、準備もできたし村で食事をとったら向かうとするか。それでいいかな？」

「大丈夫です。幸いフロン村は他の村にはない珍しい料理が多くありますから先生の口に合う物もあると思いますよ」

「おいおい。私はいいとこの出身なんだから料理なんて基本食べられれば何だつて食べる種類だぞ？」

「それは失礼しました」

女性の優しい反論に女子は笑みを浮かべながら訂正する。

2人は、部屋に忘れ物が無いことを再度確認すると会話をしながら外に向かつていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8966t/>

僕は君の事が.....

2011年9月27日00時13分発行